
イノセント・アライブ ～命の選択と荒ぶる息吹～

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イノセント・アライブ 命の選択と荒ぶる息吹

【Nコード】

N0153Y

【作者名】

沙φ亜竜

【あらすじ】

『そのまま進む』

『一旦、立ち止まる』

提示された選択肢に、息吹は首をかしげる。

とりあえず立ち止まってみた。するとすぐ目の前に、大きな毛虫が落ちてきたではないか！

息吹には、選択肢が視える。

母親からあらゆることを選択するようしつけられ、いつしか選択肢が視えるようになっていた。

その母親は亡くなってしまったが、今の息吹は母親の友人だった小百合のもとで生活している。

息吹は親友のゆりかごとともに、小百合が学園長を務める、お嬢様学校と名高い藤星女学園に通っている。

そんなある日、息吹は近所の男子校に通う優季にひと目惚れする。ゆりかごに後押しされ知り合いにはなったふたりは、徐々に仲を深めていくのだが――。

「息吹ちゃん、どっちにする？」

お母さんがわたしをじっと見つめながら、両手に持ったお皿の上のケーキを交互に目の前へと掲げ、そう質問してくる。

いつもそうだった。

べつに怒ったり急かしたりするわけではない。

ただひたすら、わたしに選択させるのだ。

「うーんとねえ……、えーつとねえ……」

お母さんの右手のお皿には、生クリームの白とイチゴの赤が絶妙なコントラストを奏でる、ケーキのお姫様、ショートケーキが乗せられていた。

そして左手のお皿には、白いドレスに身を包みしっとりとした雰囲気を漂わせる、ケーキのお嬢様、レアチーズケーキが乗せられている。

わたしは小さい頃からケーキには目がないのだけど、その中でもショートケーキとレアチーズケーキは大大好物だった。

「はう、どっちも、たべたいよお……」

流れ出るヨダレを拭うことすら忘れ、わたしのキラキラした瞳はふたつのお皿の上を行ったり来たり。

目だけじゃなく頭も左右に大きく揺り動かし、ツインテールの髪を振り乱しながら、ふたつのケーキの姿を変わりばんこに視界いっぱいに映していた。

「うふふ、ダメよ、息吹ちゃん。ちゃんと決めないと」

笑顔のままではあったけど、言うことを聞かないと怖い、って思いは幼心にもあって。

「えっと、その、こつち！」

わたしはお母さんが右手に持つショートケーキを指差す。

「はい、どうぞ」

答えを聞いたお母さんは満足そうに微笑み、右手のお皿をわたしの目の前に置いてくれた。

もうひとつのお皿は、お母さんの目の前に。

「わーい、いただきまーす」

フォークを持ち、目の前のショートケーキに、わたしは手を伸ばす。

ぴたっ。

そこで、手は止まった。

視線の先には、チーズケーキを口に運ぶお母さんの姿。

フォークからお母さんの口の中へと滑り込んでいくレアチーズケーキの欠片を、わたしはただ黙って眺めていた。

「……………」

「あら？ 息吹ちゃん、どうしたの？」

「……………ん、と……………」

やっぱり、レアチーズケーキのほうがよかったかな。
わたしは口に出して言うことができなかった。

「ううん、なんでもない」

小さく答えたわたしは、ショートケーキをフォークで小さめに切る。そして、そのひと切れを覚束ない手つきでフォークに乗せ、自分の小さな口へと運んだ。
甘くて美味しい。

でも……。

レアチーズケーキのほうが食べたかったかも、という思いでいっぱいになっていたわたしの口に広がる甘さには、なんとなくほろ苦さも混じっているように感じられてならなかった。

「息吹ちゃん、美味しい？」

「……………うん」

お母さんの問いかけに答えるわたしには、愛想よく笑顔を浮かべる余裕なんて、残っているはずもなかった。

「おはようございます、息吹さん」

「あつ、おはよう、ゆりかごさん」

わたしが住宅街の真ただ中にある曲がり角まで差しかけると、いつものように制服姿の女の子から声がかけられた。

彼女は華美月ゆりかごさん。はなみつき

お嬢様学校と呼ばれる藤星女学園に通う彼女は、毎日この曲がり角の隅に立って、わたしを待っていてくれる。

もちろんこのわたし、神奈息吹も、れっきとした藤星女学園の生徒だ。

藤星女学園では、下の名前にさんづけで呼ぶのが通例となっているので、わたしたちもお互いにそう呼び合っている。

どんなに仲よしの相手でも、呼び捨てにしたりはせず、名前にさんづけで呼ぶ。それが学園のルール。

べつに規則になっているわけではないけど、学園の雰囲気もあってか、そのルールは堅実に守られているようだ。

「それでは、参りましょうか」

「ええ」

ゆりかごさんは優しげな笑みをたたえながら、ゆったりとした動作でくるりと百八十度回転して歩き始めた。

制服のスカートがふわりと微かに舞うことすら、優雅さを演出してくれているかのよう。

ウェーブがかった彼女の長い髪も風に揺れ、全身でひとつの芸術

作品みたいに思える。

この制服を着ているだけでお嬢様とささやかれるくらい有名な学校だから、わたしなんかだと登校時にも周囲の目が気になってしまっただけ。

そんな視線を受けてもまったく気にする様子もなく、ゆったりと歩くゆりかごさん。

彼女は完璧に、お嬢様だった。

それに比べてわたしは――。

「……どうかなさいました？」

「……いえ、なにも……」

ゆりかごさんがそつと見つめてくれる中、わたしはただうつむいて答えるだけ。

今でこそ少しはマシになってきているものの、わたしは昔から気が弱くて、人と話すのが大の苦手だった。

声が小さいのも、自分に自信がないことから来ているように思う。それに決断力も弱いため、なにをするにしてもなかなか決められなくて、優柔不断と言われてしまう場合も多い。

ゆりかごさんは、そんなわたしに愛想を尽かすことなく、中等部の頃から一緒にいてくれる大切な友人だ。親友と言ってもいい関係だろう。

彼女と出会ったのは、中等部に上がった初日。

新しい学校の新しい教室に入る決意がなかなかできず、ドアを前にしておどしているときだった。

彼女はいきなりわたしの手をぎゅっと握って、一緒に教室へと入ってくれた。

あのときの手の温もりは、今でも忘れられない。

それから丸三年とちょっと。

わたしはその頃とあまり変わっていないけど。

ゆりかごさんはいつでも、わたしのすぐそばで微笑んでくれていた。

「そうですか。それでは今日も一日、頑張りましょうね」

「……うん」

優しく包み込んでくれる彼女の横に並んで歩きながら、わたしは控えめに頷く。

わたしはただうつむいて歩くだけの状態だったのだけど、

「藤星女学園の生徒さんたちよ」

「やっぱり優雅ね」

ゴミ出しをしに来たらしいおばさんふたりが、ひそひそと話すそんな声が聞こえてきた。

……わたしは、全然優雅なんかじゃないのに……。

沈んでいるわたしのそばにいるとき、ゆりかごさんはいつだって、余計なことなんか言わずに寄り添ってくれていた。

そんなわたしだけど、実はちょっと変わった能力を持っていたりする。

「桜……もうすっかり散ってしまいましたわね」

「うん、そうね」

校内をゆっくりと散策するわたしとゆりかごさん。
といっても、お昼休みや放課後ではない。

今は一時間目と二時間目の合間にある休み時間。

藤星女学園では、移動教室の場合でもゆったりと慌てず騒がず歩いていけるよう、休み時間が長くなっている。

その分、午後の授業が終わる時間は遅くなってしまうのだけど。

ともかく、そんなゆったりとした時間経過の中で、藤星の学園生活は成り立っていた。

現に今だって、とくに移動教室というわけでもないのに、ゆりかごさんとふたりでお散歩しているわけだし。

学園の敷地はかなりの広さがあって、毎時間歩いていても飽きることはない。

……っていうのはさすがに大げさかもしれないけど。

藤星女学園は、初等部から高等部までがひとつの敷地内にあり、さらには藤星女子大もすぐ隣に並んで存在している。

女子大の敷地自体は一応、高等部までとは分かれていて、両校のあいだには高い壁が立ちはだかっているのだけ。

実際には何ヶ所かある通用門からお互いに行き来することが可能で、警備の人にチェックされたりするわけでもないから、ほとんど

同じ敷地内と言ってしまったていくらいだった。

わたしもゆりかごさんも、たまに大学の食堂まで行ってお昼ご飯を食べたりするし。

もつとも藤星女学園も女子大のほうも、不審者が敷地内に入らないよう、正門と裏門は厳重に警備されている。

だからこそわたしたちは、こんなにもゆったりとした学園生活を送ることができているのだろう。

——と、不意に。

微かな風が、ツインテールにまとめているわたしの髪の毛を揺らす。

そしてそれと同時に、わたしの頭の中に浮かび上がってくるものがあった。

『そのまま進む』

『一旦、立ち止まる』

浮かび上がってくる「もの」というより、「文字」と言ったほうがいいのかもしれない。

正確にはなんとなく、そんなふうに感じるだけではあるのだけど。

「息吹さん？」

すぐ右横に並んで歩いていたゆりかごさんは、わたしの表情がいきなり硬くなったのを感じたのか、首をかしげながらのぞき込んでくる。

わたしは優柔不断な自分の脳みそにムチ打って、瞬時に判断を下す。

今の今まで、こうやってこの桜並木の下を歩いてきているのだから、「そのまま進む」なんて、わざわざ改まって決断するようなことでもないはず。

ということは――。

×『そのまま進む』

○『一旦、立ち止まる』

わたしはピタリと、その場に立ち止まった。

「あら？ どうなさいました？」

もちろん、一緒に歩いていたゆりかごさんも、首をかしげたまま立ち止まる。

次の瞬間。

ぽとり――。

上のほうから――正確にはおそらく、桜の木の枝が葉っぱから、とっても大きくてなんだか鮮やかな色合いをした物体が、わたしたちふたりのすぐ手前の地面に落っこちてきた。

なんとそれは、大きな毛虫だった。

そのあとは、ちょっと大変だった。

毛虫に驚いたわたしたちが泣き喚き叫び騒いだから……ではない。
いや、実際のところ、わたしはそれくらいの勢いだったのだけど。

「あら、毛虫ですわね。可愛いですわ」

とかなんとか言っただと思っただら、ゆりかごさんはそつとしゃがみ込んで、事もあるうに細くて白い可憐な指先を、極彩色のまがまがしい毛虫へと伸ばし始めた。

「や、ちよつと、ゆりかごさん、ダメだよっ！」

慌ててわたしは手を伸ばし、うねうねうごめく毛虫まで数センチくらいにまで迫っていたゆりかごさんの手をぎゅっとつかむ。

だって、いくら本人が可愛いって言っているけど、毛虫なんだよ？
種類にもよるかもしれないけど、毛虫の毛って毒があるのもあるみたいだし……。

それに、毛のように見えても、ちよつと硬くてトゲのようになっている種類もあるらしいから、もし毒がなかったとしても、指に刺さってケガをしちゃうかもしれない。

とっても綺麗で透き通るように真っ白なゆりかごさんの指に、血の赤なんて似合わないよ。

それにゆりかごさんってば、普段から頻繁にスキンシップしてくるっていうか、わたしの手を握ったり首筋とかを触ってきたり、そんなことも多いわけだし。

毛虫なんかをつかんだ手で触られたりしたら、いくら親友とも言うべきゆりかごさんであっても、ちよつと嫌だ。

……こつちの理由のほうが強かったのかもしれないけど。

ともかくわたしは、ゆりかごさんの手をぎゅつと握って、彼女の瞳を見つめていた。

「あらあら、息吹さん。今日はとっても積極的ですね」

「いや、えっと、頬を赤らめて、そんなこと言わないで……」

わたしのほうも反射的に真っ赤になりながら、ゆりかごさんの手を離す。

「ふふふ、冗談ですわよ」

ほんとだろうか。

わたしは友達関係四年目になる今でもまだ、ゆりかごさんって人がよくわからないままだったりする。

ただ、彼女の行動のおかげで、毛虫に驚いたわたしが泣き喚き叫び騒いだりするようなこともなかったのだから、ここは感謝しておくべきなのだろうとは思っただけ。

ところで、さっきの「あれ」は、わたしが持つ能力。

頭の中に「そのまま進む」「一旦、立ち止まる」という文字が浮かんだ、あれだ。

なんだか知らないけど、不意に選択肢が「見える」ことが、わたしにはある。

いつ、どういう場合に視えるのか、自分でもわからない。

この能力がテストの問題とかにでも有効だったら、まあ、なんて素晴らしい能力なんだろう、と感動ものだったりするのだけど。そういう場合に選択肢が視えたことは、残念ながら一度もない。

お嬢様学校と呼ばれる藤星女学園や隣の藤星女子大は、それなりに学力レベルも高い学校ではある。

ただ、基本的にエスカレーター式だから、本人が望みさえすれば進学できないなんてことはほとんどない。

もちろん面接を受ける必要はあるし、藤星女子大への進学の場合にはテストを受ける必要もある。大学は一般入試も実施していて、敷地も別だからだろうか。

それでも一般入試とは分けられているため推薦枠扱いとなり、落ちることは稀らしい。

そんな環境だからか、この学園の生徒たちはみんな、通常、とても伸びりとした雰囲気の中で過ごしている。

もつとも、中間テストや期末テストがある以上、順位づけされるのは仕方がないようで、総合順位は掲示板に貼り出されてしまうのだけど。最低限の競争意欲は持たせようということだろうか。

そしてわたしの成績はどの程度なのかといえば、お恥ずかしながら、下から数えてほとんどすぐ、というくらい。

ありていに言って、おバカさんなのである。

トップクラスの成績を誇るゆりかごさんに教えてもらったりしながら頑張っているのに、どうしてなのかなあ。

はあ……。せっかくの能力も、上手に活かせなきや無意味だよね……。

と、そのとき。

また微かな風が吹き抜けていった。

『急ぐ』

『諦める』

……え？ なに？

またしても選択肢が視えたというのに、わたしにはまったく意味がわからなかった。

次の瞬間――。

予鈴のチャイムが高らかに響き渡った。

藤星文学園では、休み時間が長めに設けられているからか、授業開始三分前になると予鈴が鳴ることになっているのだけど。

「あら、ちょっとここからでは、教室まで遠いですわね」

そう、いつもなら戻る時間を考えながらお散歩しているのに、今日は毛虫の一件があったせいで、ついつい教室から遠い場所に立ち止まってしまっていたのだ。

とすると、おのずと答えは決まってくる。

○『急ぐ』

×『諦める』

「急ぎましょう、ゆりかごさん」

「ええ、もちろんですわ」

わたしの提案に、ゆりかごさんも頷く。

とはいえ、慌ただしく走ったりなんかしない。

お嬢様学校である藤星の敷地内で、スカートを振り乱しながら走ることはタブーとされているからだ。

もちろん、遅刻したら先生に怒られてしまうわけだけど。

でも、廊下を走って怒られることのほうが、この学園ではよっぽど恥ずかしい事態なのだ。

「息吹さん、ちょっとよろしいかしら？」

次の休み時間になった途端、クラスメイトの静香^{しずか}さんがわたしに話しかけてきた。

いつもどおりお散歩に出かけようと、わたしの席にゆったりと歩み寄ってきていたゆりかごさんよりも、さらに早く。

「はい、なんででしょう？」

「占いをしていただきたいのでしょうか？」

わたしの質問に答えたのは、静香さんではなくゆりかごさんだった。

どういうわけだか、少々不満顔なのが気にかかるところだけだ。

「はい、そうなんですの。お願いできますかしら？」

微かに首をかしげながら控えめにお願ひしてくる彼女に、わたしは否と答えることなんてできはしなかった。

「……ええ、いいですよ」

ちょっとだけゆりかごさんの顔色をうかがいつつ、わたしは静香さんの申し出を受け入れた。

わたしには選択肢が視えるという能力がある。

だけどわたしは、他の人にそのことを話したりはしていない。

ゆりかごさんにだけは話してあるけど、彼女もそれを言いふらし

たりなんて絶対にしない。

もちろん、いつでも好きなときに選択肢が視えてくれるわけではないし、それ以前に選択肢が視えるのって、わたし自身に関わるような決断を迫られるときばかりのように思う。

だから仮に能力のことを話していたとしても、それで占いや予言ができるわけじゃない。

とはいえ、勘が鋭いだけなのかそれともやっぱり能力が影響しているのか、わたしの占いは当たると評判だった。

普段の他愛ない会話の中で、ふと「息吹さんはどう思います?」なんて尋ねられた場合に、わたしの言ったとおりにしたら上手かった、ということが何度もあったからだ。

実際のところ、尋ねられたわたしのほうも、ただなんとなく思ったことを素直に答えたただだし、百発百中ってわけでもないから、能力とは全然関係ないと思う。

ただの偶然。

それでも、なにかにすがりたい、という気持ちもわからなくはない。

だからわたしは、占いをお願いされたら快く引き受けるようにしていた。

占いを聞いた人も絶対ではないというのはわかってきているから、もし言われたとおりに行動して失敗しても、文句を言ってきたりなんかはしない。

しいて文句を言うとするれば、わたしとのお散歩時間を減らされたゆりかごさんくらいだろうか……。

でもそんな彼女だって、わたしが占いを通じてクラスメイトとお話している姿を黙って見つめながら、ほのかな笑みを浮かべている

のだから、咎める気なんてないはずだ。

「それじゃあ、伺います。なにを占えばいいのでしょうか？」

「はい。今週末、伯母様のお屋敷でパーティが開かれるのですけれど、着ていくドレスが決まらなくて困っておりますの。どちらがいか、占っていただきたいのですが」

「ふむふむ」

わたしは静香さんが取り出した二枚の写真を眺める。

真っ赤な薔薇をイメージさせる明るい色合いのドレスと、淡い紫色で落ち着いた印象を与える大人っぽいドレス。

どちらも高価そうだ。

だけどこれって、わたしに聞くような内容でもない気がする。

お嬢様学校と呼ばれる藤星女学園に通っているとはいえ、わたし自身は全然お嬢様じゃないのだから。

こんなドレスなんて、もちろんお目にかかったことすらない。

「う、うゝん……」

さすがに頭を悩ませているわたしに、ゆりかごさんからひと言。

「そんなに凝視しても、息吹さんには品質のよさだとか色合いのセンスだとかなんて、わかるはずないでしょう？　いつものように、ビビッときたほうを選べばいいのですわ」

なんだかちよつと失礼かも、と思わなくもなかったけど、それは今さら気にすることでもない。ゆりかごさんからの扱いって、普段からこんな感じだし。

でも、彼女の意見はもつともだ。

そう考えたわたしは一度目をつぶり、軽く深呼吸をしてから、新たな気持ちで二枚の写真を見直してみる。

……あつ、なんか、こっちのほうが好きかも。

なんと適当な理由だろうか。自分でもそう思っけど。その直感を信じて、わたしは紫色のドレスの写真を指差した。

「えっと、こっちが、いいかな……」

「そうですよね、わたくしもそう思っていましたの！」

わたしの答えを聞いた静香さんは、両手を組み合わせながら、ぱーっと明るい笑顔を振りまく。

……そう思ってたなら、わざわざ訊かなくてもいいのに……。

と文句のひとつも言ってやりたい気分ではあったけど、他の人の意見も聞いておきたいっていうのは、誰しもが考えることだろう。全然占いなんて呼べないと思うものの、わたしの占いは、意外と的確なアドバイスをしてもらえると評判らしいし。

意外と、っていうのが、ちょっと引くかかるところではあるなとか。

わたしなんかの意見で物事を決めちゃって、本当にいいのかなとか。

思うところは多々あるけど、わたしの言葉を聞いて喜んでくれる顔を見ると、こっちまで嬉しくなってくる。

「息吹さん、ありがとうございました。またなにかあったら、お願いしますわね！」

「ええ。パーティ、楽しんできてくださいね」

笑顔を残して去っていく静香さんの姿を見送るわたし。
そのすぐ横には、ゆりかごさん。

「ふふふ、息吹さん、相変わらず頼られておりますわね。毎週何人かは、必ず占いをお願いしてきますものね」

「あ……えっと、ごめんなさい、ゆりかごさん。お散歩に行けなくなってしまうて……」

なんとなく責められているように感じたわたしは、素直に謝罪の言葉を述べる。

「いえいえ、気になさなくていいですわ。息吹さん、占いをして
いるとき、とてもいい顔をなさってますもの。見ていだけで、わ
たくしも幸せな気持ちを分けてもらえますのよ」

「ゆりかごさん……」

温かな彼女の言葉に、わたしの心の中も温まっていくなを感じた
……。のけど。

「それに、占いをしている息吹さんは集中しておりますから、わた
くしも楽しませていただきましたわ」

「……え？」

「ふふふ、やっぱり気づいておりませんでしたのね？ 占いをして
いるあいだ、サラサラの髪の毛を撫でさせてもらったり、ぷにぷに
の二の腕を触らせてもらったりしておりましたのよ？」

「ふえ？」

「それに……、制服の中にそっと手を入れて、お胸のほうにまで
……」

「えええええ！？」

突然のわたしの大声で、教室にいる人たちが一斉に視線を向けてくる。

「あの、えつと、ごめんなさい、なんでもありません。みなさん、お気になさらないください！」

慌てて言い訳をするわたしに、ゆりかごさんは口に手を当ててコ
ロコロとした笑い声を響かせる。

「ふふふ。冗談に決まっていますじゃないですか。目の前には、静香さんがいたんですのよ？　そこまでしたら、静香さんだつてなにごともなく占いを聞いているはずがないでしょう？　だいたいこのわたくしが、そんなことをするとお思いですか？」

悪いれた様子もなく言い放つゆりかごさんに、わたしは、

……してもおかしくないと思うてるから、あんな大声出しちゃったんだよ。

なんて、もちろん口に出して言うことはできなかった。

「今日は暖かいですね〜」

「そうだね〜」

わたしとゆりかごさんは、ゆったりと学園の敷地内を歩いていた。お散歩ではなく、お昼ご飯を食べに行くところだ。軽く汗ばむくらいの陽気の中、爽やかなそよ風がわたしたちを優しく包み込んでくれる。

「今日は、どこへ行きましょうか？」

「う〜ん、そうね〜……」

と、そこでいつもの選択肢が、頭の中に浮かんできた。

『レストラン』

『カフェ』

『大学の敷地内へ』

『学園の外へ』

藤星女学園の敷地内にはレストランとカフェがあるし、大学のほうにも同じようにレストランとカフェがある。

さらには学校の周辺にもオシャレなお店なんかが多く存在しているから、毎度毎度、迷ってしまうのだ。

なお、お弁当を持ってくる人も多いけど、わたしもゆりかごさんも、普段からお弁当持参ではなかった。

ゆりかごさんの家はお金持ちだから、毎日ちよつと高めのレストランで食べても大丈夫なくらいの昼食代を用意してもらっているらしい。

一方のわたしは、彼女の家ほど余裕があるわけではないという立場上あまり迷惑をかけるわけにもいかず、贅沢はできない身分。お弁当を作ってもらうのも大変だから、お小遣いをやりくりして昼食代に充てているのが現状だ。

もちろん昼食代はもらっているのだけど、最低限必要な金額つてのをしっかりと把握しているため、あまり多くはもらえない。

ただ、ゆりかごさんも一緒に食べるわけだから、わたしにつき合わせて毎日一番安いカフェで食べるのも悪いだろう。

だからこそ、お小遣いからも昼食代を捻出することになるのだけど。

とはいえ、べつにダイエットしているわけではないものの、わたしもゆりかごさんも基本的に少食。

軽い食事で済ませても全然問題なかった。
というわけで、

× 『レストラン』

○ 『カフェ』

× 『大学の敷地内へ』

× 『学園の外へ』

「今日はまた、カフェにしない？」

「ええ、いいですよ」

わたしの決断に、ゆりかごさんも素直に頷いてくれた。

選択肢が視えるというのは、わたしにとって、ものすごく助かる能力ではある。

昔から優柔不断で、決断したあとでもうじうじと悩んでしまいがちな性格だから。

でも選択肢が視えたときって、どうしてもその視えた選択肢に縛られてしまい、他の解決策を考える余裕がなくなってしまうといった弊害もあるのだけど。

わたしたちはカフェへと入り、サンドイッチセットを注文した。

サンドイッチと飲み物とデザートとのセット。

量は少なめだけど、サンドイッチの中身を豊富な種類から好きなように選べるため、人気のメニューだったりする。

タマゴは外せないとして、ツナやハムといった定番もあれば、サラダ系の軽いものやカツやコロツケなどのボリューム満天なものもある。フルーツ入りホイップクリームなんかも人気で、わたしもお気に入りだった。

中身としてタマゴ、ポテトサラダ、フルーツホイップをわたしが選ぶと、ゆりかごさんも同じものを選び、席に着く。

向かい合わせの席に座ったわたしたちが、お喋りしながらの軽い昼食に舌鼓を打っていた、そのとき。

不意にカフェの外が騒がしくなった。

「あら？ どうしたのでしょうか？」

窓から外に目を移すと、女子生徒たちが一定の方向を指差して、普段はあまり出さないような大きな声を上げていた。

「レストランが火事ですわっ！」

「まあ、大変。怖いですわねえ」

いまいち緊迫感が足りないお嬢様たちの声に、わたしたちも視線をさらに移動させると、確かにレストランの方向からだろうか、もくもくと煙が立ち昇っているのが見えた。

どうやら火はすでに消し止められたあとで、とくに被害も出てはいないみたいだけど。

わたしは、ほっと胸を撫で下ろす。

……レストランに行つてなくて、よかった。

そんなわたしの感想とは裏腹に、ゆりかごさんときたら、

「あら、レストランのほうに行っておけばよかったですわね」

なんて野次馬根性丸出しでばやいていた。

それだけじゃなくて、

「ふう……。息吹さんの決断って、やっぱり微妙ですわよね」

なんて、ため息をつきながら、わたしに非難がましい視線まで向けてくる。

ちょっと、ひどいよね？

さつきまではゆりかごさんだって、ここのサンドイッチセットはやっぱり格別ですわ、とか言って満足そうにしていたのに。

だけどわたしは、

「あははは……。ごめんね、ご期待に添えられなくて……」

と、沈みがちなつぶやきを返すことしかできなかった。

「それでは、戻りましょうか」

「ええ……」

サンドイッチセットを食べ終えて、ゆっくりとくつろいだあと、わたしたちはカフェを出た。

そして教室へと戻る帰り道のこと。

『右』

『左』

突然の選択肢。

……なによ、これ？ どういうこと？

よくわからず、呆然としてしまつわたしの頭の中に、さらなるイメージが重なる。

5、4、3……

数字が視え、それと同時に、カッチ、コッチと、時を刻むような音が……。

……え？ これって……、もしかしてカウントダウン！？
と……とりあえず、決めなきゃ！
わたしは深く考えず、即座に決断した。

○ 『右』

× 『左』

素早くわたしは右側に飛び退く。

すぐ右横を歩いていたらゆりかごさんに、思いっきり抱きつくような形になってしまったけど……。

と、その直後、わたしが歩いていた場所のすぐ左側辺りになにかが落ちてきて、地面に白いシミを作る。

それは、鳥のフンだった。

あ……危なかったー！

安堵の息をつくわたし。……だったのだけど。

「あらあら、息吹さん。大胆ですわね」

ぼつ、と頬を赤らめながらそんなことを言っているゆりかごさん

の瞳は、わたしのすぐ目の前にあって。

「あつ、わわわ、ごめんなさい！ でも、そういうのじゃないから……」

慌てて離れるわたしに、

「ふふふ、そういうのって、どういふのですかしら？」

なんて、ゆりかごさんは意地悪な笑みを向けてくるのだった。

下校時刻、辺りはすっかり黄昏色に包まれていた。

授業の開始時間が少し遅めで、休み時間も長めに取ってある藤星女学園は、帰る頃にはもうすっかり夕方だ。

日が長い夏の時期ならそうでもないけど、冬だと薄暗くなっているくらい。

だからなのか、部活動なんかは自由参加となっていて、どの部活にも所属していない人は結構多い。

わたしもゆりかごさんも、そんな中のひとりだった。

だいたい部活をしてから帰ると、辺りは真っ暗になってしまっわけだし。

学園の敷地内にある寮で生活している生徒以外には、なかなか難しいところだろう。なにせみんな、お嬢様ばかりなのだから。

もっとも、お迎えが来てくれるような家の人なら、問題ないのかもしれないけど。

「それにしても、夕方ともなると少々涼しくなってきましたわね」

「うん、そうだね」

ゆりかごさんの言葉を肯定しながらも、わたしはその涼しさをほとんど感じることなく歩いていた。

すぐ横で、ゆりかごさんが寄り添うように歩いていたからだ。

彼女はわたしの右手をぎゅっと握りながら、ボリウームのある髪の毛もろとも、頭をわたしの肩に乗せている。

それにしても、こんなにぴったりと寄り添って歩くんなんて。

ゆりかごさんって、いつもこんな感じなんだよね。
必要以上にべたべたくつついてきたり、手を握ってきたり……。

なんというか……。

そっちの趣味があるんじゃないかって思うくらい。

というか、周りの人たちから見たら、わたしもそういう趣味の子
だって思われちゃうんじゃないか……。

そう考えてはいるのだけど、ゆりかごさんは親友だし、わたしは
拒否することなんてできないでいた。

……べつに嫌ってわけでもないしね。温かいし、いい香りがする
し……。

って、なにを考えてるのよ、わたしは！

おかしい考えに至ってしまい、それを焦って振り払おうとするわ
たしは、きつと顔を真っ赤にしていたことだろう。

夕陽の赤さが、隠してくれるといいな……。

「あら、どうかなさいました？」

「うつん、なんでもない……」

すぐ右の耳もとから聞こえるゆりかごさんの声に、わたしは余計
に頬が赤くなっていくのを感じ、左側に顔をそむけてうつむきなが
ら小さく答えることしかできなかった。

……恥ずかしいし、早く帰りたいな。

とは思っものの、ゆりかごさんはいつもどおり、ゆったりゆっく
り歩く。

わたしとふたりきりの時間を噛みしめるように……。

実際、わたしの住む家は学園からそれほど遠くない。

待ち合わせ場所にしている曲がり角まで、あと少し。もう視界に入るところまで来ていた。

そこからゆりかごさんは、毎日ひとりで歩いて帰っていく。

曲がり角からゆりかごさんの家までは、結構な距離がある。

だからわたしは、一緒に彼女の家まで行ってもいいと提案してみたことがあるのだけど。

「そのあと息吹さんがひとりで帰ることを考えたら、わたくし、不安で仕方がなくなってしまいますわ」

ゆりかごさんはそう言って、きっぱりと断った。

「それに、短いからこそ、ふたりきりの濃密な時間が味わえるというのも、あると思いますわよ？」

さらにつけ加えられた言葉に、わたしはちよつと首をひねったものだけ。

こういう発言を聞いていると、ゆりかごさんってやっぱり、そっちの趣味がありそう、って思えてしまう。

ただ、彼女はわたしをからかって面白がっているような様子もあるから、確信を得るには至っていない。

だけど、どっちだって関係ないのかもしれない。

ゆりかごさんが大切な親友だというのは、疑いようのない事実なのだから。

と、唐突に――。

『このまま帰る』

『ちよっと立ち止まってみる』

いつもの選択肢。

ん〜……っとなん？

思わずわたしは、足を止めていた。

足を止めたということは、つまり立ち止まったということ。

「あっ！」

っと思ったときにはもう遅く。

×『このまま帰る』

○『ちよっと立ち止まってみる』

選択肢は、すでに選ばれてしまっていた。

「どうなさいましたの？」

寄り添っていたゆりかごさんも当然ながら一緒に立ち止まり、わたしの顔をのぞき込む。

「うっん、なんでもない」

そう答えながらも、わたしの足は止まったままだった。

それからすぐのことだった。ざわざわとした幾人かの声が、夕陽に染められた一角にこだまし始めたのは。

高校生と思われる男子生徒の集団が、曲がり角の向こうから現れたのだ。

どうやらそれは、近くにあるはるさめ春雨高校という男子校の生徒たちのようだった。

藤星女学園の指定通学路は、狭い道がほとんどなく、学校から近い道にはPTAの人が立つてくれている。もちろん、登下校時の安全を守るためだ。

そのせいか、春雨高校の生徒は、あえてこの道を外して登下校する人も多いらしい。

もともと藤星女学園が授業の開始時間と終了時間をずらしているのも、安全性を高めるためだと言われているから、藤星の生徒以外と出くわすことすら稀なだけだ。

そうは言っても、当然ながら藤星女学園専用の道路ってわけではないし、他の学校の生徒や近所の方々が通る場合だってある。

だからべつに、それは驚くべきことではなかった。

ただ、どうしても身構えてしまう。

小さい頃からずっと女子校生活だったわたしやゆりかごさんにとって、男性というのは、未知の生物みたいなものだから……。

それに、今日はなにかの行事でもあったのか、一度にたくさんの男子生徒たちが、この道を通っていった。

こんなにたくさんの男性がいる道を、平然と通ることなんてでき

ないよ……。

きつとさっきの選択肢は、このことを警告してくれたのだ。

あのとき立ち止まっていなかったら、ちょうど曲がり角に差しかったところで、大勢の男性の集団に紛れ込んでしまふところだったから……。

でも、そのわたしの考えは間違っていたというのを、このあとすぐに知ることとなる。

「ふふふ、やっぱり息吹さん、殿方は苦手ですね」

なんだか嬉しそうに、ゆりかごさんがつぶやく。

「……ほつといてよ。だいたい、ゆりかごさんだって、ずっと女子校なんだから同じでしょう？」

「ふふふ、そうでしたわね」

それでは、そろそろ行きましょうか。

わたしの言葉をさらりとかわすと、ゆりかごさんはすでに男子生徒たちが通り抜けた道へと、ゆったりとしたいつもの動作で歩き始めた。

もちろん、わたしの右手をぎゅっと握りながら。

と、そのとき、

「はうっ！」

ビビビッ！

わたしの体中に、あたかも電気が流れたかのような衝撃が走った。反射的に再び立ち止まるわたし。

ピンッと、つかんだままだったゆりかごさんの左手が伸びる。

「あら？　息吹さん、どうしましたの？」

「……………」

わたしは、ひと言も答えることができなかった。

でも、視線は如実に答えを語ってしまっていて。
わたしがじつと見つめるその視線の先をたどるゆりかごさんは、
にまっと、笑った。

「あらあらまあまあ、息吹さん、そうなんですのね」

「あ……あの、えっと……」

どう答えていいものやら、さっぱり言葉にできず、どもりまくっているわたしに、彼女はズバツと解答を示す。

「あの殿方に、ひと目惚れしてしまいましたのね？」

耳もとに唇を寄せて、心底楽しそうな好奇の瞳を向けながら、ゆりかごさんはささやいた。

そう、わたしの視線の先には、ゆつくりと歩く、ひとりの男子生徒がいたのだ。

さつき通りかかった男子生徒たちの集団と同じブレザーの制服に身を包んでいるから、同じように春雨高校の生徒だろう。

ちよつとつつむき加減でゆつくりと歩くその人は、さつきの集団とは違って、ひとりで歩いているようだった。

ただなんとなく、その横顔が、わたしの心にビビッと刺激を与えて……。

だけど……。

「いや、あの、その、ち、違っのっ……！　そそそそ、そんなじゃ、なくて……！」

「そんなじゃなくて、なんなんですか？」

「えっと、だから、ほら……！　え……」

「ほらほら、なんなんですか？　言ってみなさいな」
「いや、だからね……」

もごもごと口を動かすものの、言いたいことを上手く言葉にできないわたし。

「だから、なんですか？　もついいではないですか。隠さなくてよろしいですよ？　認めてしまいなさいな」

「いや、その、違うの、ただ……」

「ただ……？」

わたしはそつと、さっきの人の横顔を思い出す。
その横顔はまるで――。

「そう、ただちょっとだけ、お父さんに似てたから……。だから……！」

真っ赤になりながら、必死の抵抗を試みる。

でも、案の定というか、ゆりかごさんはより面白がってこんなことを言い出す始末。

「あらあら、息吹さんったら、お父さまラブでしたのね」

「あのねえ……、そういうのじゃないから……」

「ですが……」

つい今しがたまでちよつといやらしい笑みを浮かべていた彼女の顔が、ふつ……と、陰る。

「それも、仕方ありませんわよね……」

「……………」

ゆりかごさんのつぶやきに、わたしは言葉を返すことができなかった。
なってしまった。

べつに、気にしているわけじゃなかった……はずなのに……。

わたしたちふたりが立ち止まったまま、こんなやり取りをしているあいだに、くだんの男子生徒はとくに歩き去ってしまったようだ。もうどこにも、その姿を見つけることはできない。

しばらくのあいだ、わたしたちは徐々に薄暗くなっていく夕焼け色の中、ただ黙って立ち尽くしていた。

「……明日は少し早めに、この待ち合わせ場所へ来るようにしてみようか」

ゆりかごさんはわたしの顔をうかがいつつ、ゆったりとした口調で喋り始めた。

黙ったまま、わたしは頷く。

「ここがあので殿方の通学路みたいですから、待ち合わせしながら通りかかるのを待っていれば、きっとまた出会えますわ」

「……うん……」

ゆりかごさんの気遣いを受け、わたしもできる限りの笑顔を返すと、ついさっきあの人を見かけた曲がり角で手を振り合い、お互いの家へと向かって歩き始めた。

「ママ、だ〜いすき〜！」

「うふふ、ありがとう息吹ちゃん！」

これは、いつ頃のことだっただろうか。

よくは覚えていないけど、お母さんに素直な言葉を叫ぶわたし。

この日は家族三人水入らず。お父さんもわたしたちと一緒に一家団らんのひとときを楽しんでいた。

「むっ、パパのことは嫌いなのか？」

「ううん、パパも、だ〜いすき！」

ちよつといじけ気味に不満をつぶやくお父さんにも、素直な思いを伝える。

「はっはっは！ 息吹〜！ パパも大好きだぞ〜！」

「きやははは！ パパ、おヒゲがくすぐったい〜！」

お父さんはわたしを抱き上げて、ヒゲの生えた頬をすりすりと寄せる。

幸せな、家庭の記憶。

いつまでも壊れることなく、永遠に続くと思われて疑わなかった日々。

だけど、平穏な日常というものは、とっても簡単に崩れ去ってしまふもの。

このときのわたしにはもちろん、そんなことが想像できるはずもなかった――。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

わたしが玄関のドアを開けるとすぐに、お手伝いの弥生ちよひさんが出迎えてくれた。

高級住宅街に建つ、この家。

庭も建物も広いことと、両親ともに忙しいことから、お手伝いさんを雇って家事全般をお願いしている。

「お荷物、お持ちしましょうか？」

「いえ、いいですよ。弥生さん、疲れてるでしょ？ 自分で運びます」

「お仕事ですから、ご遠慮なさらなくてもいいのに」

わたしが彼女の申し出を断ると、そう言って笑う。

弥生さんは四十代くらいの女性で、ちょっとふくよかなところが、なんだか安らぎを与えてくれる。

三人目のお母さんと呼んでもいいと思っているくらいの人。

「いつもお疲れ様です。それでは」

「お食事の準備も、じきに終わりますので、できましたらお呼びします」

「はい、お願いします」

わたしは弥生さんに軽く会釈を残し、階段を上って自分の部屋へと向かった。

高級住宅街に建てられ、お手伝いさんまでいるこの家。

この家……なんて微妙な表現をしていることから察してもらえ
かもしれないけど、わたしは正確にはこの家の子じゃない。

実際には、養子ということになっているわけだから、今はわたし
の家と言ってしまったていいのかもしれないけど。

だけど、どうしてもすべてを受け入れる気にはまではなれなかった。

小学校二年生だった当時、わたしは両親を一度に亡くしてしまっ
た。交通事故だった。

その後、残されたひとりっ子のわたしを引き取ってくれたのが、
本当のお母さんと学生時代からの親友だったという、ふじほしきさめ藤星小百合さ
んだ。

小百合さんの家にはもとよく遊びに来ていて、両親が事故に
遭ったときも、わたしは旅行に出かける両親の邪魔にならないよう、
この家に預けられていた。

わたしは小百合さんの住むこの家に養子として迎えられることにな
った。

すべてを受け入れる気にはまではなれなかった、とは言ったけど。

小百合さんはわたしを本当の娘のように可愛がってくれているし、
そのことをわたしは心から感謝している。

でも、どうしても本当の両親の記憶がちらついてしまうのだ。

ところで、藤星という名字からも想像がつくかもしれないけど、
小百合さんの家は藤星女学園を創立した家系にあたる。正確に言え
ば、小百合さんの旦那さんである幸人さんゆきひとの家系が、ということに
なるわけだけど。

小百合さんは、わたしやゆりかごさんが通う高等部の学園長を務
めている。そして幸人さんは、藤星女学園および藤星女子大学全体

の理事長という立場にある人だ。

高等部以外の学園長や、理事のメンバーも、小百合さんや幸人さんの親戚の方々が担っているらしい。

そうすると、相当なお金持ちっぽく思えるけど、実はそうでもない。

お手伝いさんを雇ってはいるものの、それは小百合さんも幸人さんも忙しくて、どうしても家事ができないからで、仕方なくといった感じのようだし。

それに、弥生さんは小百合さんの知人が経営する家政婦派遣会社の人だから、かなり格安で契約させてもらっているのだとか。

もちろん貧乏ってことはないけど、それでも余裕はあまりない。だからこそ、わたしは昼食代をなるべく節約するようにしているのだ。

そうそう、わたしが小百合さんの家に養子として迎えてもらっているのは、今話したとおり。

だから当然のごとく、戸籍上の名前は藤星息吹となっているわけだけ。

でも、学校では神奈息吹と、本当の両親の名字を名乗らせてもらっている。

それは小百合さんが、この家の子になったことを受け入れられずにいるわたしを気遣ってくれたからだ。

小百合さんには悪いなと思っているのだけど、わたしにとって神奈は両親の思い出がたくさん詰まった特別な名字。だから、その気遣いがとても嬉しかった。

「ふう……」

部屋に入ったわたしは、カバンを勉強机の横に置いて、ベッドに腰かける。

いつもならすぐに制服を脱いで部屋着に着替えるところだけど、今日のわたしは、なんだかぼーっとしてしまっていた。

さつき見かけてビビッときた、「あの人」のことが気にかかっていたからだ。

ゆりかごさんにも話したとおり、お父さんに似ているから、こんなにも気になるのかな……。

お父さん……わたしが小学校二年生のときに死んでしまった、本当のお父さん……。

とっても優しくて温かい、太陽のような笑顔が、鮮明な記憶として残っている。

まだ幼かった頃の記憶までしかないから、それほどはつきりと脳裏に思い浮かべられるわけじゃない。

小百合さんから写真を見せてもらったことはあるから、そのイメージと重ね合わせているのだと思う。

わたしが両親を亡くしていることは、ゆりかごさんには話してある。

だからわたしが、「お父さんに似てた」と言ったとき、彼女の表情が陰ったのだろう。

彼女とは中等部で初めて同じクラスになってからのつき合いだけ

ど、お互いに心を許し合っていて、今ではもう、なんでも話せる間柄になっている。

だからこそ、わたしは親友と考えているわけだし、きっとゆりかごさんも同じように思ってくれているはずだ。

もしかしたらそれ以上に思っていたりして、なんて考えてしまうこともあるけど……。

でもさっき、わたしが「あの人」を気にかけているのを応援してくれているような、温かな笑顔と言葉を向けてくれた。

明日は少し早めに起きて、気合い入れて髪の毛をセットしなきゃ。本当に会えるかどうかはわからないけど、それでもなんだか、とってもドキドキして、とってもワクワクして、考えただけで顔が熱くなってくる。

こんな気持ち、初めてだなあ……。

なんか、いいかも。

わたしは自然とにやけてしまっていた真っ赤な顔を枕に押しつけて、足をバタバタさせながら必死に恥ずかしさを紛らわせていた。

コンコン、ガチャッ。

「お嬢様、お夕食ができました。……おや？　どうなさったのですか？」

夕食の準備ができたことを伝えに来た弥生さんに、その様子を思いつき見られてしまって、さらに顔を真っ赤にする羽目になってしまったのだけだ。

「はっ、なんでもないです！　もう、弥生さんったら、ノックをしてから入ってくるまでの時間が短すぎます！」

わたしは弥生さんを押しつけるように部屋を飛び出すと、階段をトタトタと駆け下りてダイニングルームへと向かうのだった。

食卓のテーブルの上では、すでに並べられた料理たちが美味しうに湯気を立ち昇らせていた。

目玉焼きが乗せられた熱々のハンバーグには、ポテトと甘く煮たニンジン、コーンが添えられている。ライスはレストランのように平べったいお皿に乗せられ、その隣からはコーンスープが香ばしい匂いを漂わせていた。

小さめのガラスの小皿にはサラダが盛りつけられ、さらにはワイングラスまで置かれている。当然ながらわたしには、ワインではなくジュースが用意されているわけだけど。

相変わらず弥生さんの料理の腕は素晴らしい。

わたしはゆつたりと席に着く。

すぐ手もとには、ナイフとフォークとスプ用の丸いスプーンとといった食器類が、紙ナプキンの上に整然と並べられていた。

テーブル全体を改めて眺め直し、思わず感嘆の吐息と一緒に、ヨダレまでもが漏れてしまいそうだった。

食卓に着いているのは、わたしと小百合さんのふたりだけ。幸人さんはどうやら、今日もまだ帰ってきていないようだ。

これらの料理を作った張本人である弥生さんは、わたしたちと一緒に食事をするのではない。

わたしたちが食べ終えたあと、いつもひとりで食べている彼女と一緒に食べましょうよ、と誘ってみたこともあるのだけど、それはできませんと断られてしまった。家政婦としてのこだわりなのかもしれない。

両手を合わせ、いただきますと声を揃えると、わたしと小百合さんの夕食のひとときが始まった。

わたしはナイフとフォークを手に取り、真っ先にハンバーグへと狙いを定める。

なにを隠そう、ハンバーグはわたしの大好物なのだ。

「あら、息吹ちゃん、なにかいいことでもあったの？」

柔らかくてジューシーなハンバーグを頬張るわたしに、小百合さんがそう言って話しかけてきた。

え？ どうしてそう思うの？

と一瞬考えたけど、どうやらそんなの一目瞭然なほど、わたしの頬は緩みきっていたみたいだった。

さっき自分の部屋で弥生さんに見られてしまったにやけ顔と同じ、いや、きつとそれ以上に、にたあゝと笑顔がこぼれ落ちていたに違いない。

わたしが大好きなハンバーグを目の前にして喜んでいる、という考えを飛び越して、小百合さんは「いいことがあったのでは？」と判断した。

そのことから考えれば、相当だらしなく、にへらゝと笑っていただろうという推論が自然と成り立つ。

普通に考えたら、すごく恥ずかしい状態。

でも、そんなことも気にならないほど、わたしはなんだか嬉しくて楽しくて仕方がなかったのだ。

とはいえ、それを言葉して伝えられるほど、自分自身の気持ちを理解できていなかったというのもあり、わたしはなるべく澄ました

顔で、こう答えた。

「いえ、とくになにもありませんよ、小百合さん」

小百合さん――。

戸籍上では、今はもう、わたしの母親ということになる彼女。

でも、わたしは「お母さん」と呼ぶことができないでいた。

同じように、幸人さんのことも、「お父さん」と呼べないままだ。

それを、小百合さんも幸人さんも咎めたりはしない。

幸人さんは多忙で家にいないことが多いから、あまり顔を合わせないけど、小百合さんとは毎日こうやって食事をとにもする。

弥生さんが作った食事を美味しくいただきながら、いろいろとお喋りをする。

小百合さんはいつも、優しい微笑みをたたえながら、わたしを包み込んでくれる。

それでもわたしは、どうしても「お母さん」と呼べない。

小百合さんは優しくて温かくて大好きだけど、どうしてもダメなのだ。

そんな小百合さん。

わたしがとぼけているのは、どうやらお見通しのようだった。

「ふふっ、息吹ちゃん、……恋……してるわねえ？」

ぶっっ！

思わず口に含んでいたコーンスープを吹き出してしまふ。

「あらあら、息吹ちゃん、大丈夫？」

「奥様、これを」

「あら弥生さん、ありがとう」

すかさず弥生さんがフキンを持ってくる。

……って、弥生さん、隠れて見てたの！？

もしかしたらそのうち、サスペンスドラマ『家政婦に見られた！』みたいな状況になったりとか……。

と、そんな失礼なことを考えている場合じゃないよね。

「ごめんなさい、わたし……」

「いいのいいの。ちよつと意地悪しちゃったみたいで、ごめんなさいね」

小百合さんは笑顔を絶やさないままテーブルを拭きながらも、さらに意地悪な質問を続けてくる。

「それで、お相手はどんな方なの？」

「べ……べつに、お相手とか、そんなんじゃないですけど……」

わたしは、少し恥ずかしかったけど、覚悟を決めて正直に話すことにした。

「えーっと、近くの男子校の生徒です。帰り道で見かけて、なんかこう、ビビビツときたっていうか……」

あの人の面影を思い出して顔を真っ赤にしながら話すわたしに、小百合さんは、

「ふふっ、息吹ちゃんったら、青春してるのねえ」

と微笑んだ。

慌てて弁解するわたしだったけど。

「いえ、べつに、そういうのでは……」

ない……わけじゃないよね……。

そう考えてしまい、無意識に言葉は途切れ、うつむいたまま頭から湯気を昇らせ続ける結果となってしまった。

ドキドキしてなかなか寝つけなかったものの、わたしはいつの間にか眠ってしまっていたらしい。

気づけばカーテンを通り抜けて、朝の清々しい光が差し込んできていた。

目覚まし時計を見ると、七時を少し回ったところ。

藤星女学園は授業の開始時間が遅いから、普段起きるのは八時くらいだ。

だからまだ、目覚まし時計が鳴る前の時刻。

ちょっと睡眠時間が足りないのか、頭がぼーっとしている感じを受ける。再び布団に入れば瞬殺で二度寝が成功、結果ゆりかごさんに文句を言われる羽目になってしまうだろう。

とりあえず目覚まし時計のタイマーを切り、ゆったりとした動作で着替える。

余裕のある時間だから、制服も乱れることなくビシッと着ることができた。

普段どおりだとあまり時間がないから、胸のリボンが曲がっていることも多くて、ゆりかごさんに「リボンが曲がっていてよ？」なんて言われながら直されたなんて経験も、一度や二度ではなかったりする。

そんなときは、「お姉様、ありがとうございます」とお礼を述べなければいけないのだとか。同い年なのに、どうしてお姉様なのだろう……？

と、それはともかく。

「うん、こんなもんかな」

わざわざ声に出して着替えの終了を宣言したわたしは、素早くカバンをつかんで部屋を出る。

そして階段を下り、玄関脇にカバンをそつと置くと、そのまま洗面所へと向かった。

部屋にある小さな鏡じゃ、制服をしつかり着ることができているか正確にはわからない。その確認のためもあるけど、それよりも髪の毛のセッティングが一番の目的だ。

寝相が悪いのか、というわけだかわたしの髪の毛は、朝起きると大爆発していることが多い。それを無理矢理どうにかするため、頭の両側で結んで押さえることができる髪形にしている、というものもあるわけだし。

ともかく、念入りに髪をとかしてからまとめ、綺麗なツインテールを形作る。

うん、完璧！

昨日のうちに弥生さんに話して、早めに朝食を作ってもらうこともお願い済みだ。

弥生さんは泊り込みでお手伝いをしているわけではなく、平日の朝、うちに出勤してきて、夜は夕飯の洗い物とお風呂の準備が終わった時点で帰っていく。

ちなみに、土日と祝日には基本的に弥生さんは来ない。それでも平日はかなり長い勤務時間となるわけだから、大変だなと思う。それがわかっているというのに、わたしは弥生さんに無理を言つて、朝食を早く作ってもらうなんてお願いをしてしまったのだけ。

「おはようございます、お嬢様」

「おはようございます、弥生さん。すみません、無理を言ってしまった」

「いえいえ、いいんですよ。冷めないうちに、食べてくださいね。あつ、でも、急ぎすぎないでくださいましね？ のどに詰まっちゃったら大変ですから」

「もう、そんなこと、言われなくてもわかってます。わたし、そんなに子供じゃないんですから」

「ふふふ、そうですね、失礼しました。ささ、とにかく食べてくださいまし。腹が減っては戦ができぬ、ですわよ」

「戦って……、そんなじゃないですから。それでは、いただきます」

こんな他愛ないお喋りも、朝の心地よさを演出してくれる。いつもより早い時間だから、さすがに小百合さんはまだ起きていない。

弥生さんが食事中もずっとそばにいてくれたのは、わたしがひとりでは寂しく思つかもしれないから、だったのかな。

とにかくわたしは食事を終え、洗面所に戻り歯磨きをすると、玄関脇に置いてあったカバンを勢いよくつかむ。

そして、

「行ってきますー！」

「行つてらっしゃいませ」

弥生さんが大きく頭を下げて送り出してくれる中、意気揚々と玄関を飛び出した。

待ち合わせ場所である曲がり角に着くと、そこにはすでにゆりか
ごさんが立っていた。

「おはようございます、息吹さん」

「おはよう、ゆりかごさん」

朝の挨拶を交わし合い、普段だったらそのまま一緒に学園へと向
かって歩き出すところだけど……。

ゆりかごさんはそつとわたしの耳もとに唇を寄せ、小さくささや
いた。

「さて、それではここでしばらく立ち話でもしながら、昨日の殿方
が通りかかるのを待ちましょう」

「で……でも、不審に思われたりしないかな？」

対するわたしも、同じように小声で質問を返す。

「大丈夫だと思いますわよ？」

ゆりかごさんは澄まし顔でそう答えてくれたけど、どうやらわた
しの顔には不安がありありと浮かび上がっていたようで。

「ですが心配なようでしたら、そうですね……お友達を待ってい
るように装っておきましょうか」

言うが早いのか、彼女は素早くわたしの耳もとから離れると、言葉

どおりの演技を始めた。

「もう、なにをやっているんでしょうか。由梨絵さん、遅いですわね？」

わたしの肩に手を置き、爪先立ちで曲がり角の先をのぞき込みながら、ゆりかごさんがわざとらしい口調で問いかけてくる。

「あ……う、うん、そそそ、そうねっ！ほんと、おおおお、遅すぎです、わよ」

それに答えるわたしは、焦りまくりどもりまくり、声も裏返って不自然さ丸出しだった。

「ふふふ、息吹さん、演劇には向いていないみたいですね」
「……ほつといて……」

ぼそつと耳もとに投げかけられたゆりかごさんの言葉に、わたしは力なくぼやくことしかできなかった。

ちなみにゆりかごさんがとっさに出してきた由梨絵さんっていうのは、クラスメイトの名前だったりする。

彼女の家は学校を挟んでわたしやゆりかごさんの家とは反対方向なので、偶然鉢合わせするなんてことは、まずないだろう。

由梨絵さん、勝手に名前を使ってしまって、ごめんなさい……。

「あ……来ましたわ……！」

不意に、ゆりかごさんがわたしの肩に乗せた手に力を込め、そうつぶやいた。

わたしも、彼女と同じ方向に視線を向ける。
そこには、昨日のあの人がいた。

早すぎず遅すぎず、ゆっくりとした動作で、今わたしたちが立っている曲がり角に向かって歩いてくる。

見れば見るほど、心がぼわんと温かくなる感じ。

やっぱり、お父さんに似てるな……。

そんなことを考えながら、ぼーっとしているわたしの耳もとで、ゆりかごさんがそそのかす。

「さ、話しかけなさいな」

「え……？ むむむむ、無理よぉ……」

彼女の声に、わたしはぼそぼそと答えるのみ。

そりゃあ、お話したいのは山々だけど。なんて言って話しかければいいっていうの？

そんなわたしたちの様子に気づいているのかいないのか、あの人は曲がり角を通過し、そのまま春雨高校のあるほうへと歩き去っていく。

わたしはその人の姿にちらちらと視線を向けながら、ただ黙って見送ることしかできなかった。

「ふう……」

あの人の姿が見えなくなると、ゆりかごさんのため息が聞こえた。

「まったく、臆病さんなんですから」

「ただただ、だって、しょうがないじゃない。いきなり話しかける

なんて、できないよ」

涙目になって訴えかけるわたしに、ゆりかごさんは優しく微笑んでくれた。

「そうですわね。なにかきっかけを作らなくてはいいけませんわね」

ニヤリ。

なんとなく、優しいだけの微笑みじゃなかったように思えたのは、はたして気のせいだっただろうか。

「まずは意識していただくことが先決ですわ」

春雨高校へと向かう人通りも少なくなると、時間差で藤星女学園の生徒の数が増えてくる。

あの人が去ったあと、ゆったりと歩き出したゆりかごさんは、その隣に並んで歩くわたしにそう言った。

そしてそう言いながら、ぎゅっとわたしの左手を握る。

わたしを、勇気づけてくれているのだ。

だからきつと、他意はない……、はず……。

……そのわりに、なんだか指を絡めてきたりしてるんだけど……。

そ、それはともかくっ！

今は彼女の言葉に耳を傾ける。

「あの場所を通ることは確認できましたから、作戦は立てやすくなりましたわ。明日からも今日と同じ時間で待ち合わせして、同じように立ち話をし続けましょう。そしてあの殿方が通りかかったら、なるべく大きめの声でお喋りするんですわ」

「うん……うん……」

「少しでも注目していただいて、印象づけていきましょう。そうですわ、息吹さんの名前もお呼びしますわね。そうすればきつと、あの子、息吹っていう名前なんだ、と意識してもらえるはずですよ」

「うん……うん……」

ひとりで盛り上がっているゆりかごさんの声とは対照的に、わたしの声は沈み気味だった。

べつに、嫌なわけではないのだけど。

やっぱり恥ずかしいから……。

そう言つと、ゆりかごさんはつないでいる手の力をぐっと強めた。

「もう、そんなことでどうするんですか。息吹さん、あなたがしっかり頑張らなくてはいいけませんのよ?」

「う、うん、そうだけど……」

「まったく……そうやってはつきりしないようでしたら、わたくしがあの殿方にアタックしてしまえますわよ?」

「え、や、そ、それはダメっ!」

思わず大声で叫んでしまい、近くを歩いていた藤星女学園の女生徒たちがなにごとかと振り返って、わたしに目を向けてくる。

「は、はう……」

真っ赤になってうつむいているわたしの隣では、ゆりかごさんがコロコロと小気味のよい笑い声を漏らしていた。

「ふふふ、冗談ですわよ。応援しておりますわ。ね?」

「……うん」

恥ずかしがりながらも答えるわたしの声を聞いて、ゆりかごさんは満足そうに頷いた。

「由梨絵さん、今日も遅いですわね」。昨日あれだけ念を押しまし

たのに」

「そそそそ、そう、ですね」

次の日の朝も、わたしとゆりかごさんは、待ち合わせ場所の曲がり角で、白々しくも演技をしていた。

「あつ、息吹さん、あちらをご覧くださいませ」

「え？ ゆりかごさん、なんですか？」

ゆりかごさんが一方を指差すと、わたしもそちらへと目を向ける。彼女の指先を視線でたどっていくと、そこには、あの人が……。でも、ゆりかごさんが指差していたのは、その人ではなく、さらに向こう側。ここから微かに見える国道だった。

「今、道路を戦車が通っておりましてわ！」

……そ、それはあまりにも不自然じゃない！？

と思わなくもなかったけど、彼女は彼女なりに、わたしのために考えて言ってくれたはずだ。

わたしがあの人のほうをじっと見つめていても、不自然じゃないように。

……話題自体の不自然さは、この際気にしない、ってことなんだろうな……。

「え、えええ？ うそ、ほんとあ？」

会話内容だけじゃなくて、わたしの喋り方も、やっぱり不自然ではあったけど。

ともかくわたしは、ゆりかごさんの指差すほうに目を向けた。

自然とあの人を、視界内に捉える。
思わず、見つめてしまう。

あの人、顔を上げた。

はうつ……！

目が……合っちゃった！

ボツ！

真っ赤になって反射的にうつむいてしまっわたし。

「ああ、もう……」

ゆりかごさんが小さく舌打ちする音が聞こえた。

ちよつとはしたないよ、ゆりかごさん……。

なんてツツコミを入れられるわけもなく。

結局わたしは今日も、ただ黙ってあの人が過ぎ去っていくのを見送ることしかできなかった。

「ダメじゃないですか、息吹さん。あの場合、微笑んで頷き合っべきでしょう？」

「そ、そんなこと言っただけ……」

「それに、息吹さんの名前を記憶していただきたいというのに、わたくしの名前まで呼んでしまったては、台無しではありませんか」

「うつて、ごめんなさい……」

ゆりかごさんからそんなダメ出しを受けてしまっわたしだった。

そしてまた次の日も作戦は続く。

「今日は、遅いですわね」

「そうだね。お休みなのかな？」

曲がり角で待っているわたしたちのそばを、いつもならあの人がもう通り過ぎているはずの時間。でもこの日は、まだ通っていないかった。

諦めかけたそのとき、待ち焦がれるあの人は、やっぱりゆっくりとした動作で歩いてきた。

わたしたちの学校は授業の開始時間が少し遅いからいいけど、あの人の通う春雨高校は、この時間だと遅刻ぎりぎりなんじゃ……。そんなわたしの心配を肯定するかのように、急ぎ足の男子生徒があの人の後ろから迫ってくる。

「おい、ゆうき！ そんなトロトロ歩いてると遅刻するぞ！」

「うん、そうだね」

そうだね、と言いながらも、あの人は歩く速度を変える気配がない。

「ま、オレは先に行くけどな！」

「あははは、薄情だなあ」

といった会話を残し、走り去る男子生徒。もちろん、あの人の背中も遠ざかっていく。

「あの人、ゆうきくん、っていうんだ……」

なんだか心がほわ〜んと温まったような感じで、わたしはただただぼーっと、ゆうきくんの去っていった道を眺め続ける。

その横では、ゆりかごさんがニヤニヤと笑っていた。

「ふふふ、お名前ゲットですわね。おめでとうございます」

「うん……でも、どんな字なのかな〜」

「ふふふ、名字もわかっておりませんし、まだまだ先は長いですよ？」

「うん、わかってる……」

などと、あの人の名前を知ることができた喜びを噛みしめていたわけだけど。

わたしたちは、ゆうきくんが通りがかったのが遅かったということとを、完全に失念してしまっていた。

ホームルーム開始の五分前に鳴らされる予鈴が、微かに聞こえてくる。

「あら、予鈴の音ですわ」

「きや〜〜〜！ 遅刻しちゃう！ ゆりかごさん、走らないとっ！」

「スカートのプリーツは乱さないように……なんて言っていられませんわね。では、全速力ですわ！」

「うん！ 何年ぶりだろ……」

「先生方に見つかると困りますし、正門が見えたら走るのは諦めなくてはいいけませんわね。ですから途中までは、死に物狂いで走りますわよ！」

「うっ、走るの苦手なのに……。もしわたしが転んだら、先に行つてね！」

「なにを言うのですか。息吹さんひとり残して、先に行けるわけが

ないじゃないですか！」

「うっ、ゆりかごさあ〜ん！」

全力で走りながらも、こんな友情ごっこなんてやっているわたしたち。意外と余裕があつたのかもしれない。

それから、ゆりかごさんの作戦は続いた。

週末は学校がないから実行できないけど、平日には必ず作戦を遂行することになった。

さらには、朝だけじゃなく帰り道でもあの曲がり角に立って、ゆうきくんが通るのを待った。

わたしもゆりかごさんも、部活動はしていない。

ただ、藤星女学園は授業の終わる時間も遅いから、すでにゆうきくんが通り過ぎたあとということも多いみたいで、放課後は毎回会えるわけではなかった。

……もちろん、話しかける勇気がないわたしだから、「会う」「じやなくて、「見かける」ただけだけど。

それでもわたしは、ただ見つめているだけで幸せな気持ちになれた。

ゆりかごさんは、じれったいと思っているみたいだけど、わたしは今のままでも全然構わなかった。

ゆうきくんのほうも、どうやら部活動はやっていないらしく、だいたい授業が終わる時間から少し経った頃、あの曲がり角を通るようだ。

曲がり角までの距離は、わたしたちの藤星女学園からのほうが近いので、急いで学園を出れば間に合うことも多い。

今日はゆうきくんに会えるかな、なんて考えながらいつもの場所へ向かうのが、とても楽しくなっていた。

もっとも毎朝、ほぼ確実に会っている、というか見かけているわ

けだけど。

そんなある日。

いつもどおり、ゆうきくんに話しかけることもできず、若干沈みながら学園に着いたところで、ゆりかごさんからこう言われた。

「今日の放課後は新しい作戦がありますから、楽しみにしていってくださいね」

「ふえっ？」

わたしが思わずだらしなく口をぽかーんと開けて、わけのわからない返事をしてしまったのも、不可抗力ってものだよな？

新しい作戦って、なんだろう？

今日は一日中、そのことが気になってしまい、授業なんてまったく頭に入らなかった。

ゆりかごさんに尋ねても、「ふふふ、ひ・み・つ」ですわ」なんて言って、答えてくれないし。

そして五時間目の授業が終わると、ゆりかごさんは素早くわたしの手を取って走り出した。わたしは呆然としつつも、慌てて反対の手でカバンをつかみ、彼女に引っ張られながら教室をあとにする。

ちなみに藤星女学園では、掃除は業者さんの仕事になっているため、わたしたちは自分で教室などの掃除をする必要はない。

そっか、他の学校だと生徒に掃除させるのが普通なんだよね。だ

からゆうきくんの帰る時間に、わたしたちが帰る時間を合わせられたんだ。

とかなんとか考えながら、ゆりかごさんに手を引つ張られたわたしは、いつもの曲がり角へと到着した。

ドキドキドキ。

胸を高鳴らせながら、ゆうきくんが通りかかるのを待つ。

今日はなぜか、ゆりかごさんも黙ったまま。

普段ならうるさいくらいに話しかけてくれるのに。つつい、そんな失礼なことまで考えてしまう。

ゆりかごさんはただ黙って、わたしの右手をぎゅっと握っている。

少し経つと、道の向こうに待望のゆうきくんの姿が見えてきた。お父さんの面影がなんとなく感じられ、安らかな気持ちになると、ゆりかごさんが耳もとでささやきかけてきた。

「これからわたくしが声をかけますわ。とりあえずそのまま、黙って横にいてくださいませ」

「えっ？」

戸惑うわたしの頭に、ちょっと久しぶりの「あれ」が浮かび上がる。

『ゆりかごさんを止める』

『ゆりかごさんに任せる』

えーっと……。

考えるまでもなく、決まっているようなものだけだ。

でも、こんなタイミングで選択肢が「視えた」わけだから、少し慎重になるべきなのかな……？

わたしが考え込むような素振りを見せると、唐突にゆりかごさんが、ぎゅっとわたしの手を握ったまま顔を前方に回り込ませる。そして責めるような瞳を向けながら、こう言い放った。

「もうっ！ 考える必要なんてありませんでしょう？」

「う……うん……」

わたしは頭の中の選択肢を振り払い、ゆりかごさんの言葉に従った。

「あの、すみません」

「はい？」

ゆりかごさんは躊躇することなく、ゆうきくに声をかける。

さっきまで握っていたわたしの手は離し、代わりに彼女は両手になにやら紙のようなものを持っていた。

それをゆうきくに差し出しながら、彼女は声をかけたのだ。

「お手数ですが、アンケートにご協力していただけませんか？」

なるほど、そういうことか。

ここはわたしも、話を合わせておくべきだね。

「ぜひ、お願いします」

ゆりかさんの持つアンケート用紙に目を落とし、続けてかけられた声の主、つまりわたしに視線を向けてくるゆうきくん。

うわぁっ！ こんな近くで、ゆうきくんと見つめ合ってる！

飛び上がりそうな気持ちをどうにか抑えながら、わたしは成り行きを見守る。

ゆりかさんの言う新しい作戦の内容を聞いていないわけだから、余計なことはしないほうがいいだろう。

「えっと、ぼくでいいの？ ……うん、まあ、いいけど……」

ちょっと戸惑い気味ではあるけど、肯定の言葉をつぶやいたゆうきくんの手を、ゆりかさんはすっとつかんで引く張る。

「では、すぐその公園まで、一緒にしてくださいませ。さすがにここでは、人通りの邪魔になってしまいますし」

「あつ、うん、そうだね」

こうしてわたしたちは、見事にゆうきくんを連れ出すことに成功した。

公園に入ると、ゆりかさんはゆうきくんをベンチに座らせ、素早く下敷きの上に乗せたアンケート用紙とシャープペンを手渡す。続けて彼女は、わたしをその隣に座らせた。

「アンケート用紙の上から順番にお答えください。不明点はそちらの息吹さんにお尋ねくださいね」

ちょ……ちょっと、わたし、尋ねられてもわからないよ？

思わずそう叫んでしまいそうなたしを、ゆりかごさんが視線で制する。

「うん」

ゆうきくんは素直に言うことを聞いて、アンケート用紙に答えを記入し始めた。

ちょっと、素直すぎるんじゃないかな？

もしかしたら、騙されやすい性格なのかも？

なんて、自分が今、騙している張本人だというのを棚に上げて、そんなことを考える。

というか、わたし、ゆうきくんの隣に座ってるんだ……。

ドキドキドキ。

鼓動が高鳴る。

そんなわたしの横で、アンケートに答えながらも、ゆうきくんはゆりかごさんと会話を交わしていた。

「恋愛についてのレポートなのですが、女子校なので、男性の考え方がどうしてもわからなくて」

「そうなんだ。でもぼくも、そういうのはよくわからないんだけど

……」

「あくまでも多くのサンプルのうちのひとり、とお考えください」

少しだけ、いいな、わたしもお話したいな、と思ったりもしたけど、ここはゆりかごさんに任せるしかない。

わたしは黙ったまま、ゆうきくんがペンを走らせる音を聞いていた。

書かれた答えをのぞき込みたい衝動に駆られてはいたけど、それは悪いかな、っていうのと、近づきすぎるのは恥ずかしい、っていうのがあって、わたしはゆうきくんの横でうつむいていた。

と、静かな公園の片隅に、不意に音楽が鳴り響く。

この音、確かゆりかごさんのケータイの着信音だったはず……。

ゆりかごさんはケータイを取り出すと、ベンチから少し離れた場所です話し始める。

「……はい、はい、え、ですが……。はあ、仕方ありませんわね。わかりましたわ」

そう言つて、彼女は電話を切った。

「すみません。わたくし、一旦学校に戻らなければいけなくなりましたの。書き終わったアンケート用紙は、息吹さんにお渡ししておいてください。用事が済みましたらすぐに戻ってきますので、アンケートを書き終えたら、ここですばらくお待ちいただけますか？」

「うん、わかった。行ってらっしゃい」

ゆりかごさんの言葉に、ゆうきくんは優しく答える。

対するゆりかごさんも、ふふふ、と優しい微笑みを返していた。

……それでは、頑張ってくださいませ。

去り際、そつとわたしの耳もとに顔を寄せ、ゆりかごさんはそうささやいた。

「お友達、戻ってこないね」

「はい、そうですね……」

人通りも少ない公園のベンチで横並びに座るわたしを気遣ってか、ゆうきくんは遠慮がちにはあるものの声をかけてくれるのだけど、わたしが返事をする、そこでどうしても会話が止まってしまう。

ゆうきくんは、どうやら自分から積極的に話しかけるタイプの人ではなさそうだった。

でもそれ以上に、わたし自身が拒絶のオーラを放ってしまっているのだろう。

そりゃあわたしだって、できればゆうきくんと、ちゃんと話したい。

だけど、恥ずかしくて、どうしてもダメなのだ。

思えば、まだ本当の両親のもとで生活していた初等部の頃からずっと、女子校しか経験していないわたし。

わたしはひとりっ子だし、親友でよく家に遊びに行くゆりかごさんもひとりっ子だ。

もちろん、昔はお父さんがいたし、今は幸人さんがいる。ゆりかごさんのお父さんにも会ったことがある。

だけど、お父さんくらいの年齢の男性は、やっぱり同じ年代の男の子とはまったく違う。

考えてみたらわたしって、近い年齢の男性とお話したことすら、今までの人生ではほとんどなかった。

なにを話したらいいのか、どんな顔をすればいいのか、まったくわからない。

ただ向き合うだけでも、わたしの頬は一瞬で真っ赤に染まり、堪えきれずにつつむいてしまう。

……ふえくん、会話が、続かないよぉ。
ぐしゃっ。

わたしの手もとで、不意に音が鳴る。

「あっ！」

その音の発生源は、すべて答え終え、ついさっきゆうきくんが手渡してくれた、アンケート用紙だった。

「ふう、危なかった……」

思わずぎゅっと握り潰してしまうところだった。

「どうしたの？」

「い……いえ、なんでもありません！」

すぐそばから心地よい響きの声が投げかけられたものだから、わたしは慌てて、またしても深くうつむいてしまった。

はう、やっぱりわたしって、ダメだ……。

落とした視線の先には、握りつぶしそうになったアンケート用紙。

そうだ。アンケートの結果なら、話題になるかも。

今さらながらにそう考えたわたしは、くしゃくしゃになりかけた

アンケート用紙のシワを伸ばしつつ、裏返しになっていたそれを見直し、
に向け直す。

「姫宮優季……^{ひめみやゆうき}。ゆうきって、こういう字を書くんですね」

つぶやいてから、はっと口をつぐむ。

わたしは以前から優季くんの名前を知っていて、どんな漢字なのかを想像していた。

でも優季くんにしてみれば、わたしは今日初めて会ったばかりの女の子としか認識していないはずなのに。

おそろおそろ顔を上げて、ちらりと優季くんの表情をうかがってみたけど、どうやら優季くんは、とくにそのことを気にしたりはしていない様子。

「あはは。うん、女の子みたいな名前で、おかしいでしょ？ 名字も姫宮なんてのだから、余計に女の子っぽく思われちゃうんだよね」

と、少し自虐気味に笑った。

「そ、そんなことないです！ 綺麗で素敵な名前だと思います！」

わたしは素直に、そう答えていた。

優季くんの目を、見つめながら。

その彼の瞳は、ほんとに目と鼻の先にあって……。

はうつ！

わたしが我に返って、恥ずかしいという感覚を取り戻すよりも早く、優季くんはわたしに微笑みかけてくれた。

「ありがとう」

優季くんの吐息すら感じられる、こんな至近距離で。
わたしはなんだか、ぼーっと……というか、とろろんとした目になっってしまう。

「えーっと、キミは……」

と、優季くんが一瞬考え込む素振りを見せる。

あつ、そうだ！ 名乗っていなかったから、優季くんはわたしの名前がわからないんだ！

「あの、わたしは——」

「息吹さん、でいいのかな？」

ドキン！

優しいな声で名前を呼ばれると、それだけで心臓が飛び出しそうなほどだった。

わたしの名前、知ってくれてた！

「は、はい……」

浮かれ気分を抑え、どうにかこうにか、ひと言だけ答える。

「さっき、お友達がそう呼んでたから」

あ……なんだ、そっか。それもそうだよな。知ってるはず、ないもんね。

浮かれていた気持ちが、一瞬で冷めていった。
だけど——。

「いつもあの曲がり角で、さっきのお友達と待ち合わせしてるよね？ 息吹さんって名前も、そこで聞いた気がする」

うわっ、覚えててくれたんだ！

なんだかもう、踊り出してしまいそうな気分。きつと顔も、にへらへらとだらしく緩みまくっていたに違いない。

「はい、そうです！ わたし、神奈息吹っていいいます。よろしくお願いします！」

なにをよろしくお願いするんだか、と自分で自分にツツコミを入りたいところだけど。

でもこのときのわたしは、もう完全に舞い上がっていた。

そりやあもう、空だって飛べるかもってくらいに。

目の前の優季くんが温かな笑顔を向けてくれているというのもあって、まさにわたしは天にも昇る勢いだった。

「うん、よろしく。ふたりは藤星女学園の生徒なんだよね？」

「は、はい！」

「そっか、お嬢様なんだね」

「いえ、わたしはべつにそんな……」

次々と繰り出される優季くんの質問攻めに、わたしは必死になつて答える。

「藤星の制服って、すごくおしとやかな雰囲気だよね」

「ええ、そうですよね、わたしも気に入ってるんです！」

「そうなんだ。でも、着ている人たちの人柄も出てるのかもね。しつとりとした優雅なイメージがあつて、うちの生徒はみんな、高嶺

の花って思ってるよ」

「そ……そんなことないです。結構普通ですよ。そりゃあ、スカートのプリーツは乱さないように歩くとか、イメージを大切にしている部分があるのは確かですけど……」

若干たどたどしくはあったものの、わたしは優季くんと、こんなふうにいるいろいろとお話することができた。

舞い上がってはいたけど、それが逆によかったのかもしれないな。さっきまでのわたしだったら、きつとすぐに恥ずかしくなっ、うつぶいてしまっていただろうし。

しばらく、時間を忘れてお喋りを楽しんでいると、優季くんがなポツリとつぶやいた。

「うーん、そろそろ暗くなるね」

「あ……ほんとですね。ゆりかごさん、戻ってこないな……」

夕陽もすっかり沈み、もうそろそろ暗くなり始める時間になっていた。

「なにか、急な用事でもできたのかな？」

「どうか……」

そう答えながら、わたしはきつと、ゆりかごさんは最初から戻ってこないつもりだったのだろうと考えていた。

だからこそ、頑張ってくださいませ、なんて言い残したに違いない。

さっきの電話だって、クラスメイトの誰かにあらかじめお願いしていて、適当なタイミングで鳴らしてもらった嘘の電話だった可能性が高いような気がする。

ともかく、ゆりかごさんが帰ってこないのなら、そろそろ潮時だろう。

わたしの住む家はこの公園から歩いても五分とかからないし、優季くんの家がどの辺りなのかは知らないけど、徒歩で学校に通っているわけだから、それほど遠くはないと思う。

でも、さすがにこれ以上引き止めるわけにはいかないよね。

「えっと、そろそろ帰りましょうか」

わたしはそう提案する。

「ん、そうだね。お友達には悪いけど……。よろしく伝えておいてね」

優季くんも頷き、ベンチから立ち上がった。

「あつ、あの……。アンケート、ありがとうございました！」

ゆりかごさんが仕組んだ嘘のアンケートではあっても、こうやって時間を割いてくれたのだからと、きちんとお礼の気持ちを伝えておく。

もちろん本音としては、こんなにお話してくれてありがとう、という意味も込めていたのだけど。

「こちらこそ、いろいろとお話できて楽しかったよ」

優季くんがまぶしいほどの笑顔を浮かべると、ふわっとそよ風が彼の髪の毛を揺らした。

と、頭の中に浮かび上がる選択肢。

『それじゃあ、さようなら。手を振って別れる』
『ここは思いきって……』

うわっ！

思いきって、なに？

無意識に顔を赤らめてしまったけど。
でも、ここはやっぱり……。

× 『それじゃあ、さようなら。手を振って別れる』

○ 『ここは思いきって……』

わたしは意を決して、背を向けようとしていた優季くんに声をかけた。

「あのっ！ またお会いしていただけますか？」

「え？ ……うん、もちろん！」

笑顔で、そう答えてもらえた。

涼しくなりつつある夕風を受けながらも、わたしの心はぽかぽかと温まっていくのだった。

わたしはケータイなんか持っていないし、どうやら優季くんも持っていないようで、連絡先の交換まではできなかったけど。

でも確実に一歩、優季くんに近づくことができた瞬間だった。

お母さんが、笑っている。
わたしのほうを見て、笑っている。

「この子にも、将来は恋人ができたりするんでしょうね」

ちゃんちゃんと、わたしの鼻の頭を人差し指で軽くつつきながら、
「ね」と、笑いかけのお母さん。

「あははは、そうだね」

お父さんも、笑っていた。

忙しくて家にいないことも多かったけど、いつも優しくわたしを
包み込んでくれる。

お母さんの匂い。

お父さんの匂い。

ふたりの匂いに包まれて、わたしも満面の笑みをこぼしていた。

「あなた、娘はやらん！ とか言って怒鳴ったりしないでください
よ？」

「うーん、約束はできないかな……」

「もう、あなただったら」

お母さんは、うふふ、と、笑い声を空気に乗せて響かせる。

手入れの行き届いた綺麗なリビングルームは、幸せいっぱい
の空気で隅々まで満たされていた。

お父さんとお母さんが仲よくお喋りしているのを、笑顔で見つめるわたし。

わたしはふたりの笑顔が、とっても大好きだった。

今では記憶の中でしか見ることのできない、ふたりの笑顔が。本当に本当に、大好きだった――。

わたしは優季くんが公園から去っていったあとも、しばらくぼーっとその場に立ち尽くしていた。

ぼーっと、というか、さっきも同じだったけど、にへらへらとした、気色の悪い笑みをこぼしまくっていたかもしれない。

お嬢様学校と名高い藤星女学園の制服に身を包んだまま、だらしない、ちよっとおかしい笑顔で立ち尽くすわたし。

人通りの少ない公園だから、誰かに見られたりはしなかった……と思う……けど、どうだろう……？

しばらくして、変な噂とか立ってたら嫌だな……。

なんて、我に返って考えられたのは、家に帰り着き、自分の部屋に入ってからのことだった。

つまりは、家まで戻ってくる帰り道も心ここにあらず状態だったわけで。

もちろん、出迎えてくれたお手伝いの弥生さんには、確実にわたしのにやけ顔を見られてしまったことになる。

思い起こしてみると、さっき夕飯の準備ができたと呼びに来たときも、なんだか必死に笑いを堪えていたような気が……。

弥生さんには、またしても弱みを握られてしまったかもしれない。

『家政婦に見られた！』 第二話。お嬢様の壊れた微笑みの秘密。

って、なにを考えてるんだか……。

あまりにも優季くんのが気になって、夕食の時間も心ここにあらず状態のまま。小百合さんにまで心配をかけてしまったし……。

ああ、もう！　なにやってるのよ、わたし！　しっかりしろ！
バシッ！

夕食後、自分の部屋に戻ったわたしは、両手で思いっきり自分の頬を叩いて気合を入れ直す。

はう、ちよつと強すぎた！　すごく痛い……。

鏡をのぞき込んでみると、両方のほっぺたが真っ赤になっていた。うー、ほんとにもう、なにやってんだか……。

ドサッ。

そのままわたしは、ベッドに倒れ込む。

でも……。

優季くんと、あんなにたくさんお喋りできるなんて。

そう考えた途端に、痛みが引いてきていた頬が、再び真っ赤に染まる。

もちろん今度の赤味は、痛みを伴わない、むずがゆさいっぱいのは赤だったわけだけど。

「はうー！」

思わずベッドの上でごろごろと左右に転がってしまう。
はしたないこと、この上ない。

と、そのとき。
ガチャッ。

「お嬢様、お電話です……って、なにをなさっているのですか？」
「ひゃうっ！」

いきなりドアを開けて顔をのぞかせた弥生さんに、またまたまたしても醜態をさらすことになってしまった。

弥生さん、ノックくらいしてよ……。

なんて文句の言葉すら出てこない。

『家政婦に見られた！』 第三話。転がるお嬢様の謎……。

わけのわからない妄想を振り払い、わたしは赤く染まった顔を必死に枕で隠す。

と、それよりも。

「あ……あの、電話って、誰からですか？」

焦りをどうにか抑え、弥生さんに尋ねると、

「ゆりかごさんです」

との答えが返ってきた。

「ふふふ、どうでしたか？ 上手くいきました？」

ゆりかごさんの第一声。

つまり、さつき公園に戻ってこなかったのは、やっぱり彼女の作戦だったということになる。

「チューくらいは、しましたか？」

からかうような声で、そんなことまで訊いてくるし。

「もう、ゆりかごさん！ そんなわけないじゃない！ お話するの
も、今日が初めてだったのに」

「あら、世間では初めて会ったその日に、もっと先まで行ってしまう
われる方もいるらしいですわよ？」

真っ赤になつて答えるわたしに、ゆりかごさんはさらなる言葉を
平然と放つ。

も……もっと先までつて……。

考えただけで脳みそが爆発寸前の状態に陥ってしまう。

「ふふふ、今、想像しましたわね？ 息吹さんったら、え・っ・ち

♪ なんですから」

「ゆりかごさん！」

わたしはしばらくのあいだ、ゆりかごさんから、こんな感じでか
らかわれ続けた。

予想していたことではあったから、とりあえず恥ずかしがりなが
らも、親友との会話を楽しむ。

「……それで、実際のところはどうでしたの？」

しばらく経つと、からかうのにも飽きたのか、彼女は唐突にそう
尋ねてきた。

「うん、えつとね……」

その頃にはすでに、恥ずかしさやら焦りやらの気持ちちが和らいで

いたわたし。

素直にさっきの公園での出来事を、細かく報告することにした。
それを聞いて、ゆりかごさんも喜んでくれた。

「あらあら、息吹さんにしては上出来じゃないですか」

……若干引つかかる言い方ではあったけど。
そして彼女は、

「そうですね、あとはデートなさって、そのまま恋人同士になっ
てしまうのがよろしいですわね！」

さも当然そうに、そんなことをのたまう。

「え……。デデデデ、デートだなんて、そんな……！」

「なにを恥ずかしがっておりますの？ それとも、デートをすっ飛
ばして、次のステップに進んでしまえますか？」

「はう、次のステップって……」

「息吹さん向けだと、チューですかしら」

「わたし向けって……」

なんだか、ちょっとバカにされているような気がしなくてもない。
でも、ちょっと面白がっているのは確かだろうけど、ゆりかごさ
んが喜んでくれているのは、しっかりと感じられた。

「ふふふ、わたくしも協力致しますわ。大船に乗った気持ちで、ど
いんとお任せくださいな。ふふふふ……」

「そ、その笑い、ちょっと怖いんだけど……」

「あら？ なにか言いました？」

「い……いえ、なにも！」

……やっぱり面白がられている比率のほうが、圧倒的に高そう
な気がするわ tadi だった。

それから、学校帰りには曲がり角で待ち合わせて、公園でお喋りする毎日となった。

わたしと、優季くんと、ゆりかさんの三人――。

そう、ふたりきりになるのは恥ずかしいから、ゆりかさんにも一緒にいてもらっている。

ゆりかさんは、公園に着いたらすぐに帰ろうとしていたみたいだけど、それをわたしが引き止めた。

だって、ふたりきりじゃ、時間がもたないから……。相変わらず、わたしってダメだなんて、思わなくもないけど。

お願い、と必死に頼み込むわたしに、「しょうがないですわね」と、ゆりかさんもベンチに座ってくれた。

ただ三人でお喋りするだけの、安らかな時間。

いつもはうるさいくらいゆりかさんも、ここでは控えめにしてくる。

学校帰りだけのお喋りタイムだから、今のところ、休みの日にまで会ったりはしていないけど。

それでもわたしにとつて、この瞬間は温かくて優しく、とても大切な時間だった。

「今日は雲が多くてどんよりしてるよね」

「そ……そうですね。まだ梅雨の時期じゃないですけど、でも、わたし、梅雨って結構好きなんです……。変わってますよね？」

「普通ははじめして嫌いだって人が多そうだもんね。でもね、実はぼくも、梅雨って好きなんだ」

「あつ、そうなんですか！　一緒ですね！」

「うん、お揃いだね」

「はい、お揃いです！」

わたしと優季くんのちょっと間抜けなやり取りを、ゆりかさんが温かな目で見つめる。

というか、生温かな目とか白い目とか、そう表現したほうがいいのかもしれないけど。

たまに小さく、はあ……と、ため息を漏らす音まで聞こえてくるし。

「梅雨のなにがいいというのですか。わたくしは嫌いですわ。湿気で髪の毛が広がってボサボサのうねうねのひどい状態になりますし！」

「でもゆりかさんなら、髪が跳ねても綺麗だと思うよ」

「あつ、そうですね、わたしもそう思う！　ピシッとしてるゆりかさんも素敵だけど、ちょっと気を抜いてる感じも可愛くていいですよね！」

「うんうん、そのとおり！」

「なんなんですか、それは。まったくもう……」

明らかに呆れ顔になりながらも、微かに頬を赤らめて視線を逸らす。

あ……ゆりかさんでも、恥ずかしいものなんだ。

いつもわたしがからかわれてばかりだから、これからは反撃しちゃおうかな。なんて考え、思わず笑みをこぼす。

わたしの隣では、優季くんも同じように微笑んでくれている。楽しくて温かな時間。

無理矢理つき合わせてしまって、ゆりかさんには悪いとは思う

し、彼女はじれったく感じているだろうけど。それでもわたしは、優季さんと時間を共有できて、とっても幸せだった。

公園の前で優季さんと別れたあと、いつもの曲がり角までゆりかごさんと一緒に歩いていると、彼女がぽつりと不満を口にした。

「まったく、わたくしをネタにしてお喋りしないでいただきたいですわ」

でもその声は、強く非難をするようなものではなく、温かな微笑みを含んだ優しい響きだった。

「ごめんなさい。でも、あまり話すの得意じゃないし、どうしても視界に入ったものを話題にしちゃうの……」

「わたくしはもの扱いですか？ ひどいですわね。それに、いいんですか？」

「え？」

「恥ずかしいですけど、わたくしのこと、綺麗だなんて言うておりましたわよ？ 息吹さんまで一緒になって可愛いだなんて。そこは、わたしのほうが可愛いでしょ？ とか言って、自分に注目してもらうべきところではありませんか？」

「あ……」

ゆりかごさんの言葉を聞いて、そういえばそうかもと、今さらながらに納得する。さすがに、自分のほうが可愛いってのは、言いすぎだとは思っけど。

「それなのに息吹さんったら、わたしもそう思うだなんて。う……嬉しいですけど、ちょっとどうかと思いますわよ？　もしかしたら優季さん、わたくしのほうを好きになってしまつかもしれないじゃないですか」

いつもよりも早口でまくし立てる彼女。微かに顔を赤くして恥ずかしがっているみたい。

なんか、可愛い。

と思っていたら、

「わたくしのほうが確実に美人なんですから」

ゆりかごさんったら、平然とそう言い放った。

わあ。どこからそんな自信が湧いてくるんだろ。普通、自分のことをそんなふうに言えないよね。

もっとも、確かにそのとおりだとは思いつ、ゆりかごさんに言われたら、納得せざるを得ないけど……。

「そうよね、ゆりかごさんは肌も髪もつやつやで、すらりと細くてそれでも出るところは出ていて、黙っていれば美人で……」

思わずつぶやいていた言葉に、彼女は眉をつり上げて噛みついてくる。

「黙っていればって、どういうことですか!？」

「い……いえ、なんでもありません!」

慌ててごまかすわたしに、ゆりかごさんは優しい口調で問いかけてきた。

「それでは次回から、わたくしは先に帰って、ふたりきりにしましょうか？」

そっか、ゆりかごさんはわたしが思いきれるように、あんなふう
に怒った演技をしてくれたんだ。

だけどわたしは、彼女の想いに応えられず、

「……ううん、やっぱりまだダメ！　一緒にいて、お願い、ゆりか
ごさん」

そう懇願する。

だって、ふたりきりになったら、絶対に喋れなくなっちゃうもん。
ゆりかごさんがいてくれるからこそ、わたしは安心して優季く
んと話せるんだから。

わたしの答えを聞いた彼女は、案の定、小さくため息をこぼす。

「ふう、わかりましたわ」

「……ごめんね、ありがとう」

うつむき加減のわたしに、ゆりかごさんは温かな笑顔を向けてく
れる。

「まあ、そんな息吹さんだからこそ、わたくしはこんなにも大好き
なのですわ」

彼女はそう言いながら、わたしの右手をぎゅっと握りしめてくれ
た。

ゆりかごさんに迷惑をかけてしまっていることを後ろめたく思いながらも、わたしはそれ以上に、優季くんとたくさんお話できたことで浮かれていた。

家の玄関をくぐり、自分の部屋に滑り込んでからも、顔は自然とにやけてしまう。

弥生さんがいきなり入ってきたら、また醜態をさらしてしまうことになるなんて、考える余裕もなかった。

ぼーっと制服のボタンを外す手も止まりがちで、なかなか脱ぐことができず、部屋着に着替えるのもいつもの何倍も時間がかかってしまった。

部屋着のほうはボタンもないし、すぐに着ることができたけど。にやけ顔のまま着替えを終えたわたしは、制服をハンガーにかけてクローゼットにしまう。

と、その瞬間、弥生さんが襲来してきた。
コンコン。

「お嬢様、夕食の準備ができました」

ガチャリ。

ドアを開けて部屋に入ってくる弥生さん。
でも今日は、ノックの音で一瞬早く気づくことができた。

「あら、弥生さん。ありがとう。すぐに行きますね」

わたしは落ち着いた声で答える。

うん、今日は完璧。

なんて余裕をかましていたら。

あれ？ 弥生さん、必死で笑いを堪えてる……？

「お……お嬢様、上着が後ろ前ですわ。もう、小さい子供じゃないんですから。ぷぷぷ」

「はうっ！」

視線を下げてみると、彼女の指摘どおり、わたしの上着は前後逆の状態だった。

「ともかく、お食事、できておりますからね」

弥生さんは笑いを堪えながら、というか、ぷぷぷと、堪えきれなくなった笑い声を漏らしながら、わたしの部屋を去っていった。

こうしてまたしても、弥生さんに恥ずかしい姿を見られてしまう結果となってしまった。

ああもう、弥生さんにはいったいどれだけ、わたしの恥ずかしい話を提供していることだろう。

いつか彼女がうちのお手伝いさんを辞めることになったら、口封じに消すしかないかもしれないわね……。

そんな物騒な考えを思い浮かべながら、わたしは上着に手をかけた。

食卓に着くと、小百合さんがなんだか面白そうにニヤニヤと笑いながら話しかけてきた。

「ふふつ、息吹ちゃんは相変わらずですねえ。上着はちゃんと確認してから着るんですよ？」

「ぶつ！」

美味しそうな匂いを漂わせていたオニオンスープを、今まさに口に含んだところだったわたしは、思いつき吹き出してしまった。はう、またこのパターン！？

と思わなくもなかったけど、むせ返っているわたしには、弁解やら謝罪やらの言葉を吐き出す余裕すらない。

「あらあら、ごめんなさいね」

笑顔のまま、わたしに謝辞を向ける小百合さん。

「奥様、フキンです」

「まあ、弥生さん。いつもいつも、悪いわねえ」

弥生さんがすかさずフキンを持ってきて、そんな小百合さんに手渡した。

どうやら弥生さんは、隠れてこちらの様子を見ていたようね。いつもどおり。

なんやかんやと慌ただしくなってしまう食卓にも、随分慣れてきた感がある。

素早くわたしが吹き出したスープを拭き、フキンを弥生さんに渡すと、なにこともなかったかのように、夕食の時間は再開された。自分のせいではあるけど冷めかけていた料理の優しい味を楽

しみながら、わたしはいつものように小百合さんとお喋りをする。

「それにしてもさつきから、随分と嬉しそうですね。浮かれているというか……。あつ、もしかして、このあいだ話していた方と、上手くいったのかしら？」

楽しく会話をしていると、急にそんなことを言われ、わたしは思わず顔を真っ赤に染める。

「あらあら、図星なの？ 息吹ちゃんにも、ようやく恋人ができたのねえ。ふふつ、これはお祝いしなくてはいけないわねえ」
「えつと、その、こ……恋人とかってわけじゃないですけど！
でも、お話とかはするようになっていて……」

恥ずかしくはあったけど、でもなんだか嬉しくて、聞いてほしくて、わたしは必死の想いを言葉に乗せる。

そんなわたしの様子を、小百合さんはいつも以上に温かな瞳で見つめてくれていた。

「ふふつ、そう……。もうそんなお年頃なのねえ。吐息といきにも見せてあげたかったわ」

不意に、空気の流れが止まったような、そんな気がした。

わたしはあまり気にはいなかったけど、小百合さんはすごく気にしていることだから……。

小百合さんは、しまった、といったようなバツの悪そうな表情になって、口に手を当てたまま黙り込む。

吐息、というのは、死んでしまったわたしのお母さんの名前。

重苦しい沈黙が流れる。

いたたまれなくなつたのか、小百合さんは、そそくさと席を立つた。

「ごめんなさい……のどが渴いたので、お紅茶を用意してくるわねえ。息吹ちゃんも、飲みたいかしら？」

「あつ、はい、お願いします」

わたしは努めて自然に微笑み返しながら答える。

「そんなに気にすることないのに……」

小さなつぶやきは、小百合さんの背中にまで届くことはなかった。

小百合さんはあのあと、なにともなかったかのようにいつもどおりの笑顔をたたえながら、紅茶のカップを乗せたお盆を持って戻ってきた。

もう気にしていない様子だったから、わたしも気に病んだりせず、小百合さんとお喋りを続けることができた。

といっても、次から次へと繰り出される小百合さんの質問に、わたしが恥ずかしく思いながらも答えるだけだったのだけど。

夕食を終え、わたしが部屋に戻ってのんびりしていると、弥生さんがやってきた。

「お嬢様、お風呂が沸きましたよ」

「あつ、わかりました。ありがとうございます」

「今日はたくさん汗をかきましたでしょう？ ぶぶぶ」

「……………」

なんだか弥生さんって、わたしを小バカにしてる感じがしなくもないわ…………。

そんな不満を胸に抱きつつも、わたしはお風呂場へと向かった。

ゆったり広々とした湯船に浸かりながら、わたしはいろいろと考えていた。

優季さんとたくさんお話できて、嬉しくて楽しくて、舞い上がってしまいそうなほどのわたしではある。

でも、どうなのかな？

このまま、恋人とかになれるのかな？

はう、恋人だつて、きゃっ、恥ずかしい！

でもでも、そうだよね、ずっと今みたいに、お話だけしてても、お友達のままだもんね。

だけど、だけど……。

ぶくぶくぶくぶく。

お湯のせいだけでなく赤くなった頬を湯船に沈めて、意味もなく息を吹く。

あ……こんなふうに思いにふけてると、ふやけちゃうかな？
考えてみたら、もうかなり長い時間、お風呂に浸かっている気がする。

ふやけてブヨブヨになっちゃったら嫌だし、わたしは素早く湯船から飛び出した。

脱衣所に戻って体をしっかりと拭き、パジャマに着替えたわたしは髪を乾かしながらも、さらにぼーっと考え続けた。

さすがにちよつと暑かったから、換気扇を回している。

その音が響く中、自分で自分に問いかける。

わたしはいつたい、どうしたいのだろう？

換気扇による気流のせいか、微かな風がわたしのうなじをくすぐる。

そのとき、選択肢が頭に浮かび上がってきた。

『今のままで我慢する』

『もっと進展したい！』

恥ずかしいけど……。そりゃあやっぱり……。
わたしはゆっくりと、頭の中で二番目の選択肢を強くイメージする。

×『今のままで我慢する』
○『もっと進展したい!』

——うふふ、そうよね。

「え……?」

不意に声が聞こえたような気がして、わたしは慌てて辺りを見回した。

もしかしたら、わたしが知らず知らずのうちに声に出していて、弥生さんが隠れて見ていたのかも。
そう考えてみたりもしたのだけど。

いくら見回してみても、誰もいるような気配はなかった。
換気扇の微かなブーンという音だけが、不気味さを伴って鳴り響いていた。

ブルツ。

背筋の震えを感じる。

せっかくお風呂に入って温まったはずなのに、寒さすら感じてしまうほどに。

「……………気のせい……………だよね……………」

わたしは誰にともなくつぶやく。
なんだかちよつと気味が悪かったけど、単なる空耳、そうに決ま
っている。

そうよ。

わたしが優季くんとお話できて、浮かれすぎていたから。

あまりに浮かれすぎて、大失敗をやらかしてしまいそうなくらい
だったもんね。

きつと神様が、少しは頭を冷ますようと、気遣ってくれたに違
いない。

わたしはそう考えることにした。

それはあながち、間違いというわけでもなかったのだけど。

とりあえず、大きく深呼吸をする。

「うん。落ち着いたわ。さてと、それじゃあお部屋に戻って、そろ
そろ寝ようかな」

わざわざ声に出し、わたしはお風呂場をあとにした。

——うふふ、おやすみなさい。

なんとなく、背中からそんな声がかけられたような気がしたけど、
わたしは空耳だと自分に言い聞かせ、素早く部屋に戻るとベッドに
潜り込み、頭から布団をかぶる。

思った以上にお風呂場に長居してしまっていたらしく、いつもな
らとつくに寝入っている時間になっていた。

さっきの聲が気になって、さすがにすぐには眠れなかったけど、いつしか睡魔に包まれたわたしは、そのままどろみの中へと落ちていった。

もしもさっきの聲が、寝静まったあとだと思って侵入してきた泥棒の声だったりしたら、すごく危ないところだったとは思う。

でもわたしは、そうじゃないことだけは、なんとなく感じていた。だからこそ、怖がりながらも、そのまま眠ってしまえたのだ。

どうしてそう思えたのか、このときは全然わからなかったけど、もう少しあとになってから、わたしはその理由を知ることになる。

わたしと優季くんの公園でのお喋りタイムは、今日も続いていた。もちろん隣には、ゆりかごさんもいる。

いつもどおりの他愛ない会話に、呆れ顔ながらも我慢強くつき合ってくれている彼女。

ほんとに、どれだけ感謝しても足りないくらい。

三人でのお喋りタイムは、いつものようにほとんどわたしと優季くんのふたりでお喋りして、いつものように暗くならないうちにお開きとなった。

ベンチから離れ、公園の入り口で向かい合う。

優季くんは公園から出て左の道、わたしとゆりかごさんは右の道が帰路になる。

手を振り合い、それじゃあ、また明日、と挨拶を交わすところでわたしはポツリとつぶやいた。

「あの、そろそろテスト期間だし、優季くんもテスト勉強しますよね。こうやって遅くまでお話するのは、しばらくやめたほうがいいのかなあ……？」

わたしとしては、それが当たり前かな～と思ったから、そう言うただけなのけど。

ゆりかごさんは怒濤の勢いで反撃してきた。

「なにを言ってるんですか！ そんなの、関係ありませんわよ！」
「でも、テスト勉強の時間を減らして、優季くんに迷惑をかけるわけには、いけないと思うし……」

わたしは、遠慮がちに自分の意見を返すけど、ゆりかごさんの勢いは止まらない。

「おバカさんですね、迷惑だなんて思うわけじゃないですか！　ねえ？」

「うん、そうだよ」

優季くんも、微かな笑顔のまま、そう言ってくれた。

それでもわたしは、まだ納得がいかない。

その様子を察してくれたのだろう。ゆりかごさんは考え込むような仕草を見ると、すぐにポンと手を打った。

「それでは、こうしましょう。お勉強会ということにして、一緒に勉強すればいいんですわ。これなら、会っている時間をテスト勉強の時間と共有化できますわよ！」

グッドアイデアでしょう？　とでも言いたげな瞳で見つめてくる彼女。

「え……でも……範囲とか違うんじゃない？」

「同じ空間でお勉強する、それだけでいいんです。範囲なんて、関係ありませんわ」

小さな声で反論するわたしに、ゆりかごさんはきつぱりと言いきった。

さらに、

「場所は……、できれば優季さんのお部屋がいいんですけれど……」

なんて、図々しい提案まで続ける。

「い……いくらなんでもそれは悪いよ！」

と言いながらも、そうなたら嬉しいなと密かに期待を込め、わたしはおずおずと視線を上げると、優季くんの反応をうかがった。

にこっ。

いつもどおりの、心をぼわ〜んとさせてくれる温かな笑顔。
そして、

「うん、いいよ」

優しい声で、優季くんは答えてくれた。

というわけで早速、次の日の放課後、わたしたちは優季くんの家に向かっていた。

いつもの曲がり角で待ち合わせしたあと、公園の前を通過して、そのままさらに先へ。

優季くんの先導に続いて歩くあいだも、いろいろとお喋りしながらの道中。

「ご両親が共働きで帰りはいつも遅いから、夕方のこの時間にいることはないと話してくれた。

どうやら兄弟もいないらしい。

ということとは……。

「あら、ふたりきりになれるチャンスじゃないですか」

ゆりかごさんはわたしの耳もとに顔を寄せると、面白そうにそうささやき、さらに、

「ふふふ、わたくし、用事ができたと言って、すぐに帰りましょうか？」

なんて言い出す。

「や、だ、だ、ダメ、ゆりかごさんも、いてよ！ ふたりきりは、さすがにまだ、ちょっと……」

慌てながら答えるわたしに、いつもどおり、呆れたため息をつく彼女。

よりいっそうの小声で、ニヤニヤしながら、こう言った。

「まったく、意気地なしですね。わたくしがいたら、キスもできないじゃないですか」

「そそそそそ、そんなこと、まだ恥ずかしいからいいんだもん！」
「ん？ なにが恥ずかしいの？」

思わず大声を出していたわたしに、優季くんが首をかしげながら訊いてくる。

「いや、あの、ごめんなさい、なんでもないです！」

必死にごまかすわたしの顔は、耳まで真っ赤に染まっていた。そしてゆりかごさんは、そんなわたしを見て、おなかを抱えて笑

っていた。

「さ、どうぞ」

「はい、お邪魔します」

カギを開けてから玄関のドアを開けたわけだから、さっき聞いていたとおり、家には誰もいないのだろうとは思ったけど。

それでも一応、失礼にならないよう声をかけてから、上がらせてもらった。

「汚い家でごめんね。それに狭いし。お嬢様のふたりにこんな家に来てもらうなんて、やっぱり悪かったかな？」

「い……いえ、そんなことないです！ とても綺麗にしていると思います。お母様が、しっかり掃除なさってるんでしょうね。それにわたしたちのほうが押しかけたようなものですから、悪くなんて全然ないです！」

優季くんのいつもの笑顔が少し曇りがちだったこともあってか、わたしは必死になって言葉を並べる。

もちろんそれはお世辞なんかじゃなく本心だ。

わたしが住んでいる小百合さんの家や、ゆりかごさんの家と比べたら、確かに狭いのは間違いない。

だけど、広ければいいってもんじゃないと思う。

小百合さんの家は弥生さんが掃除してくれているから綺麗だけど、わたしの部屋だけは、勝手にいじられたくないというのもあって、

掃除は自分ですると言っていた。

そのせいで、部屋の中は結構散らかっている。

ゴミが山のように積み重なっているとか、脱いだ服がそこら辺に散らばっているとか、そこまでひどい状態ではないけど、几帳面とお世辞にも言えない性格のわたしだから、ちよつと雑然としていくことが多い。

わたしの部屋と比べたら、優季くんの家はずっと綺麗だと思った。

それに、なんだかちよつと、なにかのお花のようないい香りがするし。

優季くんは少しはにかんだ笑顔を見せると、わたしとゆりかごさんを、家の奥へと案内してくれた。

家の奥……そこはもちろん、優季くんのお部屋だった。

生まれて初めて入る、男の子の部屋……。

わたしは緊張して、思わず足が震えてしまう。

優季くんがふすまを開けて、中に導いてくれた。

そっか、優季くんのお部屋は、畳の和室になってるんだ。

「散らかってて恥ずかしいけど、どうぞ」

「邪魔しまゝす……」

ふわっと、温かな匂いが包み込む。

家の中に入ってから感じていたお花のような香りとは、また違った匂い。

ベンチで隣に座っていると感到っていた、微かな優季くんの匂い。

それが今ここでは、はっきりと感ぜられる。

「ちょっと、息吹さん、そんなにじろじろ見るのは、失礼ですわよ？」

「あつ……！」

わたしは思わず、きよろきよろと隅から隅まで、優季くんの部屋の様子を目に焼きつけるように眺めてしまっていた。

「じつ、じめんなさいっ！」

「いや、べつにいいよ、気にしないで。とりあえず、ここに座ってて」

そう言って、優季くんはふたり分の座布団を用意してくれた。

「ありがとう」

素直に従い、わたしとゆりかごさんは座布団に腰を落ち着ける。

「いきなりでごめん、トイレに行ってくるから、ちょっと待っててね」

優季くんはそう断りを入れて、部屋から出ていった。

それにしても落ち着かない。

座布団に座ったまま、わたしはまたしても無意識のうちに部屋中に視線を巡らせていたらしい。

「ふふふ、気になりますのね？ お部屋の中、いろいろと調べてみます？」

いたずらっぽい笑みを浮かべながら、ゆりかごさんがそんなことを言い出す。

さらに続けて、こんなことまで。

「きっと、エッチな本なんかも、隠してあると思いますわよ？」

わたしは思わず真っ赤になって反論する。

「そそそ、そんなのないもん！ たぶん……。それに、勝手に部屋の中をいじるなんて、ダメだよ！」

「ふふふ、そうですね、息吹さんもお部屋に隠してあるものを見つかったら、大変ですものねえ？」

「な……。なに言ってるのよっ！ わたしはべつになにも……。！」

「あら？ プリントアウトして差し上げた優季さんの写真も、隠さず堂々と置いてありますの？」

「う……。！ で、でも、部屋にはないもん！」

「あゝ、肌身離さず持っておりますのね」

「あう、……。うん……。！」

どう考えても、わたしのほうが部が悪い。

ゆりかごさんと言い合いをした場合、ほぼ確実に同じような流れになる。

やっぱりわたしって、ゆりかごさんには勝てないんだな、というのを実感した。

「それにしても、殿方のお部屋ですのに、綺麗に整頓されておりますわね。必死になって掃除したのでしょうか？」

突然話題を変える彼女。つまり、勝ったことを悟ったのだ。ま、いいんだけど。いつものことだし。

「きつと普段から綺麗好きなのよ」

わたしも新しい話題に乗り、そう答える。

するとゆりかごさんは、意外な言葉を返してきた。

「そうかもしれませんが、もしそうだとしたら、ちょっと問題

「かもしれませんわよ？」

「え？ どうして？」

わたしの疑問に、彼女はためらうことなく言い放った。

「息吹さんのお部屋と、どちらが綺麗かを考えましたら……、答えはおのずと出ると思いますけれど」

「は、はう……！」

そういうことか！

つまり、わたしの部屋を優季くんに見られたら、だらしない女の子だと思われて、嫌われちゃう、ってことだ。

「うう……、優季くんをわたしの部屋に呼ぶこと、絶対にできないわ……」

頭を抱えるわたしを、ゆりかごさんは面白そうに見つめている。

「ふふふ、大丈夫ですわよ。その程度で嫌うような殿方ではありませんわ、優季さんは」

「ゆりかごさんったら、もう！」

つまり、わたしはからかわれたんだ。

……でも、あれ？

そうすると、わたしの部屋は汚いって、認めてることにならない？
ちよっと慚然とした表情を浮かべるわたしだった。

「遅いですわね」

しばらく他愛ないお喋りを続けていると、ゆりかごさんがポツリとつぶやいた。

確かに優季くんは、トイレに行っただけ、一向に戻ってくる気配がない。

「……大きいほうでしょうか？」

「ちよ、ちよつとゆりかごさん！」

そんなことを言ったら、さすがに悪いよ。

彼女に文句の声をぶつけようとしたそのとき、すつと、ふすまが開かれた。

「お待たせ」。紅茶を淹れてきたよ。お菓子もあったから持ってきた。あ……でも、こんな庶民的なのは、お口に合わないかな？」

にこつと笑顔を浮かべて、お盆に載せたお皿やカップを運んできてくれた優季くん。

「そそそそ、そんなことないです！　ありがとうございます！　わあ、わたし、ポテチ大好きです！」

ちよつとはしたくない詮索をしていた後ろめたさも手伝って、わたしは不自然なほどに、はしゃいだ声を上げていた。

「はい、息吹ちゃん、あ〜ん」
「あ〜ん！」

わたしはお母さんが指でつまんで目の前に差し出したそれに、勢いよくかぶりつく。

ぱくつ。

かぶりついた瞬間に、

パリッ！

心地よい響きが奏でられる。
破片が周囲に散らばってしまいそうではあるけど。
そんな細かいことを気にするのは無粋ってものだ。

口の中に引き入れたそれを、わたしはまだ小さかったはずの歯で細かく噛み砕く。

そのたびに、パリパリパリッと音が鳴る。

「ポテチって、パリパリおとがして、とってもおいしい〜！」
「うふふ、よかったわね〜」

わたしが満面の笑みを浮かべると、お母さんも同じように笑顔になる。

「それじゃ、わたしも……」

パリッ。

お母さんもひとつポテチをつまむと、小さく口を開けて上品くわえる。

「あん、おかあさん、わたしのぶんが、へっちゃう」

「うふふ、ごめんなさい。でも、少しくらい、いいじゃないの。ね？ お母さんにも、ちょうだい？」

「うゝ……。うん、わかった。でも、ちょっとだけだよ？」

「うふふ、ありがとう」

他愛ない、おやつどきの会話。

「でも、こんなもの食べさせてもいいのかい？ 吐息だって、お屋敷では絶対に食べさせてもらえなかっただろう？」

笑顔が咲き乱れるわたしとお母さんに、真面目な顔で水を差すような言葉を放ったのは、お父さんだった。

休日だったから、お父さんも一緒におやつの時間を楽しんでいたのだ。

「そりゃあ、ぼくたちのことは正式に認められていないけど、でもキミはあのお屋敷のひとり娘で……」

少し寂しそうな表情を隠すようにつつむきながら、お父さんはそう続けた。

「爽快さん……。そんなことをおっしゃらないで。わたしはあなたの妻ですわ」

お母さんは温かい笑顔で、お父さんを包み込む。

「「「ういう普通の生活ができて、わたしはとても幸せなんですよ」

とっても、いい雰囲気だな。

幼いわたしにも、その温かな空気はしっかりと感じられた。

「おとうさんとおかあさん、らぶらぶ。ちゅーは、しないの？」

笑顔でふたりの様子を眺めていたわたしの言葉に、お父さんもようやく笑顔をこぼす。

「まあ、この子ったら、おませさんね」

お母さんの笑顔も、よりいっそう大きな花を咲かせる。

温かな家庭の温かな笑い声は、いつまでもいつまでも消えることはない、そう信じて疑わなかった。

「それじゃあ、また明日」

「ええ、ごきげんよう」

優季くんの家でのお勉強会を終え、ゆりかごさんとふたりでお喋りしながら曲がり角まで歩き、そしていつものようにわたしたちは別れ、それぞれの家へと向かう。

今日はお勉強会という名目だったから、あまり優季くんとたくさんお話したりはできなかった。

でもなんといつても、お部屋にお邪魔することができたのだから、わたしはそれだけで幸せいっぱいだった。

「これでふたりきりなら、お勉強会そっちのりで、いろいろとできたはずなのに……」

なんて、ゆりかごさんはぶつぶつ言っていたけど。

いろいろって、なんだろう？ お勉強会なんだから、お勉強以外になにをするの？

と思わなくもなかったけど、細かいことは気にしない。

清々しい気分を抱え、薄暗くなりかけた住宅街を歩く。

高級住宅街の一角にある小百合さんの家。

薄暗いとはいっても、街灯は多いから、真っ暗になるような場所はない。

ただ、誰も通らない道は、やけに静かに感じるもので。

周りの住宅からは明かりが漏れていて、微かに人の声なんかも聞

こえたりはしていたけど。それでもなんだか、寂しさを覚えてしま
う。

ひゅ〜……。

吹きすさぶ風が、心なしか冷たく感じられたのは、そんな寂しさ
による錯覚だったのだろうか。

と、不意に頭の中に選択肢が浮かび上がってくる。

『急いで帰る』

『ゆっくり帰る』

『立ち止まってみる』

ん〜？

どういうことだろう？

はっ……！　もしかして小百合さんや弥生さんが倒れたりして、
大変なことになってるとか！？

心配だけど、もし急いで走り出したら、いきなり車が飛び出して
きて事故に遭ってしまふなんて可能性もあるんじゃない？

どうしよう……。

こうして選択肢が視えるときって、場合によってはすごく危険な
状況もあったりする。

大抵はちよつとした違いで、もし間違った選択をしても、それほ
ど問題ないことが多いのだけど……。

とりあえずここは、考えるのが先決かな？

× 『急いで帰る』

× 『ゆっくり帰る』

○ 『立ち止まってみる』

頭の中で、わたしは選択肢を選ぶ。
その瞬間。

——うん、一番いい選択だわ。

声が、聞こえた。

「え……誰？」

わたしは辺りを見回す。

だけど、誰もいない。

以前にも似たようなことがあったな……。

そうだ、お風呂場で髪を乾かしてるときだ！

あのときは気のせいだと自分に言い聞かせて、そのまま部屋に戻って寝てしまったけど。

今のは聞き間違いようもないほど、はっきりとした声だった。

「誰かいるの？」

きよろきよろと頭を振り、あらゆる方向に目を凝らす。

——見えはしないわ。

うふふ、と笑い声を添えながら、声は響く。
この声、いったいどこから聞こえてくるの？

——うふふ、あなたの頭の中に直接響いてるのよ。だから、声と呼ぶのは正しくないかもしれないわね。

わたしの思考に、今度は明らかに答えを返してくる、その声……。

「あなたは、誰？」

周囲を気にし、ちょっと声のトーンを落として尋ねてみる。

——あたしは、そよぎ。やっと気づいてくれたわね。

声は自分の名前を名乗った。

姿は見えないけど、声の感じからすると女性のように思えた。
もっとも、声と呼ぶのも正しくないみたいだし、実際どうなのかはわからないけど……。

「あなたは、いったい……？」

なにがなんだか、わたしにはまったく理解できない。

——うふふ。まだ内緒にしておくわ。

そよぎと名乗った声は、そう言って笑った。

——でも、ずっとそばにいたのよ。

「……お風呂場での声も、あなたよね？　そよぎさん」

思いきって尋ねてみる。

——ええ、そうよ。怖がってくれて、とっても楽しかったわ。

そよぎさんからは、平然としたそんな答えが返ってきた。

わたしで楽しまないでよ……。

思わず文句が頭をよぎる。

——ごめんなさいね。でも安心して。わたしはあなたの味方よ。
あなたも薄々感じてはいたでしょう？

そう言われ、わたしは確かに、最初から危険なんて感じていなかったことを思い出す。

——さ、お話はこれくらいにしましょう。暗くなる前に帰らないと、おうちの方が心配するわ。

「そう……ね」

わたしは素直に従って、歩き出した。

歩き出してから、そよぎさんの声はぱったりと聞こえなくなってしまった。

声は聞こえなくなっただけ、わたしの背後には、そよぎさんの気配が確かに感じられていた。

気配と表現していいのかは、よくわからないけど。

わたしが歩くと、足音もなく気配だけがついてくる。

なんだか、ホラー映画みたいな感覚。

けどわたしは、怖さなんて微塵も感じていなかった。

家に着いて玄関のドアを開けると、いつもどおり弥生さんが出迎えてくれた。

小百合さんもすでに帰ってきていて、「ちよつと遅かったわね。

お勉強会、しっかりやってきたのね」と声をかけてくれた。

わたしは平静を装いながら、ふたりと軽く会話を交わしたあと、階段を上って自分の部屋へと入る。

弥生さんや小百合さんと話しているあいだは感じられなくなっていたから、もしかしたらさっきの声は気のせいだったのかも、なんて淡い期待を持ってしまっていたけど。

気配は、やっぱりまだあった。

感じられる気配自体が微弱なものだから、他に人がいると、よくわからなくなってしまうだけのようだ。

しゅる。

リボンをほどき、制服を脱ごうとして、ピタリと手を止める。

さっきの声、女性のようなではあったけど実際にはどうなのかわからないから、着替えるのをためらったのだ。

わたしは思いきつて、ちょっと抑え気味の声で話しかけてみた。

「そよぎさん……いる？」

——ええ、いるわよ。

やっぱりさっきの声は、気のせいではなかったのだ。

淡い期待が泡のように消えた瞬間ではあったけど、なぜかそれを残念に思ったりはしなかった。

それどころか、なんとなくではあるけど、ほっと安堵すら感じていたように思う。

——あたしはあなたの心の中にいるの。だから、わざわざ声に出さなくても、考えていることはあたしに伝わるわよ？

「そう、なんだ……」

そよぎさんの言葉の意味は理解しているものの、反射的に声に出してしまう。

——ま、あたしとしては、どっちでもいいんだけどね。

頭の中に声が響いて語りかけてくる現状に、わずかばかりの驚きはあった。

だけど、穏やかで温かな声。わたしはそよぎさんの声を、そのように感じていた。

だからなのか、意外にすんなりと、そよぎさんの存在を受け入れていた。

わたしはもともと選択肢が視えたりするちよつと変わった能力を

持っているから、超常的な存在に対して、慣れというか免疫みたいなものがあつたのかもしれない。

「えっと、そよぎさん、あなたは女性、なの？」

——うゝん、一応、そういうことになるかしらね？

ちょっと曖昧ではあつたけど、彼女の答えに、わたしはひとつ頷く。

「そっか。なら、いいわね」

しゅるしゅる。

わたしは止めていた手の動作を再開し、制服を脱ぎ始めた。

部屋着に着替え、夕食を取りながらの小百合さんとお喋りタイム。

小百合さんは、しきりに優季くんのことを訊いてきた。

本当の母親ではないけど、わたしが青春していることを心から嬉しく思っているらしい。

ただわたしは、すっかりそよぎさんのことを口走ってしまわないように気をつけていたからか、どこか受け答えがぎこちなかったかもしれない。

秘密にしなければならぬ、と言われているわけでもないけど、口外するのはあまりよくなさそうに思う。

普通ならこんなこと信じないだろうけど、それはそれで、話したら頭のネジが外れた女の子だと思われるかもしれないし。

小百合さんと楽しくお喋りしながらも、わたしはなんだか疲れてしまっていた。

そしてそのあと、ゆっくりお風呂に入って部屋に戻ると、もうすっかり夜も更けていた。

わたしはベッドに潜り込む。

お風呂に入ってさっぱりした今になっても、疲れは残ったままだった。

テスト勉強もしなきゃならないところだけど、とてもそんな気分にはなれなかった。

明日早く起きて、朝から勉強すればいいかな。

そう考えたわたしは、こうして布団をかぶって、就寝態勢を整えていたわけだけど。

——ねえ、まだそれほど遅い時間じゃないし、せつかくだから少しお話ししようよ。

突然そよぎさんの声が響いた。

「うーん、眠いから、今度でいい？」

——えー？　せつかくこうしてお話できるようになったのに。

明らかに不満をぶつけてくる彼女。

ぷっつと頬を膨らませているような様子が思い浮かび、自然と頬が緩む。

せつかくだからお話してもいいかな、と思わなくもなかったのだ
けど。

それでも、眠気のほうが上回っていたわたしは、

「ごめんね、今日は寝させて……」

とだけ言って、眠りの淵へと急速に沈み込んでいく。

——ちょっと、息吹さん……。ふう……。まったく、仕方ないわ
ね……。

そんなそよぎさんの声が、最後に聞こえたような、聞こえなかつ
たような。

といったところで、わたしの意識は途切れた。

——もう明日にまで、迫ってきているというのに……。

最後の最後につぶやいた彼女の声は、わたしの意識にまで届くこ
とはなかった。

どんよりとした低い雲が、空一面を覆い尽くしていた。

わたしはいつもどおり、ゆりかごとさんとふたりで曲がり角に立っている。

もちろんそれは、優季くんが通りかかるのを待ったためだ。

以前と違っていているのは、優季くん本人が、それをわかっているということ。

だから、クラスメイトの由梨絵さんを待っている、なんて下手な小芝居は必要なくなっている。

他愛ないお喋りを続けながら、優季くんが通るのを待つわたしたち。

学校が違うわけだから、朝は会えたとしても挨拶を交わす程度でしかないのだけど。それでも毎日顔を合わせられるだけで、わたしは嬉しいのだ。

辺りはどんどん薄暗くなってきている。

朝なのに、夜明け前のよう。

雲が次第に厚みを増してきているのだろう。

まだ梅雨時期ではないのに、じめじめした雰囲気。

天気予報は見てこなかったけど、おそらくもう少ししたら、あの真っ黒な雲から雨粒がこぼれ落ちてくるに違いない。

それにしても優季くん、遅いな……。

もうそろそろ、通ってもいい時間帯なのに。

というか、今日はなんだか、おかしい気がする。
どういうわけか、全然人が通らない。

いつもなら春雨高校の生徒が何人も通っていくし、今くらいの時間なら藤星女学園や藤星女子大の生徒だって登校しているはずなのに……。

「来ませんわね、優季さん。遅刻してしまいますし、そろそろ行きましょうか？」

「……そうね、行きましょう」

ゆりかごさんに促され、わたしは学園へと向かって歩き出した。

歩き出してから、周囲の不自然さは変わらない。

誰ひとりとして、通りかかる人の姿を見つけれなかった。

少なくとも学園に近づけば、登校するたくさんの方の生徒たちが、ゆったりとした足取りで歩いているはずなのに。

ちょっと、遅くなりすぎた？

それとももしかして、今日って休日？

あつ、それとも、創立記念日とか……？

もしそうだったとしても、わたしだけならともかく、ゆりかごさんまで間違えるなんてことが、あるはずもない。

創立記念日は確か冬だったはずだし。

それに、今日が金曜日ということにも間違いはないはずだ。

昨日優季くんの家でお勉強会をしたあと、「週明けからテストだ

し、明日の放課後と土日の三日間、しっかり勉強会を続けて頑張りますしょう」って、誓い合ったのだから。

急遽お休みになったとかは？

連絡網で回ってくるとは思うけど、わたしたち、優季ちゃんと会うために早く家を出ているから、間に合わなかったとか……。

でも、それにしたって、まったく人がいないというのは、あまりにも不自然だ。

いくら通学路といっても、通勤時間帯でもあるのだから、駅に向かう人だって通りかかったりはするはずなのに。

わたしが怪訝な表情をしていることに、ゆりかごさんは気づいてすらないのか、わたしのすぐ右隣を寄り添うように歩いている。

ただ、空は明らかに暗くなっていた。

それどころか、学園に近づくにつれ、空気すらも重くなっていくかのように思えた。

藤星女学園の敷地を中心に、なにか禍々しいものが渦巻いている。そんなふうにする感じられるほど。

そして、わたしのその感覚は、どうやら間違いではなかった。

学園の前までたどり着くと、いつもどおり正門が開かれていた。

開かれている、にもかかわらず、中が見えない。

正門の高さより上は、うつすらとではあるものの見えていたから、そこに校舎が存在していることだけは確認できた。

だけど正門のある場所には、来る者を阻むかのように真っ暗な壁のようにも見える、渦巻くような気が立ちはだかっていたのだ。

それが煙なのか雲なのか、はたまたもつと別のおぞましい物体なのか、それはわからない。でも足を踏み入れるには、どうしてもためらいが生じる。

ぎゅつ。

ゆりかごさんが、わたしの右手を握る。

言葉はない。だけど、じつとりと汗をかいているのは伝わってきた。

彼女も目の前に広がる不可思議な現状に、不安を感じているのだ。

『踏み込む』

『帰る』

正直、すぐにでも引き返して、自分の部屋にこもって頭から布団をすっぽりとかぶりたい気分だった。

夢ならば早く覚めてほしい。

だけど、ゆりかごさんの手の温もりと汗の感触は、確実にわたしを現実に取り戻す。

「そよぎさん、どうすればいいの……？」

小さく、つぶやいてみた。

返事は……ない。

自分で決めなくちゃダメってこと……？

気づけば黙ったまま、ゆりかごさんがこちらに瞳を向けている。

息吹さん、どうしましたの？

言葉にはしないものの、瞳でそう尋ねているようだった。

わたしは覚悟を決める。

○ 『踏み込む』

× 『帰る』

「ゆりかごさん。行くわよ？」

「……ええ」

彼女もぎゅっと、よりいっそう強く手を握り返しながら応えてくれた。

意を決して正門をくぐると、学園内は案の定、薄暗かった。

でも、正門をくぐる前に見た壁のような暗雲から想像していた、一寸先すらも見えないといった状況ではなかった。

空一面と敷地の周りを分厚い雲や霧なんかが覆っていることを除いた風景だけで考えるのであれば、さほどおかしい部分はないようにすら思えた。

ただ、明らかな異変があった。敷地内のあちこちに、妙な物体が転がっている。

その正体に気づいたとき、わたしは驚きを隠せなかった。信じられない光景に、言葉を失った。

おそらく、隣で立ちすくんでいるゆりかごさんも、わたしと同じ気持ちだろう。

敷地内のあちこちに転がっている物体。

物体扱いするのは、さすがに悪いかな……。

それらはすべて、藤星女学園の制服を身にまとっていた。

お嬢様学校と呼ばれるこの学園の生徒たち。

初等部から高等部までの、様々な年齢の女子生徒たちが、地べたに這いつくばって、ごろごろと転がっていたのだ！

スカートのプリーツは乱さないように。

静かで優雅な物腰を心がけ、決して慌てた様子を見せないように。それがこの学園のモットーとなっている。

もちろん、若い女の子ばかりの集まりだから、たまには騒いだり

はしゃいだりして羽目を外すこともある。

だけど基本的には、みんな、おしとやかに立ち振舞う。

ここではそれが当たり前だった。

それなのに……。

「これ……、いったい、どうなってるの……？」

わたしの声に、ゆりかごさんはもちろん、心の中のそよぎさんも答えてはくれない。

ただ、女子生徒たちは、地べたに這いつくばっているとはいえ、苦しんだり力尽きて倒れたりしているわけではなさそうだった。

虚ろな表情ではあるものの、どちらかといえば、恍惚といった雰
囲気。

制服が汚れるのも、スカートがめくれて太ももがあらわになるのも気にせず、気持ちよさそうに、ごろごろと身をよじっている。

小百合さんの旦那さんである幸人さんなど一部の理事の人を除いて、藤星の敷地内に男性がいることは、まずほとんどない。

それでも、たとえ女性に見られたとしても、さすがにこの状況では、はしたないと思われてしまうだろう。

これがひとりふたりであれば、お嬢様生活に飽き飽きした人が反乱を起こしているとか、堅苦しい生活に縛られてちよっとおかしくなっちゃったとか、そういった可能性もあるかもしれない。……それはそれで問題だとは思っけど。

でも、さすがにこれだけたくさんの方が一斉に、というのは、いくらなんでもおかしい。

「あつ、もしかして、怪しげな薬品とかの煙が充満して、集団感染しちゃったとか!? わたしたち、すぐにここから出たほうがいいんじゃない!?」

わたしの焦りまくった声に、ゆりかごさんは落ち着いた対応をする。

「それはないと思いますわ。転がっているみなさんは、ほとんどがこの正門付近に集中しているようです。登校してきて正門から入ったあと、おそらく時間を空けずにこんな状態になってしまったと考えられます。もし怪しい薬品が気化してこうなったのであれば、わたくしたちもとくに、同じ状態になっているはずですよ」

こんな状態なのに、やけに冷静だな、ゆりかごさん。
わたしと違って、普段から冷静なのは確かだけど。
やっぱりわたしって、ゆりかごさんがいないとダメな女の子なのかな。

そんな考えが頭をよぎり、ちよつと沈んでしまう。
と、ゆりかごさんが不意に、握ったままだったわたしの右手を離した。

「……え?」

「わたくし、職員室のほうへ向かってみますわ! 見たところ、転がっているのは生徒ばかりですし、先生方の状況が気になります。もし意識を保っているようでしたら、大人ですから、わたくしたちふたりだけよりも頼りになるはずですよ!」

「うん……そうだね……」

あれ? でもそれなら、どうしてわたしの手を離したの?

その質問を言葉にするより早く、ゆりかごさんは駆け出していた。

「それでは、息吹さんは学園長さんのところへ行ってみてくださいませ！」

「え？ あの、ちょっと、ゆりかごさん！？ 今は一緒に行動したほうが……！」

わたしが呆然として右手を宙に泳がしながら叫ぶ声に応えることなく、彼女の背中は薄暗い校舎の中へと消えていった。

ぽつん……と、

わたしは怪しげな厚い雲が渦巻く正門前に取り残された。

「ど……どうしよう……」

つぶやきに合わせるかのように、生温かな風が吹き過ぎる。

『学園長室へと向かう』

『ゆりかごさんを追いかける』

選択肢が、頭に浮かんだ。

学園長のところ、つまり、小百合さんのところへ行けて、ゆりかごさんは言っていた。

義理ではあるけど、小百合さんはわたしのお母さんだから、そちらへ向かう役目を任せられたのだろう。

でも、小百合さん、学園に来てるのかな。

いろいろと外での仕事もあるのか、日によってまちまちみたいだ

けど……。

このところ早めに家を出るようになって朝は顔を合わせないから、今日の予定がどうなっているのか、わたしにはわからなかった。

じゃあ、無駄足になるかもしれないよね？

それなら確実に誰か先生がいそうな職員室のほうに、ゆりかごさんと一緒に行くべきなのかな……？

わたしが頭を悩ませていると、大きな怒鳴り声が頭の中に響き渡った。

——なにやってるのよ！ ゆりかごさん、手分けしたほうがいいって判断したんだと思うわよ？ 彼女の行動を、無駄にする気！？

ひっ！

いきなりの大声に、わたしは首をすくめる。
でも、確かにそよぎさんの言うとおりだ。

「そうね。小百合さんのところへ、急ぎましょう！ いなかったら、そのときにまた考えればいいのよ！」

わたしは大きく声を上げ、学園長室を目指して走り出した。

学園長室は校舎の中にあるわけじゃなくて、藤の館と呼ばれる建物の中にある。

藤の館は、小百合さんの館と言っても過言ではない。

館の中にあるのは、学園長室とお客様用のティールームくらいで、

他には小さな物置部屋が存在する程度だった。

レンガ造りで趣のあるたたずまい。

その館の大きな扉を、わたしは力いっぱい引き開ける。

カギはかかっていなかった。

館は二階建て。ティールームが一階にあり、学園長室は二階だ。

普通の生徒だと、学園長室に用事があることは、ほとんどないだろう。

でもわたしの場合、名字を偽ってはいえるものの母と子の関係だからか、何度か呼び出されたことがあった。

階段を駆け上がったわたしは、ノックするのも忘れて、学園長室の扉を開け放つ。

この扉も、わたしを拒絶することなく、すんなりと開いた。だけ――。

「小百合さん！ 学園内が、大変なことに……！」

わたしの声は、無人の学園長室の中に、空しく響くだけだった。

——そろそろ教えてあげるわね。

藤の館からとぼとぼと出てきたところで、不意にそよぎさんの声が響く。

「教えてあげるって、そよぎさんは今の状況がわかってるの？」

——ええ。だって、あたしも原因となっているひとりだもの。

「ええっ!？」

いったいどういうことなのか、わたしには全然わからない。

——うふふ、わからないからこそ、教えてあげるって言ってるの。

思考を読んだそよぎさんが、そう言って笑う。

——これはね、全世界規模のウィルスによるものよ。

彼女は淡々とした声で語り出した。

今、全世界規模でウィルスが広がり、大変なことになっている。そしてそれは、神々の覇権争いの一環として行われているのだと

いう。

数十年に一度、力関係をはっきりさせるために大規模な戦争を起こすのが、神々の世界での習慣となっていた。

そのタイミングが、まさに今年だった。

全世界規模で行われる神々の戦争。

前に行われたのは、数十年前ということになる。

いくら数十年前とはいえ、そんな大規模な戦争なんかがあったとしたら、記録に残っていないのはおかしいのでは。

そう思ったのだけど、どうやらそれも当たり前のことらしい。すべてが終わったあとに、神々の戦争に関する記憶は綺麗さっぱり消し去ることになっているからだ。

人間の記憶には残らないから、騒ぎにもならない。

そよぎさんはさっき、自分も原因となっているひとりだと言っていた。

そう、つまりは彼女も神様だということになる。

本来、名前という概念自体がないらしいけど、便宜上、そよぎと名乗っていたという彼女。

風を伝ってわたしの思念に入り込み、こうして会話までしている。だから、そよぐという意味合いで、その名前を使ったようだ。

どうしてわたしの思念に入り込んで会話をするなんて、そんなことをしたのかと尋ねると……。

——あなたは選ばれた人間なの。

きつぱりと、彼女はそう宣言した。

怪しげな契約とかの勧誘だろうか？

そんな感想を抱かないでもなかったけど。

そよぎさんは至って真面目に語り続けた。

——あたしたち神々に代わって、あなたが戦うの。そのための選択肢能力なのよ。

「え？ 戦う……？」

——そう。昨日までの試験期間を経て、あなたを実戦投入するところが決まったの。

「え？ え？ え？」

わけがわからないわたしを置いてけぼりにしながらも、そよぎさんの声は止まらない。

——そよぎって名前には、さっき言ったような意味もあったけど、それと同時に、戦いへといざなう意味をも含めていたのよ。

「ふえ？」

もう、わたしはおかしな生返事をするしかできなかった。

——そよぐ、って言葉、漢字で書くと、「戦ぐ」になるからね。

うふふ、そう笑う彼女の声は、なんだかとても遠い世界から響いてくるように感じられた。

さすがに理解の域を超えていて、わたしは現実逃避気味だったのかもしれない。

——ま、信じられないのも無理はないけど。

なんとなく、そよさんが肩をすくめている姿が目には浮かぶ。

——うふふ。神であるわたしには、実体というか、人間みtainな姿はないんだけどね。でも、そうやってイメージしてくれるのは嬉しいわ。シンクロしている証拠だもの。

「はあ、そうですか……」

夢うつつの状態ではあったけど、神という単語にだけは無意識に反応していたらしい。

怒らせたりしたらマズいだろうな、という思いが働いたのか、微妙に丁寧な言葉遣いへと切り替えていた。
でも、

——やめてよ、そんな他人行儀な喋り方なんて！

逆に怒られてしまった。

——あたしはあなたと一心同体なのよ？ 友達だと思って仲よくしてね！

続けざまに、そう言葉をつなげる彼女。
その様子からすると本気で怒ったわけではなさそうだから、ちょっと安心したけど。

だけど、神様とお友達って……。
いいのかな……。？

わたしは戸惑いを隠せなかった。

さすがに信じられないでいるわたしを、そよぎさんは声で誘導しながらも、さらなる説明を加えていった。

学園を覆い尽くすように渦巻く雲は、見るからに異常な空気の流れ……。

全国規模のウィルスとか言っていたはずなのに、どうして学園だけを覆っているのだろう？

わたしが疑問に思うと、すかさずそよぎさんが答えてくれる。

——それは今回の戦いの舞台が、この学園ということに決まったからよ。神々の戦いを盛り上げる、効果的な演出になってるわよね。

「はあ、そうなんだ……」

もちろん答えを聞いたところで、口からは乾いた返事しか出てこないのだけど。

ともかく、そよぎさんはさらに、わたしを正門の前にまで導く。そこでは今も、普段ならおしとやかに歩いているお嬢様たちが、恍惚の表情を浮かべながら、制服を着たままの姿で地べたにころころと寝っ転がっている。

やっぱり、異様な光景だ。

あれ？ でも……。

「全世界規模のウィルスで、こんなふうになっちゃってるんでしょ？ それなのに、どうしてわたしは平気なの？」

口に出す必要がないとわかってはいても、思わず質問の声はわたしの舌尖から飛び出していた。

——うふふ、それはね、あなたが神に選ばれた人間だからよ。

さっきと同様、すかさず答えが返される。

そっか。わたしは神様に選ばれたのよね。だから選択肢が視えるなんて能力まであつて……。

わたしの鈍い頭にも、徐々に自分の置かれた状況が浸透していく。

だけど……。

なんだかちよっと、引つかかる。

そのとき、突風が吹き荒れた。

「きゃっ！」

わたしはスカートを押さえ、目をつぶって風をやり過ごそうとする。

だけど、目をつぶったままのわたしの脳裏に、いつものように選択肢が浮かび上がってきた。

『右』

『左』

また、簡潔な選択肢。意味が、伝わってこない。

どうすれば、いいの？

と、これも以前に感じたことのある、カッチ、コッチという音が

響く。

5、4、3……

時間制限つきの選択肢ね！？

わたしは運を天に任せて、素早く片方の選択肢を選んだ。

× 『右』

○ 『左』

ぴょんつと、軽やかなステップで左側に飛ぶ。

その瞬間、さっきまでわたしが立っていた位置から右側の広い範囲の地面が、なくなった。

「え？」

いや、それはどうやら、わたしの認識能力を超えていただけらしい。

なくなったのではなく、一瞬にして押し潰されたのだ。どこからともかく落ちてきた、たくさんのガレキによって……。

「わ……きゃっ！？ なによ、これっ！？」

困惑するわたしに、興奮した感じの声でそよぎさんが叫ぶ。

——そう、あなたにはその力があるわ！ 選択肢という、神から与えられた力が！

「選択肢の力……」

オウム返しにつぶやくわたしに、そよぎさんはさらに力強い言葉で発破をかける。

——だから、戦って！　そして勝つのよ！　未来のために！

もとより優柔不断で、流されやすい性格のわたし。
彼女の勢いに圧されて、その気になり始めていた。

「う……うん、わかった。わたし、頑張ってみるよ。……できる限り……」

ちょっと最後に気の弱いところが出てしまっていたのは、ご愛嬌
ってことで。

とりあえず頑張ってみようという思いだけは、わたしの心の中で
膨れ上がっていた……のだけど。

——言っとくけど、選択を誤ったら、死、あるのみよ。気を抜か
ないでね。

「え……？」

死、などという、普段あまり意識しない事象は、すぐにはわたし
の頭の中に染み込んでこなかった。

——それと、あたしは助言とかできないから。あなたがすべてを
決める必要があるわ。頑張ってね！　……死なないように。

「え……と……」

たっぷり数分くらいの時間を要して、

やっとこさ、そよぎさんの言っている内容を理解したわたしは、

「ど……どうして、こんなことになっちゃってるのおー!？」

涙目になりながら、悲痛な叫び声をどんよりとした曇り空に轟かせる。

——ほら、泣いてたって仕方がないわよ。シャキツとしなさい。

「で、でも……」

さすがに、選択を誤ったら死ぬだなんて、そんなことを考えたら、平静を保ってなんていられないよ。

そう文句を言おうとしたのだけど。

——なに言ってるの？ 今までにだって何度も、間違ったら死ぬような選択肢があつたのよ？

「ふえっ？」

——小さい頃なんか、よくいろんな場所を冒険とか言って、歩き回ってたでしょ？ あのと息吹さん、何度も死と背中合わせの状況に陥っていたのよ？

「えええっ!？」

——それに最近だって、優季くんの家から戻るとき、止まってあたしの声に耳を傾けてくれたからよかったけど、急いで帰ったりな

んかしたら、交通事故に遭っていたのよ？

「ひう……」

——ついさっきも、学園長室へ向かわずにゆりかごさんを追いかけてたら、彼女に追いつく前に他の神様の襲撃を受けて、一発でこの世からサヨナラだったのよ？

「あうあうあう……」

もうすでに、まともな声を出すことすらできないわたしに、そよぎさんは声だけで微笑みかける。

——うふふ。そんなに怖がらなくても大丈夫よ。

「……そよぎさんが、助けてくれるの……？」

涙まじりの声で、どうにかしぼり出したわたしの質問に、

——ううん。それは無理。あなたは自分の力でどうにかしなくてはならないわ。

そよぎさんはあつさりと否定を返す。

——でも、もしあなたが死ぬ羽目になったら、苦しまずに一瞬であの世に逝けるようにするくらいはできるから。安心してね。

「安心なんか、できるか……」！

などと叫ぶような気力が、今のわたしにあるはずもなく。

わたしはへなへなと地面にへたり込んでしまった。

わたしはお母さんに手を引かれながら、通りを歩いていた。行き交う人々に、お母さんはなぜだか冷たい視線を向ける。

「息吹ちゃん、あなたは頑張らなくてはなりません」

「え？ なにに？」

お母さんがなにを言っているのか、わたしにはよくわからなかった。

「あなたは……神様だから」

「え？」

お母さんはそのとき、確かにそう言った。

幼いわたしには、なにを言っているか、いまいち理解できなかったけど。

「うふふ、今はわからなくてもいいわ」

ふわりとした温かな笑顔を送ってくれるお母さん。

理解はできなくても、お母さんの笑顔が大好きだったわたしは、精いっぱい笑顔で応える。

それを見て、お母さんは満足そうに頷いた。

そして笑顔を崩さずに、こう続けた。

「でもね、いざというときには一生懸命、それこそ死ぬ気で頑張らなくてはなりませんよ？」

「……うん！」

お母さんがなにを言いたいのか、よくわかってはいなかったけど、でも、お母さんが笑顔になってくれるならと、わたしは肯定の言葉元氣よく返す。

「すべてがあなたの肩にかかってくることもあるでしょう。でも負けちゃダメ。勝つんですよ！ 未来のために！」

「うん、わたし、まけない！ ぜったい、かつ！」

絶対、勝つ。

それはお母さんとの約束。

……そっか、お母さんはずっと昔から、わたしに訪れる苦難を見していたんだ。

お母さん、わたし、頑張るよ！

記憶の中のお母さんが、わたしの声を聞いて微笑んでくれたような、そんな気がした。

はっ……と我に返る。

地面にへたり込んだわたし。もしかしてそのまま、意識を失ったの？ それとも白昼夢でも見ていた？

どちらにしても、たいして変わりはないだろう。

ともかく、今は現状をどうにか打開しなくちゃ。

でも、どうすれば……。

考えを巡らせる。

——決まりだからあたしは手を貸せないけど、頑張って考えるのよ。

そよぎさんがエールを送ってくれるけど。

「でも、戦うってどうすればいいの？」

——他の神様に力を与えられた人間を見つけて、打ち倒せばいいの。

「そんなこと言われても困るよ……。どうやって打ち倒すっていうの？」

——うーん、能力を使って、としか言えないかしらね。

「能力って……選択肢が視えるだけの力で、どうやって戦えばいいのよ……」

きっと戦う相手は、強い力を持っているのだろう。

わたし、運動だって苦手だし、打ち倒すだなんて絶対に無理だ。

ダメ……。

どう考えても、わたしひとりの力じゃどうにもならない……。

口から次々と弱気な言葉たちがこぼれて落ちていく。

と、そこで思い至った。

ゆりかごさん！

そうだ、とりあえず彼女と合流しよう！

いつだって頼りになる、わたしの親友。

「ゆりかごさん！」

わたしは無意識のうちに叫び、素早く立ち上がると、彼女が入っていた高等部の校舎へと向かって駆け出した。

「息吹さん！」「ゆりかごさん！」

彼女とは、すぐに出会えた。

わたしが昇降口に近づいたところで、慌てた様子のゆりかごさんが飛び出してきたのだ。

お互いの名前を呼び合い、そしてお互いの存在を確認するように両手を握り合う。

「よかった、無事だったのね！」

「ええ。息吹さんも無事でなによりですわ。それで、学園長さんはおりました？」

彼女の言葉で、当初の目的を思い出す。

そうだった。そよぎさんからいろいろ聞いて、すっかり忘れてしまっていた。

「ううん、いなかった。職員室はどうだったの？」

「先生方は、いるにはいたのですが、残念ながら正門前とまったく同じ状況でしたわ。教室にも向かってみたのですが、クラスメイトのみなさんも同じように、寝っ転がってだらけきった感じで……。先生方もクラスメイトのみなさんも、いくら声をかけても反応はありませんでした」

「そっかぁ……」

事態はやっぱり、深刻のようだ。

「いったい、どうしたらいいんだろう……」

ゆりかごさんに会えた安堵もあったからか、わたしはつい、弱音を吐いてしまった。

「大丈夫ですわ。わたくしがついておりますから」

そっと、彼女はわたしを包み込むように、優しく抱きしめてくれた。

「あっ、そうだ。ゆりかごさん、あのね——」

しばらく彼女の温もりに包まれ気持ちが落ち着いたあと、ようやくわたしは語り始めた。

そよぎさんから聞かされた、信じられないような話の数々を。

わたしにはしばらく前からそよぎさんの声が聞こえていて、今こうして、尋常ではない状況に陥っている。

それでもなお、まだ半信半疑だった。

頭の中に声が響いてくるという現象。

確認したことはないけど、他の人にその声が聞こえるわけではないだろう。

ならばそれが幻聴や気のせいだという可能性は拭いきれないのではないか。

そういった考えも残っていたからだ。

でも、目の前に広がる光景は明らかに異常事態。

たとえこの声が幻聴だったとしても、現状を把握し、打破する手助けにはなるかもしれない。

——あのね、幻聴でも気のせいでもないわよ？ いい加減、現実を見据えなさいな。

なんて声が脳裏に響く中、わたしはゆりかごさんに語り続ける。

わたしは神様に選ばれた人間らしいということ。

選択肢が視えるのは、そのせいだということ。

神々は数十年に一度、覇権争いのために、大規模な戦争をするということ。

そして、今のこの状況は、その神々の戦争として引き起こされた、全世界規模のウィルスによるものだということを。

「……………え〜っと……………」

さすがのゆりかごさんも、目を丸くしている。
うん、そりゃそうだよな。

だけど彼女は、やっぱり落ち着いていた。

素早く制服のポケットからケータイを取り出すと、ピポパポと
にやら操作し始めた。そしてじっとケータイの液晶画面を見つめる。

「……………信じがたいことはありませんが、どうやら息吹さんの言っ
たとおりのようですわね」

彼女はそう言って、画面をわたしのほうに向けた。

「ニュース番組の映像ですわ」

そこには、騒然とする町並みを背に、物々しい防毒マスクのよう
なものをかぶったレポーターが慌てた様子でなにやら叫んでいる姿
が映し出されていた。

なにを言っているのか、まったくわからないほどのレポーターの
慌てぶりが、いやが上にも緊迫感を誘う。

そしてさらにその画面には、「全世界ウィルス大パニック！」と、
おどろおどろしく装飾された文字が大きく表示されていた。

「やっぱり、本当のことなんだ……」

思わずこぼれた、弱々しいつぶやき。

「ふふふ、息吹さん、あれだけ長々と説明してくださったのに、自分では信じられていなかったんですね」

「あう、ごめんね」

「ふふふ、べつに謝ることではありませんでしょう？　むしろ息吹さんらしくて、微笑ましいですわ」

ゆりかごさんは、そう言って笑った。

ううん、なんだかちょっと、引かかる言い方のような気がしなくもないけど。

それを指摘しているような場面でもないだろう。

だいたい今ゆりかごさんに機嫌を損ねられたら、わたしのほうが困ってしまう。

「でも、どうすればいいんだろう？」

わたしはとりあえず、質問で話の流れを強制的に変えることにした。どっちにしても、それは考えなければならぬ問題だったわけだし。

そんなわたしの思惑なんて、どうやらお見通しだったようで、ゆりかごさんは一瞬だけ小さく「くすっ」と笑みを漏らすと、すぐに答えを返してくれた。

「そうですね、まずは現状を把握することから始めましょうか」

落ち着いた声でそう提案する彼女に、わたしは黙って頷く。
ゆっくりと頭を回し、周囲の状況を網膜に映し込む。

さっきまでと、なにも変わっていない。

制服を着たお嬢様たちが、虚ろな目ではあるけどなんだか気持ちよさそうな表情を浮かべながら、地べたに這いつくばりごろごろと身をよじっている。

「この辺りには、倒れた生徒たちがたくさんおりますわね」

「うん……。ウィルスのせいなんだよね？ このままにしておいて大丈夫なのかな？」

「心配ですけど……、今の状況で救急車を呼んでも、おそらくこの学園にはたどり着けないと思いますわ。敷地内を覆っているこの厚い雲は、外界から遮断するためのものと考えるべきでしょうから」
「じゃ……じゃあ、見捨てろって言うの!？」

ついつい大声で怒鳴りつけてしまうわたし。そんなことを言われても、ゆりかごさんにはどうしようもないのに。

「呼びかけにも反応しませんし、正常な意識を保っているとは言えない状態ですが、彼女たちの様子を見る限り、苦しんだりはおりませんわ。ですから……大丈夫だと、信じましょう……」

そう言いながらも、当然ながら彼女にだって確信は持てないのだろつ、苦々しい表情で言葉をしぼり出す。

あれ？ でも……。

「ねえ、ゆりかごさん。これって、ウィルスによるものなんだよね？」

「ええ、そのようですわね」

わたしの言葉に、ゆりかごさんはためらうことなく答える。
でもそのウィルスは、神々が覇権争いの一環として起こしている
戦いによつてばらまかれたと、そよぎさんから聞いていた。

そよぎさんもその争いに関わる神々のうちのひとりで、どうやら
わたしを選んでくれたということらしい。

戦うつて言っていたから、わたしは戦闘員とかつて扱いになつち
やうのかな……？

ともかく、そうやって神様であるそよぎさんに選ばれたからこそ、
わたしはウィルスにも負けず平気でいられる。

それじゃあ……どうしてゆりかごさんは平気なの？

背筋を、冷たいなにかが伝って落ちていくような、そんな気がし
た。

だ……だけど、わたしと一緒に学園に入ったから、それに彼女は
わたしの親友だから、そよぎさんが力を貸してくれてたとか……？
ねえ、そよぎさん、そうなのかな？

そよぎさんからの返事は……ない。

と、そんなわたしの困惑を振り払うように、ゆりかごさんが凜と
した声を響かせる。

「息吹さん、あれを見てください！」

「え？」

反射的に、わたしは彼女が指差している方角に目を向けた。

藤星女学園の敷地の周囲には、どんよりとした暗雲が渦巻いている。それは変わっていない。

ただ、よく見ればその暗雲は、ある一点を中心にして、竜巻状にうねりながら上昇しているように見えた。

そしてそのある一点というのが、ゆりかごさんの指し示す先。

「特別教室棟の、屋上……？」

「ええ。どうやら、そのようですね」

職員室や家庭科室などがあって、最上階の四階には広い図書室がある特別教室棟。

その屋上部分から、竜巻状の柱のようなものが天高くまで、あたかも龍のように舞い昇っていた。

「行くしか、ありませんわよね」

「……うん……」

ゆりかごさんが平気なのは、きっと偶然よ。

全世界的なウィルスだって、抵抗力が強い人だとかは、いるはずだもん。

なんたって、ゆりかごさんなんだから。

こうして今も一緒にいて、いつもどおり、足取りも心持ちも覚束ないわたしを、力強く引っ張ってくれている。

だから、大丈夫。

わたしは自分に言い聞かせて、駆け出す彼女の背中を追った。

一階の昇降口には一年生と二年生の前半クラスの下駄箱があり、外階段を上った先の二階昇降口には二年生の後半クラスと三年生の下駄箱がある。一年生であるわたしたちの下駄箱は一階だ。

わたしたちはなんとなく薄暗い昇降口から、校舎内へと入っていた。

自分の下駄箱から上履きを取り出し、素早く履いて、脱いだ靴を下駄箱に放り込む。

下駄箱は教室棟と特別教室棟をつなぐ渡り廊下に併設されているから、そのままわたしたちは渡り廊下へと足を踏み入れる。

普段は廊下を走る生徒なんていない藤星女学園だけど、今はそんなことを言ってはられない。

転ばないように気をつけながら、大急ぎで渡り廊下を走る。

「あつ、ゆりかごさん、屋上に行くんだよね？ カギ、開いてるのかな？」

走りつつも、素朴な疑問を浮かべるわたし。

「ふふふ、大丈夫ですわ」

「え？」

どうして大丈夫なの？

あつ、さっき職員室に行ったから、そのときにカギを持ってきたとか？

あれ？ でもそれって、おかしいよね？

屋上を見たときに、ドアが開いてるのが見えたのかな？

疑問が膨らむばかりのわたしではあつたけど。

そんなことはすぐに吹き飛んでしまう。

もうそろそろ特別教室棟に差しかかる、その刹那、見知った人影がわたしたちの前に立ちはだかったからだ。

それは――。

「あれ……？ 優季くん？」

そうそれは、いつもどおりの優しげな笑顔をたたえた、優季くんその人だった。

わたしもゆりかごさんも、足を止め、優季くんと対峙する。
彼は、春雨高校の制服を着ていた。

男性をほとんど見かけることのない藤星女学園の敷地内で、その姿を目の当たりにすることができなんて。

これがないこともない日常の中で、たまたま尋ねてくれた彼と出会えた、というのなら手放しで喜ぶべき場面なのだけ。

優季くんは、どうしてここにいるの？

疑問はわたしの顔を強張らせる。

彼は、微笑みを浮かべたままだ。

でもその笑顔を、素直に受け入れられないわたしがいる。

隣にたたずむゆりかごさんの腕をそつとつかむ。

彼女もわたしの右腕に手を添えてくれた。

わたしが怯えているのは、優季くんにだってわかるはず。

黙って笑ってないで、わたしを安心させてよ！

全世界がこんな状態だから、心配になつて飛んできたんだとか、
言つてよ！

普通の優季くんの様子から考えて、そんなことを言ってくれるような性格でもないとは思っけ。

わたしのその望みは叶えられることなく、一刀両断のもとに斬り捨てられることとなる。

「屋上へは、行かせないよ」
「ふえっ？」

言葉の意味を理解するよりも早く、わたしの頭の中には選択肢が浮かび上がっていた。

『逃げる』

『逃げる』

『逃げる』

……え？

わけがわからず、呆然と立ちすくむわたし。

と、優季くんは笑顔のまま……まっすぐ飛びかかってきた！

とっさに横に飛んで、身をかわす。

鈍いわたしにしては珍しく、瞬時に動くことができたのは、選択肢が視えていたからだろうか。

結局、選んでいる時間すらなく、すでに選択肢は頭の中から霧散して消えてしまっていたけど。

瞬間的に身をかわすことには成功したものの、勢いよく横に飛んだあと、しっかりと地に足を着き、素早く身構える……なんて芸当が、このわたしにできるはずもなく。

バランスを崩したわたしは片膝をつく。

完全にすっ転ばなかったただけマシと言えるだろう。……運動とか、苦手だし。

ともかく、片膝をついた姿勢で優季くんに鋭い視線を向け、大声

で呼びかける。

「やめてよ、優季くん！」

そんなわたしの悲痛な叫びに応えてくれたのは、優季くんではなくそよぎさんだった。

——無駄よ、優季くんもあなたと同じ。神に選ばれた人間だわ！

神に……選ばれた人間……。

だからこうして、戦いの舞台となっている藤星女学園の敷地内にいる。

だからこうして、今わたしの目の前に対峙している。

つまり……。

——そう、彼はあたしと敵対する神によって選ばれた人間。ひと言で表現すれば、「敵」ってことよ！

そよぎさんの言葉は、わたしの頭の中でぐるぐる回る。

でも、どうしても受け入れられない。

うつん、受け入れられなかった。

だけどそれは、夢や幻ではなく、紛れもない現実だった。

優季くんは睨みつけるわたしの視線から目を逸らすことなく、じっと見つめ返していた。

不敵な笑みを、浮かべながら——。

この期に及んでも躊躇していたわたしが、悪かったと言えるだろう。

状況はより悪いほうへと転がっていく。

彼が……一瞬だけ視線を逸らした、と思った瞬間、視界から消えた。

いや、飛んだのだ。

……ゆりかごさんのほうへ！

「きゃっ！」

短い悲鳴を上げるゆりかごさんの背後から腕を回し、彼女を押さえ込みながら、徐々にわたしとの距離を広げていく。

ゆりかごさんは身をよじって逃れようとするも、優季さんの腕によって完全に首周りと腰の辺りを決められ、成すすべもない。

いくら細身で繊細な雰囲気とはいえ男性である優季さんの力に、お嬢様の彼女では歯が立たないのだろう。

「優季くん、卑怯よ！ ゆりかごさんを放して！」

わたしは叫び、素早く立ち上がる。

そしてゆりかごさんを助けようと、果敢にも立ち向かおうとしていたわたしに、優季くんが鋭い言葉を投げつける。

「おっと、動かないで。お友達の命が惜しかったら、黙って言うことを聞くんだよ」

にじつ。

いつもなら思わずぽわ〜んと心が温かくなる優季くんの笑顔も、今の状況ではわたしの背筋を凍えさせる効果しかなかった。

——あの笑顔を見てはダメよ！

「えっ？」

そよぎさんの叫び声に、わたしは戸惑いながらも、優季くんから視線を逸らした。

「どういうこと？」

——優季くんのあの笑顔は、神から与えられた力なのよ。あなたの選択肢を視る力と、同じようにね。

淡々と説明するそよぎさん。

——見た者の心のすき間に入り込み、深層心理から操る。それが優季くんに与えられた力のような。

彼女の言葉に、わたしは気持ちが深海の底へと沈んでいくように感じられた。

優季くんの笑顔は、神様に与えられた力……。
見た者の心のすき間に入り込み、操る力……。

それって、つまり……。

わたしの想い——優季くんのが気になっていたあの淡い想いは、その力のせい……だったの……？

茫然自失の状態ではあったけど、仮にも本人が目の前にいるから、わたしはどうかそれを口走ることだけは堪えた。

ただ、そよぎさんはわたしの心の中にいる存在。わたしの思いはそのまま彼女のもとへと届く。

——そうね……そういうことになると思うわ。

そよぎさんは無情にも、きっぱりとわたしの心を切り裂く結論を突きつけた。

断定していないのは、わたしを氣遣つてのことか、それとも確信までは持てないのか。

どちらにしても、たいした違いはない。

わたしにとって、残酷な現実だということに――。

そんなわたしの様子を、優季くんは相変わらず笑顔のまま眺めていた。

初めて優季くんを見たあとき――。

ビビビツと電流が流れたようにすら感じられた。

お父さんに似ている、そのイメージも相まって、どんどん気になっていった。

ゆりかごさんも応援してくれて、最初はアンケートを装って近づいたわけだけど。

でも少しずつ仲よくなつて。

ふたりきりではまだ恥ずかしかったから、常にゆりかごさんも一緒だったけど。

テストの勉強会を、優季くんの家で一緒にやって。

おつき合いとか、そんなことまではまだ考えられなかったけど、自分の優季くんに対する想いは本物だ。

そう、思っていた……。

……？
だけどそれは、神様から与えられた優季くんの力のせいだった……？

神々の戦いのために進められていた準備の一環で、最初から優季くんはわたしを騙していた……？

違う言い方をすれば、わたしはもてあそばれていた……？
そうということなの……？

じつと、優季くんを見据える。

お父さんと似た雰囲気を漂わせる、ちよつと線の細い感じの整った顔立ち。

微かな笑顔を向けながら、優季くんもこちらに視線を送っている。

そんなことを言っている場合じゃないけど、見つめ合っているよ
うな今の状況……。

やっぱり、ドキドキする。

このドキドキすらも、深層心理を操られたことによる、かりそめの気持ちだというの？

無駄な抵抗かもしれないけど、わたしはうじうじと考え続けていた。

頭の中に、選択肢が浮かび上がる。

『かりそめの気持ちを振り払い、優季くんと戦う』
『違う、あれは本当の気持ちだった!』

わたしは迷うことなく、瞬時に片方を選ぶ。

× 『かりそめの気持ちを振り払い、優季くんと戦う』
○ 『違う、あれは本当の気持ちだった!』

わたしの気持ちは本物だった。
そう信じたいだけ、というのもあったかもしれない。
でも、迷いはない。
だから……。

優季くんと戦うことなんて、できない!
わたしは声を限りに叫ぶ。

「優季くん、目を覚まして!」
「もうお昼過ぎだよ? 寝ぼけてるのは、キミのほうなんじゃないのかな?」

なにをバカなこと言ってるんだか。
そんな冷笑を受けながらも、わたしは怯まない。

——ちよっと、戦わないって、どうするつもり? この戦い、負

けるわけにはいかないのよ!?

そよぎさんの文句は聞こえたけど、わたしは無視する。
神様だかなんだかが優季くんを操って、戦わせてるだけなんだ。
わたしはそう考えた。

だからきつと、優季くんは目を覚ましてくれる。

そのために、少し恥ずかしいけど――。

彼のそばに行って、ぎゅっと、抱きしめてみよう。
そうすれば、きつと――。

一歩一歩、わたしは優季くんに近寄っていく。

「ん? どうしたの? やっぱり寝ぼけてるのかな? ま、いいや。そのままゆっくりこっちに来てね。一撃で、終わらせてあげるよ」

余裕の笑みを貼りつけたままの優季くん。

――なにやってるの? 不用意に近づいたら、危ないわよ!?

待っててね。今すぐ、わたしが解放してあげるから。

両手を前に伸ばし、彼のもとへ――。

と、そのとき。

突然、耳をつんざくような爆音が響いた。

「なんだっ!? うわっ!」

なにが起こったのか、理解できなかった。

それは優季くんも同じようで、慌てた声を上げている。

爆発……。

そう、優季くんの頭上、天井の辺りで突然、爆発が起こったらしい。

さほど大きな規模の爆発ではなかったみたいだけど、天井からは次々とガレキが崩れ落ちてくる。

そしてその大量のガレキは、優季くんと、そして彼が抱えたままのゆりかごさん目がけて襲いかかった。

信じられない大音量が、普段は静かな渡り廊下に轟き、反響する。わたしの目の前は、舞い上がったホコリによってなにも見えなくなっていた。

「くっ……、余計なことを……！ ゲホッ、ゲホッ！」

どうやら直撃を受けたりはしなかったみたいだけど、ガレキや舞い上がったホコリが口や器官に入ってしまったようで、優季くんのむせ返る声が聞こえてくる。

そして……、

「仕方がない、ここは退こう。息吹さん、またね。……生きていたら、だけど」

そんな言葉だけを残し、舞い上がったホコリが薄れて消え去ったあとには、優季くんの姿はどこにも見えなくなっていた。

わたしは気が抜けて、ぺたりとその場に座り込む。

神様に力を与えられた人間と、わたしは戦わなくてはならない。
それが、そよぎさんから力を与えられたわたしに課せられた使命
だ。――

だけど……だけど……。

わたしの苦いつぶやきに、そよぎさんはなにも答えてはくれなかった。

熱い雫が、心の奥底から湧き上がってくるように感じられた。

でもそれがこぼれ落ちるより早く。

わたしは、我に返る。

周囲を見回し、彼女の姿を探す。

さほど大きくはなかった爆発の規模から考えると、多すぎるくらいのがレキが、うず高く積み重なっている。

そのガレキの山の陰辺りに、ホコリまみれになつた彼女の白い腕が微かに見えた。

「ゆりかごさん！」

呼びかけながら、ゆりかごさんに近づこうとする。

その前に立ちはだかるのは、ガレキの山。

でも軽い素材ばかりだったのか、ガレキは意外と簡単に払いのけることができた。

わたしはゆりかごさんの近くあるガレキをすべて払いのけると、彼女の傍らに寄り添った。

「ゆりかごさん、大丈夫！？」

「ええ……大丈夫、ですわ……」

につこりと、

彼女は笑顔を返してくれる。

「よかった……」

ほっと息をつく。

ぎゅっ。

ゆりかごさんがわたしの両手を握った。

「ゆりかごさん……」

そうだよね、いきなり後ろから押さえつけられて、さらには頭上にガレキが降り注いできたんだもんね。

いくら普段は気丈に振舞っている彼女でも、怖かったよね。

ぎゅっ。

わたしも優しく、彼女の両手を握り返す。

ぐいつ。

「え？」

ゆりかごさんはそんなわたしの手を引っ張り、そのまま抱き寄せた。

ぎゅっ。

今度は手のひらだけでなく、全身に彼女の温もりが伝わってくる。

ぎゅ~~~~。

そのまま、なんだか必要以上にわたしを強く抱きしめてくるゆりかごさん。

そんなに、怖かったのかな……？
でも……ちょっと、これは……。

「ちょ、ちよつと、ゆりかごさん……」

痛いくらいに強く抱きしめられ、ところ構わず触れられて、わたしは声を漏らす。

その声に反応したからか、ゆりかごさんは頭の位置をずらし、じつと、わたしの瞳を見つめてきた。

「どうしたんですの？」

強く抱きしめ合っていた体勢から、お互いに顔を向き合わせた、今の状況。

「わっ、ゆりかごさん、近い近い！」

すぐ目の前に彼女の綺麗な顔があって、喋るたびにお互いの息遣いが感じられるのは、いくら女の子同士だとはいえ、どぎまぎしてしまっ。

そりゃ確かに、ゆりかごさんは普段から、なんだかすぐに手を握ってきたり、べたべたくっついてきたりする傾向にはあったけど……。

でも、これは、さすがに、ちょっと、その……。

焦りまくるわたしをじっと見据えたまま、ゆりかごさんは微笑んだ。

「ここまで来た目的、お忘れですか？ さあ、屋上へ行きましょう？」

言われて初めて思い出す。

そっか、そうだった。

優季くんが現れたことで、すっかり忘れていた。

だけど……。

さっきの優季くんの行動を見ていて、そしてこのガレキにまみれた状況の中にいて、なおも落ち着いてそう促してくる彼女。

どう考えても、不自然だ。

なんだか、瞳も虚ろな気が……。

そんなわたしの困惑もお構いなしに、ゆりかごさんはわたしを見つめ続ける。

「ゆりかごさん……？」

「なにを心配なさってますの？ 早く行きましょーよ、ねえ？」

彼女は背中に回していた腕を離すと、再びぎゅっとわたしの両手を握りしめて、

そして――。

にたあゝ。

不気味に、笑った。

『一緒に行く』

『離れる』

頭に浮かび上がった選択肢。わたしは瞬時に決断していた。

×『一緒に行く』

○『離れる』

どんっ！

わたしはゆりかごさんを突き飛ばして、彼女との距離を取ろうとする。

「あら、どうなさったのですか？」

一瞬目を丸くする彼女だったが、強く握った両手は離してくれない。

わたしは彼女から離れることができなかった。

「なんて、白々しいことは、やめますわね。ふふふ、わたくしには全部わかっておりますわ、あなたの考えが」

ゆりかごさんは、わたしの右手を握りしめている左手に、痛いくらいに力を込めた。

「ちょ……っと、痛いよ、ゆりかごさん……！」

必死に腕を引き抜こうとするわたしをあざ笑うかのように、彼女の腕はびくともしない。

「ここまで言っても、まだ気づかないのですか？ ……それとも、信じたくないだけなのかしら？ ふふふ……」
「うっ……」

うめき声を上げるわたし。

それが、手の痛みから来ているのか、心の痛みから来ているのか、わたし自身にもわからない。

ゆりかごさんを信じたい気持ちなのは確かだ。

でも……。

さっきから疑問に思っていた。

全世界規模のウィルスが猛威を振るっている状況らしいのに、ゆりかごさんは、どうして平気なのか……。

わたしは、そよぎさんという神様から能力を与えられた人間だから、大丈夫だった。

ということとは……。

言葉にするまでもなく、明らかではあった。

それでも言葉にすることをためらう。

そんなわたしにトドメを刺すべく、ゆりかごさんは口を開いた。

「ふふふ、そう。お察しのとおり、わたくしも優季さんや息吹さんと同じ、神様に選ばれた人間なのですわ」

わたしの両手を握ったまま、彼女はそう言い放った。

やっぱり……そうなんだ……。

絶望感がわたしの心を支配する。

じゃあ、ゆりかごさんとも、戦わなきゃいけないってこと？

——そういうことに……、

「そういうことになりますわね」

わたしの思考を読んで答えを返そうとしたそよぎさんの声を遮るように、ゆりかごさん本人が答える。

「え？」

思わずきょとんと彼女を見つめてしまう。

だってわたしは、声に出して言っただつもりはなかったから……。

「ふふふ、そんなに熱烈に見つめられては、わたくし、照れてしまいますわ。ポッ」

ゆりかごさんは、そうやっておどけてみせる。

でもすぐに、ふっ……と、軽く笑い声をこぼし、語り始めた。

「ふざけるのはここまでにしましょうか。教えて差し上げます。わたくし、左手で触れた人の考えていることが、手に取るようにわかりますの。それが、神様から与えられた力ですわ」

言いながら、彼女は左手にわずかに力を込める。

込められた力は、わたしの右手が、彼女の温もりとともに受け止める。

にこつ。

不意に――。

ゆりかごさんは普段どおりの、温かい笑みを浮かべる。
少なくともわたしにはそう見えた。

でもそれは、偽りの笑みだった。

今度は反対の手に、力が込められる。さっきと同じように、わたしの左手が、それを受け止め……。

――だ……ダメっ！

そよぎさんの悲鳴のような声が、耳の奥で鳴り響いたような、そうでないような……。

いつの間にか、わたしの頭は、なんだかぼーっと呆けたような状態になっていた。

「そして右手で触れていれば、その人の思考を誘導できますの」

ゆりかごさんの声が、わたしの頭の中で温かな響きを奏でる。

「さあ、屋上へ行きましょう」

「……うん……」

わたしは彼女に手を引かれ、運命に導かれるように、一步、足を踏み出した。

——ダメよ！

『ゆりかごさんの言葉に従う』

『腕を振り払って逃げる』

『戦う』

不意に、選択肢が浮かび上がった。

その瞬間、呆けたような状態に陥っていた思考回路がはつきりとその働きを取り戻す。

……逃げなきゃ！

戦う、という選択肢は、わたしにはありえなかった。

だから、残ったふたつの選択肢の中から、とっさに逃げることを選ぼうとする。

ただ、ゆりかごさんの両手は、ずっとわたしの両手を包み込んだままだった。

「ふふふ、選択肢ですわね？ わたくしには視えはしませんが、なんとなくわかりますわ。……息吹さん、わたくしを拒絶するつもりですか？ 親友であるこのわたくしを……。そんなこと、しませんわよね？」

彼女が思考を読んで、干渉しようと言葉巧みにわたしを揺さぶる。

だけどわたしは、身を切るような思いでその言葉を振り払った。

× 『ゆりかごさんの言葉に従う』

○ 『腕を振り払って逃げる』

× 『戦う』

「……ごめんなさい！」

言葉を振り払うだけでなく、ゆりかごさんの両手をも力強く振り払ったわたしは、素早く彼女から離れる。

そしてそのまま、一目散に手近にあったドアを開けて、渡り廊下から外に出た。

あんな爆発があつてガレキに埋もれていた中でもドアがすんなりと開いたのは、幸運だったと言えるだろう。

わたしは無我夢中で走った。

ゆりかごさんはそんなわたしを、追いかけてきたりはしなかった。

ドアの外は中庭だった。

園芸部が育てている花壇があつて、色とりどりの花々が咲き誇っていた。

この中庭から、校庭や裏門へも出ることができる。

でもどういうわけか、わたしはすぐに花壇のそばにある植え込み

に身を隠し、そして息を潜めた。

どうやら追いかけてきてはいないらしい、ということには気づいていた。

ただど無意識のうちに、ゆりかごさんのことが気になったのかもしれない。

そつと、渡り廊下のほうをうかがう。

ゆりかごさんの姿は見えない。

ドアの辺りにも、窓ガラスを通して見える渡り廊下の中にも、彼女はいなかった。

——よく決断したわね。

「ひゃああああつ！」

突然かけられたそよぎさんの声に、わたしは思わず悲鳴を上げてしまう。

姿の見えないゆりかごさんが、実はすぐ背後に迫っていたと、勘違いしたからだ。

すぐに口は閉ざしたけど、

「おどかさないですよ……」

小声で愚痴をこぼすくらいは、大目に見てほしいところ。

——うふふ、ごめんなさい。

そよぎさんは、素直に謝ってくれた。

とりあえず辺りをうかがってみるけど、人のいる気配はない。ほっと息を吐く。

「あ……上履きのまま外に出てきちゃった。はしたないね……」

そんな細かいこと、今は気にしているような状況じゃないのは確かだけど。

少しは心に余裕を持つことができたからこそ、こんな言葉が口からこぼれ落ちたのだとも言える。

「だけど、これからどうしよう……。学校から出るべきかな……。？」

——でも外に出たところで、どうにもならないわよ？ 神々の戦いが終わるまでは、なにも変わらないわ。

手助けはしないと断っていたわりに、そよぎさんはしっかりと疑問に答えてくれた。

わたしはそれを心強く思っていた。今のわたしにとって、頼れる人はもう他に誰も残されていないから……。

そのとき、ふと、さっき昇降口から校舎に入る前に見た光景が思い浮かんだ。

「そつだ……。屋上に、なにかあるはずよね……」

教室教室棟の屋上から昇りゆく、竜巻のような雲の柱。

この学園を取り巻いているどんよりとした暗雲の中心となっているのは確実だろう。

ゆりかごさんは、わたしを屋上へ導こうとしていた。

とすると、罨だという可能性は高い。

でも、だからこそ屋上に行って決着をつけないといけないような、そんな気がした。

せつかく逃げてきたのに、という思いもあるけど……。

——うふふ……。

そよさんが、微かに笑う。

そして、そよ風が吹き抜ける。

『ずっと逃げ続ける』

『ここで静かに隠れている』

『屋上へと突撃する』

選択肢が、わたしの決断を促すかのように、脳裏にその姿を現す。
もう、迷いはない。答えは決まっている。

×『とにかく、ずっと逃げ続ける』

×『ここで静かに隠れている』

○『屋上へと突撃する』

「行くしかないわ！」

わたしは叫び、植え込みから飛び出すと、渡り廊下のドアから中へと舞い戻る。

——頑張ってね。

静かな口調で、そよぎさんもわたしの心を後押ししてくれた。

「おかあさん……？」

わたしは遠慮がちに声をかける。

だって、お母さんはいつものような明るい笑顔じゃなかったから。お母さんの頬には、キラキラときらめく雫が伝っていたから。

「うふふ、大丈夫よ、なんでもないわ……」

一生懸命笑顔を形作り、わたしを安心させようとしてくれるけど、それが作り笑いだというのは、幼いわたしにもわかった。

わたしはそつと手を伸ばし、お母さんの頭を撫でる。

そつと……優しく……壊れてしまわないように……。

「……ありがとう、息吹ちゃん」

お母さんは微笑んでくれた。

まだ弱々しくはあったけど、今度は、作り笑いなんかじゃなかった。

だからわたしも、笑顔で応えた。

きゅっ……と。わたしの頭を抱きかかえるように包み込むお母さん。

ポカポカ陽気のお日様に照らされた、お花畑のような匂い。心も体も、温まっていく。

そんなわたしに、お母さんは言い聞かせる。

「息吹ちゃん。生きているとね、世間にはわかってもらえない、孤

独な戦いになることもあるの」

……………???

お母さんの腕に包まれながらも、首をかしげる。

「でもそんなときには、わたしの顔を思い出してね」
「……………うん！」

よくはわからなかったけど、わたしは素直に頷く。

「友人も、家族も、恋人でさえも、敵に回るかもしれない。だけど最後には必ず、もとどおりの仲よしさんに戻れます」

「ん……………？ ……よくわからないや」

わからないまま頷くのもよくないと思ってしまったのか、今度はちょっと考えてみたものの、わたしにはやっぱり理解できず、反射的にそう口にしていた。

「うん、そうね。でも、大丈夫」

お母さんはわたしを強く抱きしめる。

そして続けられた言葉を、わたしはつい今しがたまで、すっかり忘れてしまっていた。

「自分の信じる道を往きなさい。そのための力を、あなたは持っているのだから……………」

特別棟の階段を駆け上って、わたしは屋上へと向かう。
進むべき場所が、ここなのか。確信があるわけじゃない。
でも、なにかあるはず。

その証拠に、そよぎさんもなにも言ったりはしない。
神々の戦いに勝つためには、わたしが決断しなければならないらしい。

だけど彼女は、決まりで手助けはできないと言いながらも、たびたび口を挟んでいた。

戦うのはわたしだけど、そよぎさんにとっても勝たなくてはいけない戦いなのだ。

さつき優季くんと会ったときなんて、笑顔を見てはダメとか、明らかにわたしを助けるような発言までしていた。

あれは規則違反なんじゃ、と思わなくもないけど、きっと無意識のうちに叫んでいたに違いない。

そよぎさんは、直接わたしを導くことはできなくても、不利になるような事態は避けたいと考えているのだろう。

つまり、このまま突っ走っていくことが、そよぎさんの望んでいる方向でもあるはず。

わたしは勢いに乗って、階段を上りきった。
目の前に、屋上へと続くドアが立ちはだかる。
いつもは閉めきられているそのドア。
でもわたしの勢いは止まらない。

ゆりかごさんに、屋上のカギが開いているのか問いかけたとき、彼女は大丈夫と答えた。

だから大丈夫。

その考えが正しいことは、すぐに証明された。

勢いよくドアノブつかむと、素早く回して、ドアを押し込む。ドアは、わたしをいざなうかのように、難なく開いた。

屋上へと飛び出すわたしを、強い風が出迎えてくれる。

ツインテールの髪が風にもてあそばれ、まるで龍のように舞い踊る。

っていうか、頭やら顔面やらにぶち当たって、ひたすら痛い。

こんなことなら、ツインテールになんてするんじゃないかった。

敵は自分自身の髪の毛か！

いやいや、落ち着け、わたし。

強風とツインテールの打撃に、思わず目をつぶっていたわたしは、手でガードしながらもゆっくりと目を開ける。

渦巻く暗雲。その中心へと向かって上昇する竜巻のような雲の柱が、屋上の奥のほうにはつきりと見えた。

でも、それよりも手前に。

わたしはなんだか場違いな光景を目撃する。

「あらあら、息吹ちゃん。よく来たわねえ」

そこには、

突風の吹き荒れる中、まったく動じることもなく、ガーデンチェアとテーブルをセッティングして、優雅な雰囲気でティータイムを楽しんでいる、

わたしの義理のお母さんにして藤星女学園の学園長、小百合さんの姿があつた。

「え……小百合さん？　こんなところで、なにをしてるんですか？」
困惑に包まれながら尋ねるわたし。

彼女がティータイムを楽しんでいる周囲には、色とりどりの花が飾られていた。

さすがに屋上だから、全部鉢植えだったけど。
その数はかなりのもので、小百合さんとテーブルやガーデンチェアの周りをすっぽりと包み込んでいた。

テーブルの上には、ケーキや上品なお菓子類を乗せたお皿が並べられ、豪華そうなティーポットが置かれている。

小百合さんは微笑みをたたえ、やっぱり豪華そうなティーカップを片手に持ったまま、ゆつたりとしたペースで口を開く。

「ふふつ、まあまあ、落ち着いて。息吹ちゃん、せっかくだからあなたも一緒に、お紅茶でもどう？」

ティーカップは、テーブルの上にいくつか用意されていた。
ガーデンチェアも全部で四脚あるし、どうやら最初から誰かを招く準備は万端だったようだ。

わたしに紅茶を勧めてくる小百合さんの様子は、見る限り、普段と変わらないように思えた。

ほのぼのと屋上でのティータイムを楽しんでいたところに、わたしが踏み込んできただけなの？

ゆりかごさんはさっき、わたしを屋上へ導こうとしていた。

それはわたしをここに向かわせるのが目的ではなくて、実際には単なる時間稼ぎだったとか？

だけど……。

小百合さんがおかしいのは明白だ。

いくら雰囲気は普段と変わらないように見えても、こんなに暗雲が垂れ込める不気味な空の下でティータイムを楽しむなんて、ありえるはずがない。

これだけ激しく強風が吹き荒れているというのに、小百合さんのいる辺りだけ、まるで台風の目に入っているかのように風が止んでいるのも不自然だ。

それ以前に、どうして学園長である彼女がこんな場所にいて、ティータイムを楽しんでいるのか。

そもそも学園内でそんなことをしている状況からして、常識から逸脱している。

確かに普段からちょっとしたほほんとしすぎている彼女ではあるけど、でも決して常識外れな人ってわけじゃない。

疑問が頭の中を駆け巡り、わたしは思わず沈黙してしまっていた。

「あら？ 息吹ちゃん、どうしたの〜？」

痺れを切らしたのか、再び問いかけてくる小百合さん。

彼女の声が引き金となり、わたしは自分が置かれた現状を思い出す。

そして、

「小百合さん！ 学校中が……世界中が大変なんですよ！？ なにをのんきに紅茶なんて飲んでるんですか！」

思いつきり怒鳴りつけるように大声をぶつけた。

急な反撃は予想外だったのだろうか。小百合さんは一瞬ギロリと睨みつけるような視線を向け、ガーデンチェアーからゆらりと立ち上がった。

「ふふっ、なにをのんきに紅茶なんて飲んでいるかですって？」

じつとりとした視線をわたしに送り、小百合さんは言葉を続ける。

「それはわたしが、今のこの状況を作り上げた張本人だからよ」
「え？」

彼女の言っている意味が、よくわからない。

いや、わかりたくなかっただけかもしれない。

そんなわたしに、小百合さんは勝ち誇ったような笑みを向ける。

「つまりわたしも、神に選ばれた人間だと、そう言っているのよ」

言われるまでもなく、今の小百合さんがわたしの知っている彼女ではないことは、明らかだった。

実際に別人……ってことはないと思う。

こんなに似ている人なんて、一卵性の双子でもなければいないはずだ。でも、小百合さんに双子がいるなんて話、聞いたことがない。とすると、今の彼女が操られているか、それとも普段の小百合さんのほうがニセモノだったか、そのどちらかだと考えられる。

そして今のこの状況の中で平気なことから考えて、ゆりかごさんや優季くんと同じく、彼女も神様に力を与えられた人間だというのは確かだろう。

だけど、信じられない。

自分がこの状況を作り上げた張本人だと、小百合さんは語った。

つまり、全世界規模でウィルスをまき散らし、神々の戦いの舞台とすべくこの学園を暗雲で覆い尽したのは、彼女の力によるものだということになる。

そんなにも強大な力を与えられた人を相手に、戦わなければならないの？

わたしに与えられた能力なんて、選択肢が視えるっただけなのに……。

勝てるわけじゃない！

だいたい、本当の両親が亡くなってからずっと育ててくれた小百合さんと戦うなんて、そんなこと……。

わたしが躊躇しているのを見て、満足そうに微笑む小百合さん。

「あなたの考えていること、手に取るようにわかるわ。家族ですものね。でも、まだ気づいてないの？ 息吹ちゃんったら、相変わらず、鈍いわねえ」

彼女の言葉に合わせて、奥側にあつた鉢植えの陰から、ふたつの人影が姿を現す。

それは、ゆりかごとさんと優季くんだった。

「ふたりを、人質にするつもり！？」

わたしは小百合さんを睨みつけながら叫ぶ。

ゆりかごさんたちも、神様に力を与えられた人間だというのは、すでに聞いている。

だから、戦うべき相手ではあつた。

でも、それ以前にわたしの、大切な友達なのだ。

それを知っている小百合さんは、わたしの迷いを誘い戦意を削ぐために、ふたりを人質に取る作戦に出た、ということか。

わたしはそう考えたのだけど。

小百合さんは、ふっと鼻で笑う。

「なにを言ってるの？ おふたりは最初から、こちらの軍勢なによ？」

……え？

目を丸くしているわたしを、小百合さんは面白そうに眺める。

その両隣に、ゆりかごとさんと優季くんは寄り添うように立ち、そして同じように微かな笑みを浮かべた。

相変わらず、甘ちゃんですわ。うん、そうだね。

ふたりの瞳が、そう語っているかのような黒い輝きを放っている。そんなふうに見えて、わたしはとっさに目を逸らした。

「ふふつ、わたしは連合軍の総指揮官なのよねえ。おふたりにはそれぞれ、あなたを監視する役目を与えていたの」

うつむき、現実から目をそむけようとしているわたしに、小百合さんは物語を読み聞かせる母親のような優しい口調で語る。

「それは今回の覇権争いで勝つための布石……。ずっと前から、準備していたのよ？」

聞きたくなかった言葉。

わたしの今までの時間が……楽しかったあの日々が……音もなく崩れ去ってしまう、悪魔のごとき言葉。

耳を塞ぎかけるわたしの頭に、声が響く。

——現実から逃げてはダメ！

そよぎさんが叫ぶ。

そうだ……。逃げちゃダメだよ……。――

わたしは顔を上げ、三人をじっと見据える。

そしてさっきの小百合さんの言葉を、頭の中で反芻してしっかりと噛みしめる。

連合軍の総指揮官って言ってたよね？

神様の連合軍ってこと？

わたしは、三人まとめて……。ううん、もしかしたら他にもいるのかもしれないけど、複数の人から成るグループと、ひとりで戦わなくてはいけないの？

——状況から見て、そういうことになりそうね……。

そよぎさんの声が、再び響く。

今度の声は弱々しい。彼女にとっても、想定外の事態なのだろう。

わたしはさらに、小百合さんが語った別の事柄について考える。

ゆりかごとさんと優季くんは、小百合さんに指示され、わたしを監視していた。それも、ずっと前から……。

ということは……。

「それじゃあ、ゆりかごさんのことを親友だと思っていたのも、優季くんと仲よくなつて楽しくお喋りしたのも、全部偽りだったっていうの！？」

頭の中だけで考えるつもりが、思わず口について悲痛な訴えが飛

び出していた。

「そうねえ。すべて作戦のうちだった、ということになるわね。」

ふふつ。小百合さんが笑った。

ふふふ。くすつ。ゆりかごさんと優季くんも笑った。

あはは……。わたしも、思わず笑っていた。

乾いた、笑いだった。

「どうですか？ まだ戦う気力があるかしら？ ふふつ、弱虫な息吹ちゃんには、そんなの無理よね？」

言葉が出ない。

「あなたはただ、負けを認めればいいのよ？」

小百合さんは一歩、前に出る。

「さあ……！」

そしてゆっくりと迫ってくる彼女。

……負けたら、どうなるのかな……。

ぼつりと、そんな弱気な疑問が頭の中に浮かんだ。

その瞬間、わたしは思い出した。
幼い日、お母さんと交わした、あの約束を。

「勝つんですよ！ 未来のために！」

「うん、わたし、まけない！ ぜったい、かつ！」

もしかしたらお母さんは、わたしにこういう事態が訪れることを知っていたのかもしれない。

神様であるそよぎさんがわたしに与えてくれた能力は、選択肢が視えるというもの。

お母さんはおそらく、そうなることもわかっていたのだろう。

だからこそ、小さなわたしと手をつなぎ、いろいろと質問して選ばせていたのだ。

神々の戦いで能力を存分に使えるための訓練として――。

キッ……と、決意を込めた鋭い視線を小百合さんに向ける。

今まで見たこともないわたしの迫力に、小百合さんはどうやら戸惑っているようだ。

「あ……あら、反抗的な目つきですわねえ？」

「お母さんとの約束だから……。わたしは、絶対に負けません！」

力強く言い放つわたしに、小百合さんは明らかな不快感を表す。
一步一步踏み出されていた彼女の足も、無意識にだろつか、いつの間にか止まっていた。

「いまましいですわねえ、あの女……。死んでもなお、わたしの邪魔立てをしてくるなんて……。」

苦々しく吐き出された彼女の言葉に、わたしはショックを隠せない。

「さ……。小百合さん……。！ 小百合さんはお母さんの親友だったんじゃないの！？」

わたしの悲痛な叫び声を浴びた小百合さんは、ふつ……。と哀れみのような視線を向けてくる。

「親友？ ふふつ、わたしはあの女を、ずっと恨んでいたのよ？」

小百合さんの艶やかな唇が開かれるたびに、わたしの心はズタズタに引き裂かれてゆく。

お母さんのことを――親友だったと聞いていたお母さんを、あの女呼ばわり。

憎しみをありありと浮かべた般若のような形相の小百合さんを見れば、恨んでいたというのが嘘や偽りでないことは明らかだと思えた。

ズキズキと痛む胸を右手で押さえるわたしに、彼女はさらなる衝撃をぶつける。

「わたしから爽時さんを奪った、あの女を……。！」

えっ……。！？

疑問も質問も詰問も、いや、どんな言葉でさえも、わたしの口からこぼれ落ちることはなかった。

どういつ……こと……？

頭の中でゆっくりゆっくり考えてみる。

爽時……というのは、わたしの本当のお父さん……。

つまり、本当のお母さんと結婚して、わたしを育ててくれた人……。

小百合さんはお母さんと学生時代からの親友で……。

お父さんを、お母さんが、小百合さんから、奪った……？

でも……でも……小百合さんには今、旦那さんが——幸人さんがいるじゃない……。

忙しくてすれ違いも多いみたいではあったけど、幸せそうだとずっと思つてた……。

それに、お父さんとお母さんが交通事故で死んでしまったあと、わたしを引き取って育ててくれたのに……。

小百合さんがお母さんを、ずっと恨んでいたなら、どうしてそんなことを……？

——もしかしたら、タイミングさえあれば、息吹さんを亡き者にしようと考えていたのかもしれないわね。

そよぎさんがわたしの思考に割り込んでくる。

ズキズキズキ。胸が痛み続ける。

——それどころか……もしかしたら、あなたの両親の事故に小百合さんが関与していた、なんてことだってあるかもしれないわ……。

少々遠慮がちにはあったけど、そよぎさんは苦々しい声を響かせる。

そ……そんな……ありえない……！

とは思っものの、すべてを否定しきれるような状況でもないだろう。現に今、小百合さんはわたしの目の前で、憎々しげな鋭い瞳を向けているのだから……。

「お母さんの事故……」

わたしは思わずつぶやきを漏らしてしまっていた。

小百合さんはわたしに冷たい視線を向ける。途中で止めはしたけど、わたしの考えていることは伝わってしまったのだろう。

「……あらあら、あの交通事故もわたしが起こしたのかって訊きたいのね。ふふっ、さて、それはどうかしらねえ？」

にやりと、冷めた微笑みをこぼす小百合さん。

否定してほしかったのに……小百合さんは曖昧に言葉を濁しただけだった。

やっぱり、そういうことなの……？

両足がガクガクと震え、今にも倒れてしまいそうなわたしの姿を目にしても、小百合さんはいつもような優しい笑顔を見せてくれないなかった。

「……ともかく、神の力を得たわたしたちのような人間が、すべてを支配するのは当然の権利なのよ！」

彼女は大きくそう叫びながら、でもなぜか、一步その身を退ける。

「作戦変更です。さあ、ふたりとも、息吹さんにすべての力をぶつけて、黙らせてあげなさい！」

小百合さんの号令を聞くやいなや……いや、状況を見て予測していたのだろう、号令と同時に、もしかしたらそれよりも早く、ゆりかさんと優季くんが飛びかかってきた。

友達であるはずの、わたしに向かつて――。

――わっ、これはヤバいわ！ ふたりとも、全力をぶち込んでくる気よ！ 息吹さん、どうするの！？

そよぎさんも慌てた声を上げる。

だけど、どうしたらいいっていうの！？

飛びかかってくるふたりの姿は、尋常でないほどのパワーを溜め込んでいるのか、ピカピカと光り輝き、薄暗い暗雲の垂れ込める屋上を照らし出しているように見えた。

おろおろするだけのわたしを奮い立たせるように、そよぎさんのさらなる大声が響く。

――あんなのを食らったら、確実に死んでしまうわ！ 死なないためには、力を跳ね返すしかないっ！

で……でも、そんなことをしたら……。

わたしの嫌な想像は、的確に真実を捉えていた。

――ええ、ふたりが……死ぬわ！

ゆりかさんと優季くんが、死ぬ……？

すぐには理解することができなかった。

いや、理解したくなかった。

ふたりが飛びかかり、わたしに力をぶつけてくるまでの時間は、

ほんの一瞬でしかなかったはずだ。

でもその時間は、わたしにはスローモーションがかかっているように感じられた。

とはいえ、時間が止まることはない。

どんなに一生懸命願っても、残酷に過ぎ去ってゆく。

ゆりかごさんと優季くんの姿は、もうすぐ目の前にまで迫っていた。

刹那、頭の中に選択肢が浮かび上がる。

『力を跳ね返して、ふたりを吹き飛ばす』

『観念して、自分が犠牲になる』

——息吹さん、早く！

選択を急かすそよぎさんの声が、わたしの脳裏いっぱいに広がった。

一瞬の迷い。

悪い癖が出る。

そしてたった一瞬だけの迷いが、わたしの死を決定づける……はずだった。

だけど……。

目の前で光り輝くこぶしを振り上げたまま、それでも躊躇しているのか、ふたりはぐぐぐ……とその腕を止めていた。

「ふふっ、さすがにお友達を手にかけるのは苦しいようですね。友情のなせる業かしら？」

面白い見世物を楽しんでいるかのように、小百合さんは笑みを浮かべる。

「ですが」

彼女はすぐに笑顔を真剣な表情の裏に引っ込めると、こう言い放った。

「後戻りはできないわよね？ ここで力を止めてしまったら、せっかくわたしが拡張してあげたパワーが暴発してしまうから」

にやり。

さあ、どうするの？

小百合さんは表情だけで問う。

暴発したらどうなるのか——それは考えるまでもないだろう。

『力を跳ね返して、ふたりを吹き飛ばす』

『観念して、自分が犠牲になる』

わたしを急かすように、頭の中の選択肢が明滅し始める。

究極の選択。

ふたりを殺すか。
わたしが死ぬか。

二者択一。
揺れる心。

そんなわたしをあざ笑いながら、小百合さんが問いかけてくる。

「息吹さん、さあ、どうするの？ お友達を、手にかけることができる？」

……………。

「ふふつ……………。できないわよねえ？ もつ、流れに身を任せてはどうかしら？」

……………。

「大切な親友と、大切な恋人……………にはまだなっていなかったかしら

「？　ともかく、そんなふたりに殺されるなら、本望ではなくて？」

.....。

わたしは答えない。

いや、答えられない。

そんな中、わたしを急かすそよぎさんの声が再び鳴り響いた。

——息吹さん、早く.....！　あたしの力じゃ、もう抑えきれない.....！

苦しそうな声。

そうか、そよぎさんがふたりを止めてくれていたんだ。

小百合さんが拡張したというパワーを全力でぶつけてくるふたりを——。

そよぎさんの声は苦しそうに震え、一刻の猶予もないことを物語っていた。

.....　ありがとう、そよぎさん。考える時間を与えてくれて。わたしは決断する。

もう、迷わない！

だって、お母さんと約束したんだもん！

わたしは負けない！　絶対に、勝つ！

大きくひとつ息を吸い込み、迷いを振りきった力ある言葉を勢いよく吐き出す。

「わたしの答えは.....。こつよ！」

× 『力を跳ね返して、ふたりを吹き飛ばす』
× 『観念して、自分が犠牲になる』

両方の選択肢を、打ち消す。
どちらも、選ばない。

それが、わたしの選択だった。

——もう、ダメ……！

わずかの差で、そよぎさんが力尽きる。
ゆりかさんと優季くんの光り輝くこぶしが、残光を従えながら
振り下ろされる。

衝撃は——ない！

わたしは紙一重のところで、二方向から襲いくる閃光を避け、
そして、

嘲笑を張りつけたままの小百合さんへと、飛びかかる！

今までに感じたことのない、
最大級の怒りを爆発させながら！

「わたしの大切なお友達を利用するなんて、いくらここまで育てて
くれた小百合さんでも許せない！ 小百合さん、わたしはあなたを
倒します！」

勝てる公算があつたわけじゃない。
闇雲に突っ込むだけの、稚拙な突撃だった。
だけど、怒りに身を任せたわたしは、どんな分厚い壁さえもぶち

破れるほどの勢いに乗っていた。

追い風の後押しを受け、あたかも龍になったかのごとき早業で、稲妻を背負って一直線。

これで、終わりよ！

わたしはそのまま小百合さんに、全身全霊を込めた体当たりをぶちかます。

だけど――。

「……そう来ると思っていたわー！」

小百合さんはいともあつさり、両腕で受け止めたではないか！

ああ、わたしのすべてを賭けた一撃が……！

最後の希望は、絶たれてしまった……。

待っているのは……死？

だけど、待っていたのは、もっと別のものだった。

ぎゅっ。

温もりが全身を包む。

気づくと、小百合さんがわたしを抱きしめていた。

「合格よ、息吹ちゃん」

「え？」

呆然とするわたしの背中には、さらに別の温もりが加わる。

そして肩にも、トンと温かな手のひらが乗せられた。

「あ……あれっ?」

わけがわからず、キョトンとしているわたし。

——ようやく、連合メンバー集結ね。

「うん、やっとだね」

「ふふふ、なかなか楽しい余興でしたわ」

「ふふっ、そうねえ」

そよぎさんの声に、優季くん、ゆりかごさん、小百合さんがそれぞれに答え、笑顔をこぼす。

「え? ええ? ええええっ?????」

小百合さんに抱きしめられ、背中からはゆりかごさんにそつと寄り添われ、肩には優季くんの手のひらが乗せられた状態のわたしは、ただひたすらに疑問符を飛ばしまくることしかできなかった。

いつの間にか晴れ渡った空のもと、特別教室棟の屋上には、ガーデンチエアーに腰かけた四人の姿があった。

それはもちろん、わたしとゆりかごさん、優季くん、そして小百合さんだ。

腰を落착け、改めて紅茶が用意されたあと、そよぎさんが、そよ風のような穏やかな声で喋り始めた。

——吐息さん……息吹さんのお母さんは、あたしと心を通じ合わせていたの。

わたしたちは黙って耳を傾ける。

そう、わたしたち。

わたしだけでなく、ゆりかごさんと優季くんと小百合さんにも、そよぎさんの声は聞こえているようだった。

どうやら、頭の中に語りかける範囲をある程度広げることもしやすい。

——つまりね、吐息さんはあたしが選んだ人間だったのよ。息吹さんの前に、ね。

だからこそ、お母さんはわたしの手を引きながら、あなたは神様だから頑張らなくてはいけない、と言って、質問を繰り返しては答えさせ、選択肢能力を訓練していた。

そよぎさんはそう語った。

——小百合さんたち三人は、神々の派閥のうちのひとつ、そよ風連合のメンバーよ。そして吐息さんも、連合メンバーのひとりだっ

た……。

「ですが吐息さんは、亡くなってしまった……。それによって連合からは除名扱いになっていたの。」

小百合さんがそよぎさんの言葉を継ぐようにつぶやいた。

「連合のメンバーは普通、十五歳になったら、親から役目を受け継ぐらしいんだ」

「ですから、わたくしも優季さんも、すでに役目を継いでいたの。小百合さんはお子さんがいらっしやらないので、継続しておりますが」

優季くとゆりかごさんも、説明を加えてくれる。

——息吹さんをどうするかは、連合でも意見が分かれていたの。吐息さんは除名されていたけど、娘である息吹さんがすでに十五歳になっていた。これを機に復帰させてもいいんじゃないかって。

「それで今回、再加入のためのテストが実施されることになった、というわけなのよ」

「騙してしまうような形で、心苦しかったけどね」

優季くんはわたしに向けて困ったような苦笑を浮かべていた。

そっか……。やっぱり優季くんは、わたしのことなんて……。

沈んだ表情になったわたしに、ゆりかごさんが優しく話しかけてくれる。

「優季さんは、息吹さんの親戚にあたる人なんですよ？ あなたのお父さん——爽時さんの弟さんが、優季くんのお父さんなのです

わ

「え？ そうなの……？」

全然知らなかった……。小さい頃から、親戚つき合いとか、まったくなかったし……。

「だけど、そうするとやっぱり、わたしは……」

優季くんと、おつき合いするとか、そういう対象ではないってことよね……。

そんなわたしの考えは、思いつきり顔に出てしまっていたのだろう。

ゆりかごさんが、にやりと笑いながら言い放った。

「でも、いそこ、ということになりますから、結婚だってできるんですわよ？」

「け……！？」

結婚って！ そそそそそ、そこまで考えてなんて……！

慌てて真っ赤になるわたしを、ゆりかごさんは面白そうに指差しながら、おなかを抱えて笑っていた。

ゆりかごさんの笑い声が消えると、不意に小百合さんがポツリとつぶやいた。

「吐息さんは、ちょっと変わった人だったわ」

そして、どこか遠くを眺めるような瞳を青く澄み渡った空へと向ける。

「彼女はわたしと一緒に藤星女学園に通っていたお嬢様だったの。学生だった当時、吐息さんと一緒にお散歩していたときだったかしら、春雨高校の生徒だった爽時さんと偶然知り合って、それからずっと仲よくしていたわ。」

吐息さんと同じように、実はわたしも彼に惹かれていたの。ふっ、爽時さんは、優季さんとそっくりだったのよ。優しいような笑顔が、とってもまぶしかったわ。」

でも、爽時さんが選んだのは吐息さんだった。高等部を卒業したあと、吐息さんは家族の反対を押し切って、爽時さんと結婚したの。」

裏切り者、なんて思いがないわけではなかったわ。でもね、わたしは吐息さんのことを恨んでなんていないわよ。あの子は——吐息さんは幸せそうに笑っていたから……。

それからしばらくして、わたしも今の夫と知り合って幸せになったの。吐息さんを羨ましく思っていた当時の自分にも終止符を打てた瞬間だったわ。」

いつもどおりの、やけにのんびりとした口調で、彼女は長い長い思い出の時間を噛みしめるように語ってくれた。

「小百合さん……。さっき、お母さんのことをずっと恨んでたか、いまいいとかって言うてたのは……。」

「もちろん演技よ。吐息さんとわたしは、とっても仲よしだったわ。」

しれつと答える小百合さん。

でも、にこつと咲かせた彼女の笑顔は、わたしの心を温かく包み込んでくれた。

「あつ、それじゃあ、お父さんとお母さんの事故は……」

「もちろんわたしが起こしたわけじゃないわ。隣を走っていた大型トラックのタイヤがパンクして、巻き込まれる形で起きた悲しい交通事故だったみたい……。ただ、わたしが息吹さんを預かってふたりでの旅行に行かせたわけだから、責任を感じる部分はあるけれど……」

わたしの言葉に答え、小百合さんは目を伏せてしまう。

「そ……そんなの小百合さんのせいじゃないです！ 責任を感じる必要なんて全然ないですよ！」

慌てて取り繕うわたしに、小百合さんは小さく、ありがとうだけ言葉を返してくれた。

小百合さんの気持ちが悪くまで少し待ってから、そよぎさんを筆頭とするそよ風連合メンバーの一同は、さらに説明を続けた。全世界規模のウィルスというのは、実はまったくのたまたまだ。

ただ、一応神であるそよぎさんたちは、学園内程度の範囲にならば力を及ぼせる。

——あたしってば神様だからね、これでも。うふふ、思う存分敬いなさい。

なんて言っているそよぎさんは、すっぱりと無視させてもらったけど。

ともかくそうやって、学園内を暗雲で覆い尽くし、生徒たちの精

神にも影響を与え、舞台を整えた。

学園にたどり着くまでは、そよぎさんが力を使って、わたしに幻覚を見せていた。

登校してくる途中に誰も人が通らなかったり、学園を暗雲が覆っているように見えたりしたのも、その幻覚によるものだ。

実際には、外から学園を見ても普段どおりの風景にしか見えず、騒ぎになったりもしないようだ。

お嬢様たちが地べたに寝っ転がっていたのは、起きたまま夢を見させているような感じだったらしい。

あんな状態ではあったけど、記憶にも残らないから心配いらないと、そよぎさんは言いきった。

どう考えても制服とかが汚れていると思うし、ホントに大丈夫なのかな……。

それから、ゆりかごさんが見せてくれたケータイの映像は、そよぎさんの力で映し出した架空の映像だったという。

——今どきの神様は、ハイテク機器にも精通しているのよ。神様の力ってのは、すごいんだから。

なんて言っていたけど、それならもつとスマートなやり方でわたしをテストしてもよかったんじゃないや、と思わなくもない。

スマートじゃないやり方といえば、優季くんと渡り廊下で言い合いをしていたときの爆発も、ひどかったと思う。

あれもどうやら、そよぎさんの力によるものだったらしい。

——もしあそこで抱き合ってラブラブ状態になったりしたら、テストもへったくれもなくなっちゃうでしょ？

なんて平然と言い放つそよぎさんではあったけど、そのせいで顔にすり傷ができたというりかごさんから文句を言われると、素直に謝っていた。

神様なのに、ゆりかごさんには敵わないのかも。そよぎさん、ちよつと可愛い。なんて考えたら、思わず笑みがこぼれた。

それはともかく。

神々の覇権争いがどうのこうのという話自体は、どうやら嘘ではなかったようだ。

——神様の世界つてのも、なかなか面倒なものでね。上手く力関係の均衡を保つ必要があるの。だからね、息吹さん。あなたの力が、あたしたちの連合には必要なのよ。

「うーん、なんていうか、仕方ないけど人手が足りないから、除名されてるわたしを復帰させよう、みたいなノリにも思えるんだけど……気のせいかなあ？」

わたしのつぶやきに、なぜだか誰も答えてくれなかった。

——と……とにかく、これからお願いね！

「……うん」

ちよつと納得のいかない部分はありつつも、わたしは頷く。

「それでは、こう言すべきかしらねえ？」

小百合さんが場を締めくくるようにガーデンチェアから立ち上がると、こう言った。

「お帰りなさい」

「……ただいま」

空の上から見守ってくれているお母さんの意思が、わたしの口を通じて滑り出していったような、そんな気がした。

「今日は暑いすわね、息吹さん」

「うん、そうね、ゆりかごさん」

わたしとゆりかごさんは、カフェで昼食を堪能したあと、恒例のお散歩を楽しんでいた。

先日的一件なんてなかったかのように、平穏無事な学園生活が戻っている。

すれ違っお嬢様たちの中には、あのとき地べたに転がっていた人の姿も見受けられる。

そよ風連合だとかいう、そよぎさんたち神様の力で、あんなふうになっていた生徒たち。でも誰ひとりとして、そのことを記憶している人はいないようだ。

そりゃまあ、あんなことを覚えていたら絶対にいろいろと問題になっってしまうだろうけど。

何度考えても、あそこまでする必要はなかったように思うのは、わたしの気のせいだろうか。

……もしかしてそよぎさん、退屈しのぎにあんなことをしてたんじゃない……。

——……………。

そよぎさんは答えてくれなかったけど、視線を明後日の方向に送って、必死にごまかしていそうな気が……。

慣れてきているからなのか、姿までは見えなくとも、なんとなく彼女の様子が感じられるようになっていたりする。

それに、変な能力を与えられたり、神様の連合だかに強制的に加入させられたり、なんだか普通の女の子からどんどん遠ざかっていくように思えなくもない。

わたしには相変わらず、選択肢が視える。

でも、だからどうしたってわけじゃない。今までどおりなただけだ。だいたい、選択肢が提示されても、強い意思があれば無視できるってわかったし。

未来には無限の可能性が広がっているのだ。

一緒に歩くとき、ゆりかごさんは左手でわたしの右手を握る。彼女の能力もまた、健在だ。

……ってことは、わたし、思考を読まれてるってことよね……。

そう考えるとちょっと恥ずかしいけど、でも、ゆりかごさんならいいか、とも思える。

だって彼女は、わたしの大切な親友なのだから。

「まあ、嬉しいことを考えてくれておりますわね」

ゆりかごさんも喜んでくれたし、ま、これでいいんだよね？

ぎゅっ。

わたしは彼女の手を握り返して、まぶしい日差し of 降り注ぐ並木道を歩いていった。

ゆりかごさんたちの力も、それぞれの神様——そよぎさんとは別の、そよ風連合メンバーである神様から与えられたものなのだろう。

そよぎさんからは、来たるべき神々の連合同士の覇権争いに備え、各自訓練を続けること、なんて言われたけど、いったいどうしたらいいものやら。

そういえば、小百合さんは神様から与えられた力で先日のあの状況を作り出した、みたいなのを言っていた。

なんだか小百合さんだけ、わたしたちとは別格のすごい力なんだなと、すべてを聞いたあとにぼーっと考えていたのだけ。

彼女は嘘をついていた。

暗雲で学園を包み込んだのとか、生徒たちをおかしくしたのとかって、実は連合の神様たちの力によるものだったようだ。

それじゃあ、小百合さんの能力って？ と訊いてみたら、ティータイムに誘って敵対心を薄れさせるもの、だとか。

なんだかわたしたち四人の能力って、どれもこれも、いまいち戦いに向いていない気がするんだけど、どうなのかな……。

ゆりかごさんは、十五歳になった日、神様が頭の中に声をかけてきて、能力についての話を聞かされたらしい。

でも、そよぎさんの存在とか連合の存在とか神々の覇権争いとか、そこまで説明されてはいなかったみたい。ただ、与えられた能力のことを聞いていただけ。

ゆりかごさんったら、面白い力を手に入れましたわ、と思ってほくそえんでいたのだとか。

それでべたべたとわたしに触れてきたりしていたのね。

と思つたら、「息吹さんのことを大好きな気持ちには本物ですわよ？」なんてのたまう。

もう、どこまで冗談なのか、よくわからないよ。

と、そんなことより。

わたしは今、優季くんと、その……っ、つき合ってます。

ちょっとまだ恥ずかしいのだけど、でも、わたしがひと目惚れして、声をかけて、優季くんも気にかけてくれて……っというお互いの気持ちに、神様の能力とかは一切関係なかった。

優季くんは、十五歳になった去年から連合のメンバーだったのは確かだけど、実は先日的一件まで覚醒していなかったんだって。

わたしと優季くんがいとこだと、あるとき聞いて驚いたけど。どうやらわたしだけではなく、優季くんも知らなかったらしい。

ゆりかごさんの後押しもあり、小百合さんも応援してくれて、今では晴れて、わたしと優季くんは恋人同士ということになっている。……でも、つき合っているのがどんな感じなのか、いまいちゃわからないままなのだけ。

優季くんと毎日のように会ってはいるものの、お勉強会と称して家に上げてもらう以外、ほとんど挨拶と軽い会話程度なんだもん。

ま、べつにいいけど……。これがわたしたちらしいつき合い方、とも言えるわけだし。

それにしても、神々の覇権争いだとか、変な能力を与えられたりだとか。

なんだかとっても、おかしい状況なのかも、と思わなくもない。

だけど……。

ゆりかごさんがいて――。

優季くんがいて――。

小百合さんがいて――。

うるさいけど、頭の中にそよぎさんがいて――。

――うるさいは、余計よ！

……文句を言っているそよぎさんは無視しつつ。

毎日それなりに楽しい日々。

覇権争いがどうのこうのと言っていたけど、今のところ、とくにこれといって変わったことはない。

――均衡が保たれている証よ。

そよぎさんは、さらりと言う。

……そっか。それなら、いいよね。このまま平穩という名の幸せに身を委ねていても。

天国から見守ってくれているお母さん。

わたしは今、みんなに囲まれて幸せです。

だから、安心してね。

お母さんへの報告の言葉を頭の中で奏でると、不意に温かなそよ風が吹き過ぎていった。

それに合わせて、脳裏に浮かび上がってくる選択肢。

『続く』

『終わる』

……ねえ、どうするべきだと思うっ？

○ 『続く』

× 『終わる』

考えるまでもないよね。

うん、そう……。

未来は果てしなく、どこまでも続いていくのだから――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0153y/>

イノセント・アライブ ～命の選択と荒ぶる息吹～

2011年11月15日13時07分発行